

Z32-B88

金の星

第七号



Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 8

童話作家協會

日本童話選集



附錄——日本童話史・會員著作年表（昭和並に）

編輯 川上四郎

岡本歸一 村山知義 武井武雄 初山滋

繪畫會員——秋田雨雀・飯谷藤村・安倍季雄・巖谷小波・岩井信實・宇野浩二・小川未明・小野政方・小寺巖吉・尾關若二・神野岩三郎・北村壽夫・久禮島武彦・柳田正雄・酒井朝彦・池澤青花・相馬泰三・千

葉省三・豐島與志雄・中島

孤島・長尾豊・野邊地

天馬・濱田廣介・

藤澤衡彦・馬淵

玲佑・前田島

兒童の爲め

學校及家庭の文

庫に愛藏せらるべき

新興童話の傑作集（二著）



小川未明著

初山 滋柳 武井武雄 校訂

未明童話集

第一卷

菊判 四八〇頁 定價 三圓
美裝 四八八葉 送料 廿七錢



東京日本橋通

丸善株式會社

東京・三田・早稲田・丸善・ルビ克

大戸阪
京都
名古屋

横濱
福岡
仙臺
札幌

目次

山登り	(表紙・石版)	岩岡さも枝
波路はるばる	(口絵・三色版)	寺内萬治郎
おたまじやくし	(童話)	野口雨情
同作	(二)	本居長世
捨てる神があれば	(童話)	久米正雄
インデヤンの子と野鼠	(童話)	立石美和
デエメリヤの馬鹿	(童話)	泉雪江
花	(童話)	野口雨情
或る魔法使の話	(童話)	原田謙次
須磨寺の豹	(童話)	横田貴美衛
草の	(大人篇)	野口雨情
頼光の四天王	(長篇)	川崎春二



少年輕業師	(童話)	三井信衛
大發明家エヂソン	(童話)	廣瀬龍太郎
む	(童話)	野口雨情
トラがネコになつた話	(童話)	西川喜平
煙突掃除夫になつた男の子の話	(童話)	足立孝平
大石主税	(長篇)	三島霜川
かへ	(子供篇)	野口雨情
二勇士の失敗	(童話)	沖野岩三郎
水泳	(童話)	三木露風
し	(童話)	齋藤佐次郎
通	(童話)	
研	(童話)	
出	(童話)	
讀者	(童話)	



るばるは路波



畫郎治萬内寺



鳥の女魔

譯生先郎二本山
畫史女枝もと岡岩

『金の星』で大評判になった『魔女の鳥』が立派な本になつて發行になりました。あの面白いお話に、岩岡先生の美しい澤山の挿畫が入つてゐるのですから實に、本です。
達麻といふ支那の少年が、魔女の鳥を手に入れて機々の冒險を冒し、大地震で壊れた天子様の宮殿を修理し、遂には支那の王子になるといふお話で、その間には不思議な小人や、魔女のお婆さんや、美しい銀髯微笑が現れたりして、此の上ない面白いお話です。(定価六十錢 送料十錢)

白鳥の騎士

ワグネル物語(世界少年少女名著)

世界一の歌劇の作者であるドイツのワグネルの物語の中でも、最も有名な面白いお話『白鳥の騎士』『王女の死』『歌競争』の三つが、こゝにいよいよ美しい本になつて出版されました。

樺山千代先生編 定価九十錢
岩岡とも枝女史畫 送料十錢
是非一度はお讀み下さい。雄大なスバラシク面白い物語りです。
皆さん、樂聖ワグネルを知らぬは恥です。
この本によつてワグネルをお知り下さい。



出世の タンコブ

(一) ベンスケハ小学校チイウト
ワテソツケフシマシタガ、イヘ
ノツガフア中學校ヘエケナイノ
ヲヒクワンシテカンガヘナガ
ラアルイデキマシタ。



小學校卒業後

イロ／＼ナ事情ア上ノ學校ヘ行ケナ
イ諸君ハ今スケ大日本國民中學會ヘ
入會シテ日本一ノ中學讀義録ヲ勉強
ナサイ。

(二) ソシテデンチユーニイマ
トイウホドアタマアアツケマ
シタソシテオ、キナコブアチコ
シラヘマシタ。ベンスケ「アツ
イタイオ、キナコブガアキタ
ゾ！オヤナニカカイデアル
ゾンデミヨウ」



僅か一年半で中
學卒業の學力と資
格が得られる。

(三) シアノカデ、リツパニ
中學ガソツケフデキルドクガ
クシヤノミカタ大日本國民中
學會「トソコニカイテアツタノ
デス。ベンスケハヨイギロクア
ベンキヨウチハシメマシタ。



(四) サワイウサケアサタシハ
シユツセラシタノデス。ダカラ
ワタシニハコノタンコブトコ
ノヨイギロクガタカラデス」ト
デコヤマセンセイガオツレヤ
イマシタ。



◎入會するには今が一番好いときてす
講義録見本規則書申込の無代で送呈

東京
駿河臺

大日本國民中學會

振替東京四二〇〇番

電話神田

一一一
一一一
三二一

金の星社出版



大好評!!!

少年少女で『ピーターパン』の名を知らぬ者が不在に有名になりました。世界的童話の一つとして、誰でも読むやうになりました。英國のバリー卿の書いたものでありますが、各國でいろいろの種類の物語り體や、畫本體になつて出版され、日本にも活動寫眞になつて來て有名です。

世界名作童話大系(8) 裝幀・挿畫

立石美和先生編 羽鳥古山畫伯

ピーターパン物語

定價金六十錢・送料十錢

『ピーターパン』のお話、物語りとして日本で最初に書いたのが本社の出版になる立石美和先生で、挿畫は原書の名畫を參考にして、二十五枚の畫を羽鳥先生が一枚々々非常な苦心をして描かれましたので、畫物語りのやうな面白味があります。この頃、他の出版社からも一二此の物語りが出版になりましたが、それ等と比べていたゞいたら、本社の『ピーターパン物語』が如何に優秀な本であるかとおわかりと思ひます。

少年文學名著選集(3)

黒馬物語

永橋卓介先生譯・羽鳥古山畫伯挿畫

四六判箱入美本
内容四一〇頁
定價金壹圓廿錢
送料十錢



黒馬より。

諸君、僕は『黒馬物語』の主人公の黒馬です。かう見えても、僕はなかく利口ですぞ。恐らく諸君の内の或る人々よりは、たしかに利口であると信じてゐます。

さて諸君、諸君は僕を御存知ですか。僕は英國の有名な小説家アンナ・シーウエル女史によつて書かれた黒馬で、今では世界的に有名な黒馬となつてゐるものです。

此の物語は、僕の一生を書いたものです。僕の變化の多い、涙の出るやうな一生を書いたものです。われゝ動物が、どんなにみじめな一生を送つてゐるか、われゝが口のきけない爲めに、諸君は御存知ありますまい。しかし、一度此の本を読んで下さい。さうすれば、皆さんには何も彼もおわかりになるでせう。人間のはなしよりは遙かに興味が深いと思ひます。

金の星社出版

録目著名行發社星の金

系大傳人偉 編一第
系大傳人偉 編二第
系大傳人偉 編三第
系大傳人偉 編四第
系大傳人偉 編五第

ジャンヌ・ダルク

大木雄三先生著。有名なオルレアン少女ジャンヌ・ダルクが主立つて母國を滅亡から救ふ勇壯な物語である。各頁とも血ひたたり、涙ながらに感動的物語である。

錢十九金
錢十金送料

ローマシーザー

籍田史光先生著。シーザーは古代の大英雄である。世界歴史を通じてシーザー程の英雄は幾人と数へる程しかない。そのシーザーの變化絶りない運命を書いたのが本書である。

錢十九金
錢十金送料

ネルソン

三井信衛先生著。トラファルガーの海戦に名譽の死を遂げたネルソンの傳記である。その國を愛する赤心と、己の責任を重んずる觀念は偉大なる教訓を讀者に與へます。何人も一讀すべき名著です。

錢十九金
錢十金送料

リンコルン

久米敏一先生著。最も優れた立志傳として、この「リンコルン」をおすすめする。紙一枚、ペン先一ツ買へぬ貴しいリンコルンが、如何にして大統領の榮位をかち得たか。本書を讀まねば一生の不覚である。

錢十九金
錢十金送料

太閤秀吉

三島崙川先生著。日本の英雄として世界に誇り得るものは、太閤秀吉である。本書は、秀吉の一生をあらゆる歴史書を參考にして研究し、それを三島先生の名筆によつて面白く書現したものである。

錢十九金
錢十金送料

ナイチンゲール

入交總一郎先生著。女神様のやうに崇高な心を持つたナイチンゲールの一生を書いた本です。この人の傳記を讀んだものは誰でも、本當に清い心の人になれます。少少少女の爲に書けたはじめての本です。

錢十九金
錢十金送料

ワシントン

三井信衛先生著。アメリカを獨立させて最初の大統領になつた大偉人ワシントンの傳記です。艱難辛苦して遂に偉い人となつたワシントンのお話は、誰が讀んでも勇氣をつけられます。

錢十九金
錢十金送料

大楠公

三島崙川先生著。楠正成の傳記を正しく書いた本として、これ以上の本はありません。この本を讀んだ人は成程と正成の偉かつた事に感ぜるでせう。面白くてそして本當の正成のお話がある本です。

錢十九金
錢十金送料

ロシア。ヒーター大帝

大戸喜一郎先生著。文明に後れてゐたロシアを盛んにする爲めに、帝王の身であり乍ら造船職工にまでなり、また自分の子や妻までも殺さなければならなくなつた變化絶りないヒーター大帝の物語です。

錢十九金
錢十金送料

コロンブス

三井信衛先生著。廣い大西洋に小さな船を浮べて、遂にアメリカ大陸を發見したコロンブスの勇壯な物語です。四面海にかこまれた日本國の少年少女に、是非讀んでいただきたいと思ひます。

錢十九金
錢十金送料

録目著名行發社星の金

系大傳人偉 編六第
系大傳人偉 編七第
系大傳人偉 編八第
系大傳人偉 編九第
系大傳人偉 編十第

金社の星 世界少年少女名著大系

銭十金料送・銭十九金冊各價定・本美頗入箱判六四

編九十第	編八十第	編七十第	編六十第	編五十第	編四十第	編三十第	編二十第	編十第	編九第
シエークスピア物語	グリム童話	入繪イソップ物語	神話本古事記物語	キリスト傳新約物語	西遊記	ローマ英雄物語	聖書物語		
有名なシェークスピアの芝居の中で、童話として面白く描かれた物語。『御意のまゝ』『ベニス商人』『アムリコ』『真夏の夜の夢』『冬物語』等、是非一度は読んで置くべき物語です。	グリム童話は、ドイツの民間伝説を基に、兄弟二人のグリム兄弟が蒐集した物語。『白雪姫』『灰姑娘』『白雪姫』『白雪姫』など、多くの有名な童話がここに集められています。	イソップの物語は、古くから知られており、その面白く、そして教訓的な内容が、今でも多くの人に愛されています。	神話本古事記物語は、日本の神話と歴史を基にした物語。天照大神の御代までの神話と、天武天皇の御代までの歴史が描かれています。	キリスト傳新約物語は、キリストの生涯と新約聖書の物語。その面白く、そして感動的な内容が、多くの人に愛されています。	西遊記は、中国の古典小説。唐僧が西へ行く途中、悟空、八戒、沙和尚と共に多くの難关を乗り越え、最終的に西天に到達する物語です。	ローマ英雄物語は、ローマの歴史を基にした物語。その面白く、そして感動的な内容が、多くの人に愛されています。	聖書物語は、聖書の物語。その面白く、そして感動的な内容が、多くの人に愛されています。		

金社の星 世界少年少女名著大系

銭十金料送・銭十九金冊各價定・本美頗入箱判六四

編八第	編七第	編六第	編五第	編四第	編三第	編二第	編一第
神話オデッセー物語	アラビヤナイト	ロビン・フッド物語	大人国小人国めぐりガリバー旅行記	コロンプス物語	ドン・キホーテ	ナポレオン物語	ロビンソン漂流記
ギリシア神話のオデッセー。オデュッセウスがトロイ戦争から帰国する途中、多くの難关を乗り越え、最終的に故郷に帰る物語です。	アラビヤナイトは、アラビアの民間伝説を基にした物語。その面白く、そして感動的な内容が、多くの人に愛されています。	ロビン・フッドは、イギリスの民間伝説。その面白く、そして感動的な内容が、多くの人に愛されています。	大人国小人国めぐりガリバー旅行記は、ジョナサン・スウィフトの作品。その面白く、そして感動的な内容が、多くの人に愛されています。	コロンプス物語は、クリストファー・コロンプスの物語。その面白く、そして感動的な内容が、多くの人に愛されています。	ドン・キホーテは、スペインの古典小説。その面白く、そして感動的な内容が、多くの人に愛されています。	ナポレオン物語は、ナポレオンの物語。その面白く、そして感動的な内容が、多くの人に愛されています。	ロビンソン漂流記は、ロビンソン・クルソーの物語。その面白く、そして感動的な内容が、多くの人に愛されています。

金社

3

五廿

金社

九

七十一

金の星社發行

世界名作童話大系

錢十料送・錢十六價定・本美入箱判六四

無類の安價

第一編

魔法のバラ

悪い王子の爲めに國を運ばれた美しい王子が女神から魔法のバラをまづけられ、そのバラのおかげで、あらゆる困難から救はれるといふ面白いお話です。

第二編

ぼら博士

ぼら博士といふほど大ぼら吹きのお話です。實になんともかんとお腹をかかへて笑はすにはあられない面白いお話です。まア一度讀んでごらん下さい。

第三編

盗まれた王女

ベルンヤの不思議なお話です。リンドガルといふ王女様が悪い魔法使にさらはれたので、それを王子があらゆる困難をおかして助けに行くお話です。

第四編

親指トム

西洋の一寸法師のお話です。親指の大きさが、親指トムが、ありとあらゆる冒険を行ふ痛快な物語です。お讀みかへて笑ふ事幾度も知れません。

第五編

アラビヤン航海の巻

有名なアラビヤン・ナイトの中の一編面白い話だといはれてゐる「シンドベッドの航海」のお話です。恐らくこれ程面白い話は世界にも少ないといはれてゐます。

金の星社發行

世界名作童話大系

錢十料送・錢十六價定・本美入箱判六四

無類の安價

第六編

利口な驢馬

驢馬が自分の一生を皆さんにお話したのが此の本です。利口な驢馬だけにそのお話もほかでは聞かれない愉快なものです。見世物に出たりして、なか／＼面白いです。

第七編

大勇士

イギリスの有名な話です。ピオウルフといふ勇士が、怪物退治に出かけて、恐ろしい人喰鬼と戦つたり、海の怪物と戦つたり、最後に火龍と戦つて退治する勇壯な物語です。

第八編

ピーターパン物語

活動寫眞でおなじみの「ピーター・パン」の本當のお話を書いたものですから讀んでも一度は讀まねばなりません。これこそ本當の世界的童話だと讀んでも感心するでせう。

第九編

魔法の小人

面白い／＼童話です。お母様の病氣を治すうと藥を買ひに行く孝行な少年が、悪い小人が出て来て、さん／＼になやまします。最後には王様のおほめにあつかります。

第十編

人買物語

日本の人買物語として最も有名な「王子と安壽」のあらはな話です。三壯太夫といふ人買ひにさらはれて、さん／＼な目に過ふ話で、これ程哀れな話はありません。

金蘭社の新刊書

世界童話叢書第十三編
加治亮介編 池上浩装幀
オランダ童話集

四六判箱入美本
本文三〇〇頁
原色版四〇枚
凸版刷挿畫二十枚
定價金一圓五十錢
送料十二錢

オランダと云ふ國は、徳川幕府の鎖國時代にあつても、特に通商を許され、我が國文化の父とも云はれた。關係深い國であるだけに、我々には非常に懐しのある童話を持つてをります。殊に篇中「鬼の旅」は日本を題材としたもので、是非御一讀下さい。

少年少女文藝講義叢書第六編
小久保陽三編 池上浩装幀
由比正雪

四六判總クロース
原色版カガア附
挿畫三色版外十頁
本文一八八頁
定價金一圓
送料十二錢

今まで悪人としてのみ語り傳へられて来た、由比正雪を、王政復古を計つた大義士と云ふ新解釋のもとに書いたもので、従来の由比正雪の本にお読みになつた方も、是非この興味ある新解釋に依る本書をお味の下さい。眞の正雪の心持が必ず皆様の胸を打つ事と信じます。

少年少女科學大系第二編
松平道夫著 池上浩装幀
兒童地文學

四六判總クロース
ドイツ式裝幀
本文約一七四頁
定價金一圓
送料十二錢

吾々が住んでゐる地球は、どんな風に出来たのか、又あの恐ろしい地震は如何して起るのか、噴火、海潮等凡そ地球上に起るすべての現象の疑問は本書に依つてたちまち解かれます。

少年少女科學大系第三編
松平道夫著 池上浩装幀
兒童進化論

四六判總クロース
ドイツ式裝幀
本文一七四頁
定價金一圓
送料十二錢

人間の先祖は果して猿やうか、先祖は同じであつても時代をふるに從つて其形が變つて遂には別種のものとなると云ふやうな、人類を始めとして動物植物の進化の有様を興味深く書いた、自然界の童話ともいふものです。

少年少女科學大系第四編
松平道夫著 池上浩装幀
兒童動物學(上)

四六判總クロース
ドイツ式裝幀
本文一七四頁
定價金一圓
送料十二錢

動物は動物と云ふ事を知らないものはあるまいか、何故に動物が動物なのか、これ等の疑問も立所に氷解する本書は理科の教科書とは全く變つた興味深々たる好個の讀物です。

金の星

七月號



(通巻第九拾貳號)

東京市外 金蘭社 振替東京一〇七番 電話小石六六五番

おたまじゃくし

作曲 本居長世

作詞 野口雨情

Andantino

III

かへるになりな
おたまじゃくし

かへるになりな おたまじゃくし
おたまじゃくし かへるになりな

mf *rit.* *ff*

かへるになてひとはね はねてみな
かへるになてひとはね はねてみな

mf *rit.* *ff*

おたまじやくし

野口雨情

蛙^かになりな

蛙^かになりな

おたまじやくし

蛙^かになつて一^{ひと}はね



はねてみな

おたまじやくし

おたまじやくし

蛙^かになりな

蛙^かになつて一^{ひと}はね

はねてみな

寺内萬治郎畫



捨てる神があれば

久米正雄

岡本歸一畫

遠い昔、藤原の隆資と云ふ人がありました。これと云ふ才能の秀でた人でもありませんでしたが、いゝ家柄に生れて、學問を終えたと身分の高い家のお姫様を妻に貰ひ受け、とん／＼拍子に出世しました。かう云ふいゝ月日の下に生れ合せて仕合せの人もあるのに、今は陸奥の守に使はれてゐる源の雅道と云ふ人は、これはまた不仕合せな人で、若い頃丁度陸奥の守と同じ仲間、學問にしても、武藝にしても、極まつて一番を取るのはこの人でした。或時、學校へ天皇陛下の入りしつた時、御前で、生徒一同が詩を作り比べをしたことがありました。その時雅道の出来栄がすぐれてよかつたので、天皇陛下からお褒めのお言葉を戴きました。それに引きかへて、隆資は、出来が太變悪かつたので、受持の先生から大層叱られました。そのことを根に持つて、隆資はひどく雅道のことを怨んでゐました。しかし、雅道の方は、勿論そんなことは夢にも知りませんでした。人の運命ほど分らないものはありません。それ程成績のいゝ雅道も、學校を卒業する頃から



病氣になつたり、その外いゝんな不仕合せな目に逢つて、だん／＼出世が遅れてしまつて、今では昔の友達の下に仕へるやうな廻り合せになつてしまひました。喜んだのは、隆資でした。昔の敵を討つ時が来たと思ひながら、しかし、そんな様子は氣振にも現さずに、心から昔の友達を歓迎するやうに、一番家來にして手厚く持成しました。雅道の方では、主人にそんな下心があるとは知りませんから、隆資の親切を嬉しく思つて、一生懸命に働いてゐました。

二

すると今度、隆資は陸奥守に任じられることになりました。隆資は大よろこびで、早速大勢の家來を従へて、京都を出發しました。無論雅道も一番家來のことですから、大勢の先に立つて歩いて行きました。

陸奥と云へば、遠い北の國。泊り／＼に日數を重ねて、下り下つて、漸く白河の關まで來ました。昔の有名な歌に、

都をば霞とともに出でしかど、秋風ぞ吹く白河の關

と云ふのあるのを御存じでせう。そこには關所が設けてあつて、政府から、「この者を通して差支ない」と書いた切手を貰つて持つてゐる者でなければ、通れないことになつてゐました。番人が關所の入口に立つてゐて、届け出た調書を読み上げては一人づつ通すのでした。





「藤原隆資。」

「ハイ。」

「通れ。」

「源家直。」

「ハイ。」

「通れ。」

かう云ふ風に、名を読み上げられた者が、一人一人關所を通つて行くのでした。この關所の向うが、陸奥の國の入口でした。

「源爲平。」

「ハイ。」

「通れ。」

「春日矩實。」

「ハイ。」

「通れ。」

主人の次に読み上げられるものと思つてゐた雅道は、いつまで経つても自分の番が來ないので、不思議に思つてゐました。

そのうちに、關所のこつち側に待つてゐる方の組が少くなつて、今では、名もない雜兵まで





が通つて行き始めました。それでも、まだ雅道の名は呼び上げられませんでした。そこで、彼は「ハテナ」と考へ込みましたが、やがてボンと膝を叩いて、「成程さうか。わいの名は一番仕舞ひに呼び上げられるのに違ひない。主人が一番先に通り、一番家來のわいが後始末をして通ると云ふ順序であらう。うん、さうに違ひない。」

ところが、そのうちに隆資の家來は一人残らず通つてしまつて、あとには雅通とその供の八九人だけが残つてゐるばかりになりました。

「いよ／＼我々の番だな。」

さう思つて衣紋をつくらつて待つてゐると、どうしたのか、關所の大戸がドーンと音を立てて締まつてしまひました。

「もし／＼。」

慌てゝ、關所の役人を呼びとめた雅道は、

「私の名が讀み上げられませんでした。若しや讀み落したのではありませんかしら。」と聞きました。

すると、役人は、

「いや、讀み落しはありませんよ。」と云つたまま、小屋の中へはひつてしまひました。

三

雅道は呆然として立ち盡しました。第一に、主人隆資の心持が分りませんでした。第二に、こんな知るべもない遠い土地へ來て放り出されたのでは、京都へ歸ることも容易に出来ませんでした。

「どうしたらいいだらう。」

傍の石に腰を卸したまま、彼は項垂れて考へ込みました。さうなると、供の者などと云ふものは、はしたないものですから、口々に、

「なんと云ふ馬鹿／＼しいことをしたものだらう。まるで狐に化されて連れて來られたやうなものだ。」

「全くさ。主人に捨てられるやうな人に仕へてゐたばかりに、私達まで大損をしてしまつた。」
「こんな人の傍にゐると、しまひには乞食にされてしまふかも知れない。早くもつといふ主取りをしようぢやないか。」

かう云つて、一人去り二人去り、とう／＼みんな——いや、忠義な家來を二人だけ残して、あとはみんなどこへ行つてしまひました。

あとに残つた家來二人は、雅道の右と左とから、

「まあ、そんなにお力をお落しになるにも當りますまい。兎に角、どこへか落ち着いてゆつくり行末のことを考へませう。さうしたら、何とかいゝ智慧が浮ぶかも知れませんよ。」と云つて慰めてくれました。(つゞく)





インデヤンの子 と野鼠

立石 美和

寺内 萬治郎 畫

一、しかられて

遠い昔の事でありました。

あの廣い／＼アメリカが、未だ未開のまゝの、知られない天地を横たへて居る頃の事でありました。此處には、大昔から、アメリカ・インデヤンと呼ばれる、土着の人々が、わづかながら、方々に散らばつて住んで居りました。

けれど、ずつと北へ寄つた、寒さのひどい邊にはその土人の數さへも、ほんとうに數へる程、少ないものだつたと云ひます。

——淋しい、雪にとざされた、廣野の中の、みすばらしいテント小屋に、インデヤンの一家族が、住んで居たと、想像して下さい。

父親と、母親と、十二才になる可愛い男の子との三人暮らし。どんなに、淋しい、しかしまた、どんな

に平和な——と、誰れにでも、想像されますが、何

うした事か、今朝から、父親の氣げんが悪くて、とう／＼、母親と、はげしい云ひ争ひをして、はてはあら／＼しく、物を投げたり、恐ろしい力で、毛物の皮を、引き裂いたりするので、母親も、おい／＼聲をあげて、泣き叫んだりするのでした。

亂暴が静まつてから後も、二人で一言も口をきかない、きまつい不快な時が、長くつゞくのでした。

親達二人が、自分達の、據り所のない争ひに、かまけて、つい忘れて終つて居ましたが、子供に取つて、こんな、ものがなししい、取りつきやうもない、やるせない事があるでせうか？

お父さんの方を見ても、お母さんの方を見ても、二人とも、いつものやうに、笑つても、口を聞いても呉れません。

仕方なしに、すみの方で、後ろ向きになつて、小鳥をうつ、手製の弓を、もじ／＼、もじ／＼、いつ

までも、黙つていぢくつて居ました。

その中、ふと、氣を變えたのでせう。子供は、いつもの、無邪氣な元氣を、取りかへして、

『お父ッさん！ 鳥うちに行かう！』

さう云つて、不機嫌に、黙りこくつて、お酒を飲んで居る父親に、抱きつきに行きました。

『うるさいッ！』

邪けんな聲！ 十の雷が落ちたやうなはげしい喚鳴りつけ方！

子供は、堪らなく悲しくなつて終ひました。何故しかられるのか、何故、けふに限つて、かう、うとまれるのか、わからない乍ら、こらえる事の出来ない悲しみに、かわいさうな、インデヤンの子は、しく／＼と泣きじやくり乍ら、とば／＼と、テント小屋を離れて行きました。

何處へ行く？ それは、この子自身にも、わかりませんでした。

子供をかばつて、父親を、たしなめて居るらしい母親の聲も、それに、嗚鳴り返して居る、父親の聲も、なんだか、遠い／＼所か、夢の中の、出来事のやうに、聞き乍ら、とぼ／＼、あてどなく、歩き續けて、行くのでした。

二、肥った野鼠

どの位の間、どつちの方へ、歩いて来たか、子供自身には、少しも分りませんでした。

たゞ、いつの間にか、きつと、ふだん、かけ歩いて居る所よりは、ずつと、遠くまで来たのでせう。ゆるやかな、丘の途中に立つて居ました。すつかり、落葉して、梢に雪をためた、雑木が、まばらに立つて居て、坂のつきた、向ふの丘との、はざ間には、小さな流れが、ちよろ／＼と流れて居ました。

暫らく、ぼんやり、立ち盡して居た子供は、ふと

麓の方から、真白に、被はれた雪の中を、黒い、小さなものが、流れにそって、丘の方へ上つて来るのを見たのでした。

「何んだらう！」

子供は、ちいつと、動いて来る、黒い、小さなものを、見つめて居ました。

ちかづくと、それは、可愛い、小さな、一匹の野鼠でした。

「鼠だ！」

でも、子供は、聲を立てませんでした。

「かわいさうに、鼠だつて、こんなに雪が積つて居るんだもの、お家がなくなつてののかも知れない。きつと、それに、喰べるものがないんだな。」

子供は、そんな事を思ひました。

が、だん／＼、近づいて、すぐ前の、小さい流れの端を、チヨコツ、チヨコツと小走りに、上つて行く鼠を見ると、まる／＼と、肥つて、元氣で、そ

れは／＼、可愛いのでした。

「變だ！ お母さんは、いつか、雪が

つもると、鼠はやせて、死んで終ふ

のもあるつて教へてくれたのに、

何うして、この鼠は、こんなに

肥つて居るのだらう？」

そんな事を、思つて居る間に

も、鼠は、少しづつ、走りつづ

けて、もう少しで、見えなくなる

程、遠くの方まで、行つて終ひました。

「さうだ！ 後をついて行つてやらう！」

忽ち、子供らしい、好奇心に占められて、小さい

インデヤンは、足音を忍ばせて、鼠の後を、何處ま

でも、追ひ初めました。

三、楓 林

いくつかの、小さい丘を、越えて、大きな、楓の



樹の、立ち並んで居る所まで來ました。

すると、その中でも、一番、

大きい、太った楓の樹の、

根元まで來て、小さい鼠の

長い旅が、終りました。

併しまあ、何んといふ

不思議な事をする鼠で

せう。

鼠は、その樹の根

元の、小さな穴

だま／＼、ちい

長い間、

です。



なんだが、不思議な、お伽噺の國へ来たやうにさ
え、考へられて来て、それ以上、鼠に近づく事も出
来ずに、自分も、ちいつと立ちつくして、不思議な
鼠の容子に、見とれて居ました。

四、甘い！

やがて、さし込んだ小穴から、頭を抜き出すと、
野鼠は、さつきよりも、もつと／＼元氣よく、さも
満足さうに、可愛らしい身ぶるひを一つして、さつ
きと、寸分違はない同じ道を、急いで、丘を越して
見えなくなつて終ひました。

はつと、夢から、さめた様に氣づいて、子供は、
楓の根元へかけよつて、見ました。しかし、其處に
は、何んの、變つた事ありませんでした。

たゞ、きつと、あの、野鼠の、するどい齒で、か
き削つたのでせう。いくつもの、小さい穴が、あい
て居て、その、穴からは、ちようど、とけた水晶の

やうな、とろんとして、ねばつこい、美しい水が、
噴き出て居るのです。

「あ、これを、飲んで居たのか知ら？」

突嗟に、子供は、さう思ひました。そして、何心
なく、自分も、身體をかゞめて、その、すき透つた
水に、自分の唇を押しつけて見ました。

次の瞬間、インデヤンの子供は、思はず、聲をあ
げて、叫びました。

「甘い！」

五、砂糖のはじまり

こんなに甘い、こんなに美味しい味のものを、
この子は、生れて初めて、舌にふれたのでした。

発見のよろこび——子供は、さつきまでの、悲
しかつた事も、お父さん達が、不機嫌であつた事も
すっかり忘れ果て、終つて、まっしぐらに、雪を踏
んで自分の、テント小屋へ飛んで歸つて行きまし

た。

さつきから、どれ程の、時間経つたのでせう。

家では、二人とも、もう、争ひ所はありませんで
した。いつの間にか、しく／＼泣いて、出て行つて
終つた子供が、いつまで経つても、歸つて来ないの
で、お父さんも、心配で、お酒の酔も、さめ果て、
居るところでした。

で、勢よく、飛び込んで来た子供の顔を見て、ど
んなに、よろこんだか知れません。

そして、歡しさと、不思議さに、聲をふるわせて
お話する子供の話を聞くと、

「それは面白い！ 神様が、私達に下さつたのかも
知れないぞ！ これからすぐに行つて見様か？」

なんて、お父様の方が、かへつて、乘氣になつて
さわざ初めました。

「ちや、お父さん！ ナイフと、バケツを持って行
つて、うんと取つて来ようよ！」

子供も、うれしくなつて、はしやぎ廻りました。
半日前と、半日後と、まあ！ 何んといふ違つた
一家族だつたのでせう。

子供を先に立て、平和な一家族が、いくつもの
丘を越えて、楓林の中へ入つて行きました。

「甘い！ ほんとうに、甘い！」

「大變なものだ！ 神様のお乳は、こんな味が、す
るかも知れないぞ！」

親子の、はち切れさうな、歡びの聲に、續いて、
樂しみに充ちた作業が、はじめられました。

持つて行つた大きなバケツに、一杯、楓の甘い汁
をためて、自分達のテント小屋へ、引きあげた時に
は、もうとつぷり日が暮れて居ました。

三人は、歡びに興奮して、仲々ねむる事が出来ま
せんでした。

思ひ出しては、甘い汁をすつて、いつまでも、
語り合つて居ました。

その中、お母さんが、ふと思ひついて、
「この汁を、あたゝめて見たら、もつと、おいしい
かも知れませんか。」
と、云ひました。

「なる程、これはさうかも知れない！」
お父さんも賛成して、早速、テントの前の焚火の
上に、ぶらさげてあつた大きな鐵鍋を落して、きれ
いに洗つて、それへ楓の汁を入れかへて見ました。

「どうですな？」
ぶく／＼と沸立つと、お母さんはお父さんと、子
供にすゝめ乍ら聞きました。

「おいしい！ とても甘いよ！ ねえ、お父さん。」
「ほんとうだ！ なんとも云へない味がするぞ！」
お前も、一杯たべて御覧！」

それから、どんなに楽しい語らひが続いたか、ど
んなになんども、おいしい汁をすゝり合つたか、さ
すがに、もう、飽き／＼して話し疲れて終つたので



一八
せう。三人とも、大事の、大事の、お汁は火にかけ
つばなしにして、ぐつすり、寝込んで終ひました。
翌日、一ばん早く眼を覺ました、お母さんのイン
デヤンは、昨日の晩の事を思ひ出して、バネ仕掛け
の様に飛び起きました。

そして、大急ぎで鍋の中をのぞいて見ますと、あ
あ！ 昨日の、あの、甘い汁は、一滴もなくなくなつて
終つて、眞白な、すなのかたまりに、變つて終つて
居るのでした。

「大變だ！ 大變だ！ 何うしたらいゝだらう！
また、私はしかられる！」

お母さんのインデヤンは、心配して泣き始めまし
た。

續いて、起き上つて來た親子のインデヤンも、鍋
の中の不思議すぎる變り方を見て、しばらくは、何
うしていつかわかりませんでした。

が、子供のインデヤンは、思ひ切つて、その砂の

凝りの様な、眞白い化物をガチツと、かちつて見ま
した。

「甘い！」

子供は、もう一度叫びました。

さうです！ それが、あの、楓糖の始りだつたの
です。」

(をしまひ)

肥つた野鼠の智慧が、しかられた子供の手柄が、それとも
不精な母親のあやまちのお蔭か。ともかく、かうしマーブ
ル・シユガアが發見されました。お砂糖い、さとうきびか
ら、大根からも取れますが、この楓の樹の汁からとれる
砂糖が、一番、上等な一番美しい味を持つて居ると云
はれて、英國や米國では、飴糖上流の家庭でも、やたら
には、決してむだにつかひません。
近頃日本でも、この方法で、上等な砂糖を造る事が研
究されて居ます。農林省では、その爲に、特別な調査や
研究を續けて居ると云はれます。(作者)



デエメリア の馬鹿

泉 雪 江
初 山 滋 畫

昔、ある村に、一人の百姓が住んで居ました。百姓には三人の男の子がありました。上の二人は、賢い子でしたが、一番弟のデエメリアは、生れつきの馬鹿だったのです。百姓が、年を取つて、間もなく死ぬといふ時、三人の子を枕元へ呼び寄せて、

「私、もう長くは生きて居られない。私が死んだら、この家も、家畜も、三人で、同じ様に分けるが、それから、こゝに三百ルーブルお金があるから、これも百ルーブルづゝ、三人でお分け！」と、遺言をしました。

お父さんが死ぬと、三人の息子には、間もなく、一緒に、一つ家へ集つて暮しましたが、賢い二人の兄さんは、相談をして、二人で、弟の分の、百ルーブルも取つて終ひました。そして、そのお金を資本にして商賣をする爲に、町へ出かけて行きました。

「デエメリアや、兄さん達はこれから、お前の着物と、帽子と長靴を買ひに町へ行つて来るからね、おとなしく留守番をしておるで。」

靴子も靴も着物も、真赤な美しいのをかつて来てやるから、姉さん達の云ふ事をよくきくんだよ！」

兄さん達に、だまされるとは、知らないで、デエメリアは、赤い帽子と、赤い着物と、赤い長靴がほしい一心で、

「あゝ、なんでも云ふ事きくよ！」と、返事をして、兄さんのお嫁さん達と一緒に、留守番をして居ました。

暫らくたちました。ある、霜の深い、寒い朝でした。兄さんのお嫁さん達は、ゴロリとストーブの上へ、ねそべつて居る馬鹿のデエメリアに、河へ行つて水を汲んで来いと云ひつけますと「いやだあ、面倒臭いもの！」

と云つて、馬鹿は云ふ事をきくません。

「面倒臭い？ 馬鹿だねえ！ 御覽なさい。外は、あんなに霜で真白ぢやないの？ 男でなければ、水なんか汲みに行けませんよ。」姉さんが怒りつけると、

「いやだよ。面倒臭くて仕様がないや。」と、デエメリアは仲々動きません。

「へん！ そんなに面倒臭くて、よく御飯をたべますね。いゝわ、妾も面倒臭いから、今日から御飯の仕度なんかしてあげないから！そして、兄さん達の所へ手紙をやつて、赤い靴も、帽子も、着物も、買つて来るなつて云つてやるから

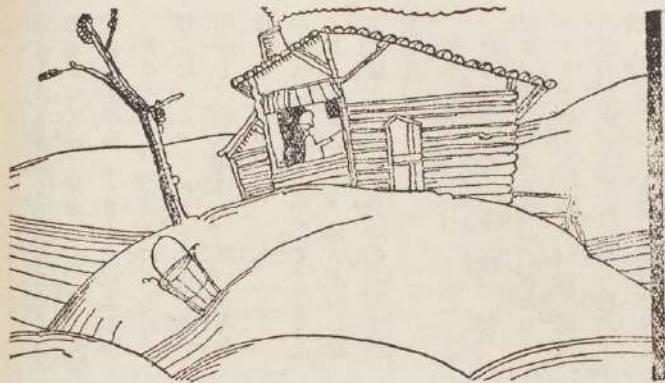
……」

さう云つて、おどかされると、赤い帽子が欲しくつて堪らない馬鹿息子は、一度に飛び起きて、桶を二つかついで、水を汲みに、河の方へ下りて行きました。

この村は、大きな河つぶちの、高い丘の上にあります。で、馬鹿息子は、桶をかついで、斧を持つて、丘を下りて行きました。

一杯水の張りつめた、河の上へ来ると、デエメリアは、コッソリ、コッソリと、斧で氷を割つて、大きな穴を造らへて、手桶へ一杯水を汲み込みました。

すぐ歸つて来れば、寒くなくてよさうなものなのに、其處は馬鹿ですから仕方がありません。ば



つんと立つて、穴の中から、一生懸命に、水の底を眺めて居ます。なる程！河の中には、大きな魚が泳いでゐて、水がよく澄んでゐるので、すっかり魚の動くのが見えるのです。

その中、大きな師が、一匹ずつと泳いで来て、穴のすぐそば迄やつて来ました。ほんとうに、馬鹿程困つたものではありません。デエメリアは、それを掴まうとしてゐるのです。

真逆、そんな、のんきな人間がゐると思はなかつたのでせう。師は、ゆう／＼と、氷の割目へ泳いで来ました。

突然、手をはしたデエメリアは、見事に大師をつかまへて終ひ

ました。大事さうに、懷へ入れて、歸らうとすると、

『馬鹿息子さん！後生だからにがして下さい！』

と、師が口を開き始めました。併し、デエメリアは平氣な顔をして、歩き出すので、師は、いよいよ大きな聲で、

『デエメリア！なんだつて私をつかまへたのです？私を何處へ連れて行くのです？』

と、聞きました。『家へもつて行つて、姉さんに料理してもらうんだあ。お晝のおかずにするんだあ。』

『駄目ですよ！お願ひだからそんな事をせずに、にがして下さい。』

そしたら私は、貴方をお金持ちにしてあげますから。』

『お金なんかいらないやあ。』

『では、どんな事でも、あなたの思ふ事をなんでもしてあげますから……』

『ほんとうか？』

デエメリアは、うれしそうに云ひました。若しほんとうだつたら面倒臭い事は、みんな魚にして貰つて、自分は、一日中ストロブの上で寝て居ようと思つたからです。

『ほんとうですとも！』

『ぢやにがしてやらう。その代りなんでもしてくれるんだよう。』

『よろしい！』

『ぢや、この桶を、家へ持つて行

つて貰ひたいや。』

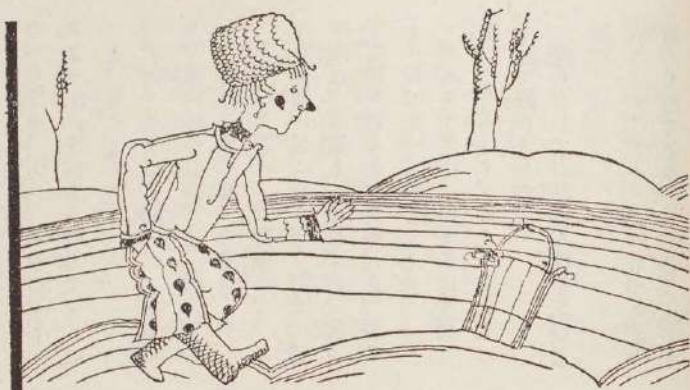
『そんな事、なんでもありません。私のいふ事を忘れないで、その通りに云へばいゝんです。ようござんすか？師の命令、私の望み、桶よ自分で動き出せ！自分で家まで歩いてけ！』さう云ふんです。』

早速、デエメリアは、師の云ふ通りに云つて見ました。すると、あら不思議！桶は、二つとも、一杯水をたぐえたまゝ、土堤をすべり上つて、丘の上の家の方へ、すん／＼と走つて行きます。

これを見た馬鹿息子は、大さうよろこんで、なんでも、こんな風

にうまく行くのかときますと、

『え、何んでもです。たゞ、さ



つきの通り、云はなければ駄目で
すよ。忘れ、ばもう駄目ですよ。」
と、教えました。

デメリアは、師を、もとの通
り、水の中へにがすと、桶の後か
ら、自分の家へ歸つて來ました。
近所の人達は、大勢集つて、こ
の不思議に見とれて居ました。桶
の水は、一滴もこぼれずに、獨り
で臺所へ行くと、ちやんと、臺の
上へのつかつて終ひました。

デメリアは、何も云はずに、
黙つて、ストーブの上へ横になつ
て寝て終ひました。
暫らくして、姉さん達が云ひま
した。

「デメリア！ 裏へ行つて薪を
割つて來て下さいな。ストーブが

冷えて終ふから。」

と、云つて頼みました。

「いやだあ！ 面倒臭いや！」

「面倒臭い？ ぢや、いまにお前
自分で、冷えて終つて、こゝえ死
ぬよ！」

それでも、デメリアは動くの
がいやでした。で、口の中で、

「師の命令、私の望み。斧よ、裏
へ出て薪を割れ！ 薪よ、自分で
ストーブへ、くばつて終へ！」
と、不精な事を云ひました。

すると、斧は、獨りでに、びよ
こんと立ち上つて、つツ、つツと
庭の方へ出て行きました。そして
かつちり／＼、薪割りを初めまし
た。そして、もつと不思議な事に
は、小さく割れた薪は、一つづゝ

うまい具合にストーブの竈へぐば
るのでした。

二人の姉さん達の驚きと云つた
らありませんでした。そして、毎
日の様に、同じ事がくり返されて
居ました。すると、間もなく、家
の薪が、なくなつて終ひました。

「デメリア！ 森へ行つて、う
んと薪を取つて來て下さいな。家
にはもうなくなつたんですから。」
「いやだあ、動くのが、面倒臭い
や！」

「また面倒臭いの？ いゝわ！
早速兄さんの所へ手紙をやるから
そして、赤い帽子も、赤い着物も
赤い長靴も買つちやいけないつて
云ふから……」
これを聞くと、馬鹿のデメリ

アは、むつくり起き上つて、桶へ
斧と、長い綱をつみ込んで、自分
も乗つかつて、

「姉さん！ 出かけるから、門を
開けてお呉れよう！」
と、云ひました。

「まあ！ なんて間抜けなんだら
うねえ！ 馬は何うしたのさ？」
「門をあけてお呉れよう！」

姉さん達は、馬鹿にさからつて
も仕方がないと思つて、大笑ひし
ながら門を開けてやりました。

すると、デメリアは、
「師の命令、私の望み、綱よ、自
分で走り出せ！ 森の中へ走り出
せ！ 行つたら斧よ薪を切れ、切れ
たら綱よ、束にしろ！」
と、云ひました。

馬どころですか！ デメリア
が云ふか云はない中に、そりは、
風を切つて、森の方へ飛んで行き
ました。

途中で、外の村を通る時、そり
は、おばあさんや、子供を、何人
もつき飛ばし、はね飛ばして行き
ました。驚いた村人達は、馬に乗
つて追つかけてましたが、仲々、馬
なんぞには、追ひつく事が出來ま
せんでした。

森へついて、仕事が出来上ると
デメリアは、もう一度、

「師の命令、私の望み、斧よ、丈
夫な棒を一本造つて呉れ！」
と云つて、思ひのまゝに、太い

梶棒を手に入れました。
デメリアが、また、師の命令

をやつて、桶を走らせて歸つて來
ると、村の人達は、大勢で、待ち
伏をして居て、デメリアをつか
まえて、袋だくきに合せました。

デメリアは、口の中で、
「師の命令、私の望み、棒よ、こ
いつらを殴つて呉れ！」
と、云ひました。

忽ち、梶棒は、獨りで暴れ出し
て、村人達の頭を、コッ／＼と
なぐり飛ばしました。村人達は、
あつけに取られて、命から／＼、
四方八方ににげて終ひました。

さあ、この評判が、忽ち國中へ
擴まつて、とう／＼王様の耳にま
で届きました。

王様は、是非その馬鹿息子と、
素晴らしい不思議を見たものだ

と思つて、早速家來を迎へにやりました。

家來は、デエメリアの家へ來て

たすねました。

「馬鹿息子は何處に居るか？」

「何んか用か？」

「王様がお召しになるぞ！ 大急ぎで髪を剃れ、着物を着代へるがいゝぞ！」

「俺王様なんぞに用はないや。」

家來は、この失禮な言葉に、眞赤になつて怒つて、思ひ切り馬鹿息子の横面をなぐりつけました。

すると、デエメリアは、そつと口の中で、

「師の命令、私の望み、棒よ、うんと其奴をなぐりつけろ！」

と、云ひました。

忽ち棍棒が躍り上つて、目の廻る程王様の家來達をぶんなぐつて家の外へ追出して終ひました。

家來の話を聞くと、王様は、いよゝめづらしがつて、お金はいくらかゝつてもいいから、何うでも馬鹿を一度連れて來いと云つて今度は外の家來に云ひつけました

今度の家來は、村へつくと、そつとデエメリアの姉さん達をよび寄せて、

「馬鹿息子は、なにが好きかね？ 何うすれば、連れて行けると思ふね？」と、たづねました。

「はい、あれは、御機嫌を取つて何度も／＼頼めばよろしいのですガミ／＼云つたり、怒つたりする」と、とても駄目で御座います。は

い。」

其處で、家來は、乾葡萄酒の、無花果の實だの、梅の砂糖漬だの馬鹿の氣に入りさうなものをいろ／＼買つて、訪ねて行きました。

「デエメリア！ お前は、なんだつて、いつもさうして寝てばかり居るんだね。私と一緒に、王様の所へ行かうではないか！ そしたら、もつと／＼と、おいしいものをあげるから。」

さう云つて、持つて來た果物をやりました。

「俺ら、此處でたくさんだあ！」

「そんな事を云はずに、小父さんと一緒に／＼行かうよ。御殿へゆけばもつといゝストロブもあるよ！」

「面倒臭いや！」

さう云つて置いて、今度は、またストロブに命じて、間もなく自分の家へ歸つて來て終ひました。

暫らく經つと、お姫様は、デエメリアの事が、好きで／＼堪らなくなつて終ひました。そして、毎日の様に、デエメリアの所へお嫁にやつて呉れと云つて、お父様の王様にお願ひしました。

王様は、馬鹿々々しい事だと思つて、おとりあげになりませんでした。したが、お姫様が、餘り何度も云ふので、終ひには、眞赤になつて怒つて終ひました。そして、強い家來達に命じて、もう一度、馬鹿を引つ張つて來させました。

王様は、大きな樽の中へ、お姫様とデエメリアを入れて終つて、

「おいでよ！ 王様が云つて居たよデエメリアが來れば、赤い着物と赤い帽子と、赤い長靴をやるのだつて！」

「ようし！ ちや行かう！ でも、小父さん達は先へ行きよ。おいら後から一人で行くよ。」

さう云つて、デエメリアは、大欠伸をしたつ切り、まだねて居ます。が、家來は餘りくどい事を云つてやつつけられては大變だと思つて、その儘歸つて行きました。

「王様のところへなんか、行きたくないなあ！ でも、約束だ、仕方がないや。師の命令、私の望みストロブよ！ 寝たまゝ御殿へつれて行け！」

何んと不精な馬鹿息子でせう。

寝ころんだまゝさう云ふと、忽ち家が壊れて終つて、ストロブが、馬鹿を乗つけたまゝ、えらい勢で走り出しました。

先へ行つた家來も、さすがの事に、あつと云つて、あきれ返りましたが、ストロブが、お城へついた時のさわざと云つたらありませ

ん。城中の人は、先を争つて、飛び出して來て、有名な馬鹿息子と不思議な藝當を見て喜びました。

大勢の人達の間には、もちろん王様も、それから、美しい王様のお姫様もまじつて居たのです。

デエメリアは、美しいお姫様を見ると、そつとくちさみしました。

「師の命令、私の望み、お姫様よ！ おいらを好きになつて呉れ！」

さう云つて置いて、今度は、またストロブに命じて、間もなく自分の家へ歸つて來て終ひました。

暫らく經つと、お姫様は、デエメリアの事が、好きで／＼堪らなくなつて終ひました。そして、毎日の様に、デエメリアの所へお嫁にやつて呉れと云つて、お父様の王様にお願ひしました。

王様は、馬鹿々々しい事だと思つて、おとりあげになりませんでした。したが、お姫様が、餘り何度も云ふので、終ひには、眞赤になつて怒つて終ひました。そして、強い家來達に命じて、もう一度、馬鹿を引つ張つて來させました。

王様は、大きな樽の中へ、お姫様とデエメリアを入れて終つて、

「おいでよ！ 王様が云つて居たよデエメリアが來れば、赤い着物と赤い帽子と、赤い長靴をやるのだつて！」

「ようし！ ちや行かう！ でも、小父さん達は先へ行きよ。おいら後から一人で行くよ。」

さう云つて、デエメリアは、大欠伸をしたつ切り、まだねて居ます。が、家來は餘りくどい事を云つてやつつけられては大變だと思つて、その儘歸つて行きました。

「王様のところへなんか、行きたくないなあ！ でも、約束だ、仕方がないや。師の命令、私の望みストロブよ！ 寝たまゝ御殿へつれて行け！」

何んと不精な馬鹿息子でせう。

眼の前で、鐵のタガをはめると、海へ捨てさせて終ひました。四五時間たつと、馬鹿息子は、バツと眼をさまして、

「おいら何處に居るんだ？」と、さよとくして云ひました。

「樽の中よ！ 妾と一緒に入れられたのよ。妾、王の娘だわ！」お姫さまは、すつかり始めからのお話をしました。そして、こんな事をしてゐれば、間もなく餓えて死して終ふから、早く助けてくれと、頼みました。それでも、デエメリアは、面倒臭がつて、動きませんでした。お姫様が悲しがつて、涙をこぼして泣き出したのを見ると、

「師の命令、私の望み、海よ、樽

を消へ持つて行け！ 樽よ、岸へついたら二つに割れろ！」と、やつとこさで云ひました。間もなく、海には嵐が起つて、波が高くなると、忽ち樽を島へ吹き寄せたと見えて、二人は、美しい島の渚に立つて居ました。こんもり樹が茂つて、いろ／＼な實がなつて居ました。

「デエメリア！ 私達は何處へ行つて住めばいいの？ 此處には、一軒の家もないわ！」お姫様は心配さうに聴きました。

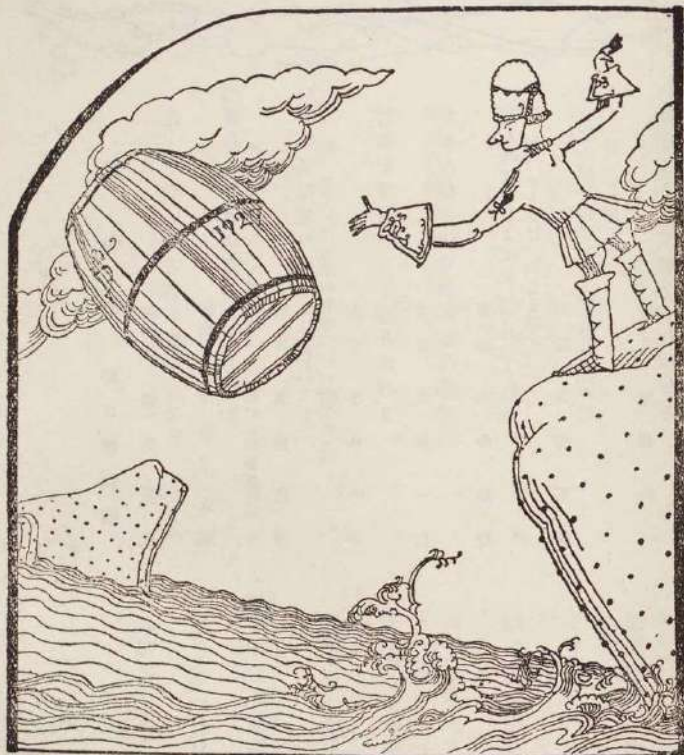
と、デエメリアはまた、

「師の命令、おいらの望みだ。綺麗な御殿よ！ 王様のよりも綺麗な御殿よ！ 島の真中へ出来て呉れ！ 橋よ、ガラスの橋よ！ 私の御殿か

ら王様の御殿まで懸つてくれ！」と叫びました。

言葉の通り、白い大理石の御殿が、見る見る其處へ出来上りました。いくつもの圓い塔、廣いお庭、輝かしい階段！ 見ればそこには、大勢の召使や兵隊まで、急がしうに働いて居ます。悲しい事には、何よりも悲しい事には、その召使達は、皆なデエメリアよりも美しい立派な顔をしてゐます。皆、デエメリアよりは、利巧さうに見えます。

「師の命令、私の望みだ！ 私の馬鹿よ！ 馬鹿息子の私よ！ 誰よりも綺麗ななつて呉れ！ 誰よりも賢くなつて呉れ！」と、さう悲しさに、最後の望



みをうちあげました。

誰が驚かずに居られませう？ 見る／＼、デエメリアの馬鹿は、見違へる程うつくしい青年になりました。誰よりも賢さうな青年に變つて終ひました。

そこで、デエメリアは、王様の所へ使ひを出して、お出でになつて、私達の冒険談を聞いて戴きたいと、お迎へしました。

最初、王様は、何うしても、これが馬鹿息子のデエメリアだとは信じる事が出来ませんでした。けれど、お姫様が、また同じ事を、繰り返してお話したので、大層およろこびになつて、末長く、幸せで暮す様にと云つて、花嫁花婿をお祝ひになりました。（をはり）

童 心 句 野 雨 情 思

花一ツ咲いたと皆な騒いでる
神奈川 鈴木 英夫

○金魚と一緒に夏がやつて来た
神奈川 原田 小太郎

評、金魚曰く『さアこれからがおいらの世界だ』

○仔の馬は遊びたさうに後れてく
群馬 青柳 花明

評、さすがは童謡の老手、いい句である。

若草を草履々々で踏みにつけり
東京 小林 一路

おねんねと子守が歸る日暮星
大分 大塚 一仁

○花と蝶ないしよばなしで日がくれる
東京 本多 鐵磨

評、ナーンだ、内しよ話か。

○居ない居ないばあとお出て来た花の蛇
群馬 青柳 花明

評、おや居たナ。

○縁日に子供が指をくわへてる
東京 萩原 映一

評、この子に親なし子がナ。

○傘さした眺めお月さん雨ですか
東京 金子 虹詩

評、いえ、いえ、花ぐもりだよ。

竹がきにつばきの花がさいて居る
静岡 山崎 孝

子ひばりがお空の海で鬼ごっこ
東京 瀧谷 正治

にはの雪カサカサ音たてきえてゆく
京都 富川 伊佐 夫

菜の葉を雨たれ小人がたゝいてる
東京 小林 一路

ちらりつと咲いた櫻よばつと咲け
東京 小池 秀詩

菜畑の蝶は後からお供かな
山梨 望月 友治

朝雲雀鳴く子雲雀が氣にかゝる

○子狐がばけてしつぽを出してゐる
新潟 霜田 和芳

評、おイ〜子狐氣をつけな。

○石垣で蟹さんごはんをたいてゐる
東京 河合 英太郎

評、あぶく立つた、煮立った。

アンテナにふうせん玉がかゝつてゐる
千葉 貴田 勝造

馬車の屋根に一休みする蝶々かな
福岡 武田 幸一

うらにはの白い小菊の花盛り
神奈川 池田 又雄

鳩ボツボボロ〜と豆食べる
東京 鈴木 正雄

白い蝶紙と一しよにとんできた

○花ざかり正直爺さん思ひ出す
秋田 岩谷 貞三

評、成程〜。

朝雲雀けむより高く飛んでゐた
東京 加藤 政一

母さんのいねむりを見てねむくなる
東京 山田 正三

とんぼの子おめゝをクリ〜さして来た
東京 藤丘 紫影

花祭甘茶飲む〜子供かな
東京 藤井 卯太郎

ふり向けば向ふもこつちを眺めてた
秋田 近藤 恭太郎

寺の中つんとはなつく甘茶かな
東京 加藤 政一

ひよこ達水をのみみ空を見る
秋田 近藤 恭太郎

○栗の木に子りすのぼりて富士見てる
東京 土屋 秀雄

評、富士の白雪お日利つゞきと。

○花まつり甘茶を買つて酒の眞似
東京 福島 正夫

評、面白い〜。

お月様たんぼで蛙と遊んでる
群馬 橋本 暮村

おぼろ月蝶々が夢を見て居ます
愛媛 土居 斬花



或る魔法使の話

原田 謙 次

水島 爾 保 布 壺



昔、支那の或町に一人の魔法使が住んでゐました。その住居の周囲には池が繞つてゐて年中真白な蓮

の花が咲いてゐましたので、人々はこの魔法使のことを白蓮堂先生と呼びました。

白蓮堂先生は、實際、魔法の名人で、どんな事でもその思ふ通りにならないことはありませんでした。

先生には多勢のお弟子がりました。

或る日のこと、先生はお弟子たちに向つて「わしは、これからちよつと、都まで行つて來たいと思ふのだが」と言ひながら、戸棚の中から二つの茶碗を――一つの茶碗に、も一つのを蓋の様に冠せながら取り出して、室の中央の机の上に置きました。

「わしの不在中決してこの茶碗の蓋を取つてはいけ

ないよ。」

嚴かな顔をしてさう吩咐た上で出發しました。

「茶碗の内を見てはいけない。」と言はれたので、弟子たちは不思議に引きつけられるやうに、見たくてたまらなくなりました。

「ちよつと位見たつてかまはないだらう。また蓋をして知らない顔をしてゐたらわかりはしまいから。」と一人が言ひました。

「ちよつと位ならよからう。」と他の者も言つて、しかし恐る恐るそつと、蓋をとつて見ました。

すると、茶碗には水が入つてゐて、小さな舟が一つ浮いてゐましたが、やがてその舟がぐるぐると廻りはじめました。そして茶碗の水が波立つて來て今にも外へ溢れ出さうになりましたので、皆はびつくりしてあわてて蓋をかぶせました。

その瞬間です。暴風のやうに室の扉を押し開けて這入つて來た者がりました。

「馬鹿野郎！」

ひどい劍幕でさう怒鳴りつけたのは、都へ行つた筈の白蓮堂先生でした。

「茶碗の蓋をとつてはいけないと言ひつけて置いたのに何故とつた。」と、先生は弟子たちを叱りつけました。

どうしてそれがわかつたのだらうかと思ひながら一ばん年長の弟子がおどおどしながら言ひました。

「いえ先生、蓋をとりはいたしません。何かの間違ひでございませう。」

「間違ひぢやない。お前たちがその蓋をとつたので湖が大荒れになつて、わしの舟が覆つてしまつたのだ。悪いことをした上に、それを白狀しないで、その上に、ごまかさうなんてけしからんことだ。」

弟子達はぶるぶる顫へて縮み上つて仕舞ました。

二

それから二三日たつてから、先生はまた都へ行くからと言つて、今度は一本の蠟燭に火をとぼし、その蠟燭が燃えてしまふまで灯を消さないやうに弟子たちに言ひつけて出かけました。

弟子たちは、前のことにこりてゐますので今度は皆で非常に氣をつけて、蠟燭の灯の消えないやうにつとめました。

しかし、だんだん、夜が更けますと、皆は眠くなつて、こくりこくりと居眠りを始めましたが、一人眠り二人眠りして、たうとう皆が眠つてしまひました。

そして、戸の隙を渡した風が蠟燭の灯を消しました。ふと、眠りからさめた一ばん年長の弟子は驚いて蠟燭に灯をつけました。

すると間もなく、また、白蓮堂先生が歸つて來て室の中の様子を見廻しました。

『先生、どうしてそんなに早くお歸りになりました

三四
のですか。今度は先生の御命令通りに骨を折りまして、この通り蠟燭の灯もついてをります。』と、べらべらとしやべつて先手を打ちました。

『うそをつけ。』と、先生は睨みつけました。

『途中で灯を消したから、わしは十五里も暗の中を歩かなければならなかつたぞ。』

弟子たちは、もう先生の不思議な力に恐れ入つてしまひました。

あまり先生が偉いので、弟子たちは、ちよつとの怠けるひまもないので困つてしまひました。

『しかしね、先生だつて、魔法の秘傳の書いてある書物が澤山あるからあんなに自由自在にいろんなことが出来るのだから、あの書物をすつかり盗んでしまつたら大丈夫だよ。』と一ばん年長の弟子が言ひ出しました。

そして、皆もそれに賛成して、隙があつたらさうした書物を盗み出さうと企みました。

豚買ひに賣り渡しました。

それから四五日たつて、豚にされた弟子の父親が田舎から息子に會ひに出て來ました。

『あれは郷里へ行くと言つて出かけましたから多分途中で行違つたんでせうね。』と先生が言ひました。

そこで、父親は田舎へ引返しました。

三

それから數日の後、その父親は又訪ねて來ました。田舎へ歸つて見たが怪は來てゐなかつたといふので

先生はすぐにそのことを知りましたけれどわざと知らない風をしながら一ばん年長の弟子を呼んで、

『豚に餌をやるからお前もちよつと、手傳つてくれ。』といつて豚小舎の所へつれて行きました。

そして、豚に餌をやつてゐる弟子の頭を手でちよつと撫でて、口の中で呪文を唱へますと、その弟子は豚になつてしまひました。

先生は、弟子の反逆をにくんで、豚にした上で



した。

しかし、先生にたづねてもどうも要領を得ないので、弟子たちに問ひました。

弟子たちは、彼が先生の怒にふれて豚にされ、豚に賣られたことを話してきかせました。

父親は大へん驚いて怒り出しました。

『あまりと言へばあまりひどい仕方だ。』

さう言つて、白蓮堂先生に、自分の息子をもとの人間にして返してくれと迫りました。

しかし、先生は取合ひませんでしたので、彼はその町の代官所へ行つてそのことを訴へました。

けれども、代官所では、何しろ相手が不思議な魔法使のことで、災難を恐れてその訴を取り上げてくれませんでした。

それで仕方なしに、豚にされた弟子の父親は都の役所に訴へることにしました。

さすがは都の役所です。相手がどんな魔法使であ

先生はじめ、いづれも、きはめて静かにしてゐました。

五日、六日、七日……

何の變つたこともありませんでした。

召捕に向つた兵隊はあつけない位でした。こんなおとなしい四人を、こんなに嚴重に護送して行くこと、むしろ滑稽にさへ感ぜられました。

魔法の書物を取り上げてしまつたから、もう何も出来ないのだらうとも考へられましたが、しかし、書物を取り上げない前でも、何の抵抗もしなかつたのはどういふわけだらうと、役人は小首を傾けながらその行列を指揮して進みました。

ところが、十日目の夕方近い頃でした。

その行列が或る山の峠にさしかかりました時、天が忽ちかき曇つて、なまぐさい風が吹いて來ました。皆は、魔法使が愈々本性をあらはしたのかと氣を張りました。

らうと、お上の御威光で處刑にしてやらうと、役人が數千の兵隊を率ゐて魔法使を召捕に向ひました。さぞかし、さまざまの魔法を使つて逃げようとするだらうと考へて、多勢の兵隊は白蓮堂を幾重にも取巻きました。

ところが、白蓮堂先生はちつとも抵抗しませんでした。

そこで、役人は、先生夫妻と息子、都合三人を生捕り、魔法の書物も全部取上げることにしました。そして、都へ歸るのですが、途中で逃げ出されては大へんだといふので、一人一人を、獅子や虎を入れるやうな檻に入れ、そし外を鐵の板で巻き、さらに、兵隊で十重二十重に圍んで都へと引上げることにしました。

一日、二日、三日……

檻の中の四人には何の變つたこともありませんでした。

しかし、檻の中はやはり静かで何の變つたこともありませんでした。

眞黒な雲の中から飛び下りてもしたかのやうに、不意にその行列の先頭に立ちふさがつたのは、身の丈一丈あまりもあらうといふ大きな男でした。

四

皆はその男を見てびつくりしました。

頭には芒のやうな髪が長く亂れ、兩眼は鏡のやうに輝き、口は耳までも裂けて、劍のやうな牙が見えてゐました。

先頭に進んだ兵士たちは、思はず後退りました。すると、その怪物はいきなり二三人の兵士をつかんで引裂いてしまひました。

この恐ろしいさまを見たものは、誰もこの怪物に抵抗ふ勇氣がでませんでした。

この時、檻の中から白蓮堂の聲がきこえました。

『あゝ、山男が来て来た見え。わしの家内を檻から出したら山男を退治する事が出来るのだからな。』

これを聞いた役人は、この場合ですから、思ひきつて白蓮堂の妻君を出してやることにしました。

妻君は、驚いてばんやりしてゐる兵士の槍を引つ



たくつて山男に向ひました。その一本の槍が百本にも見える位でした。

しばらく、戦つてゐましたが、山男は電光のやうに兩眼を輝かせながら、大きく口を開きました。すると、その口の中へ、白蓮堂の妻君はすうと吸ひこまれてしまいました。

『あゝ、これはしまった。今度は息子を出さねばならぬかな。息子なら大丈夫だらう。』

檻の中で白蓮堂が獨言をいふのをきいて、役人は息子を出しました。

息子も、兵士の剣を取つて山男に立ち向ひました。その一本の剣が千本にも見える位でした。

『今度は大丈夫だらう。』

役人はじめ皆さう思つて見てゐるうちに、山男はまた大きく口を開いて、空気を吸込むやうにしますと、白蓮堂の息子はすうと吸込まれてしまいました。

『あゝ、しまった。またやられた。』と、がっかりし

仇を討ちたいのです。逃げもかくれもいたしません。彼を殺してしまつたらまたおとなしく都までつれて行つて頂きませう。』と白蓮堂は言ひました。

そこで、役人は思ひ切つて彼を檻から出しました。

五

白蓮堂が出て来たので、さすがの山男も今度は少し考へたらしく一步退つて身がまへました。

白蓮堂も剣を持つて向ひました。

山男は、側の松の樹の根こぎにして振りかざしました。

一上一下、勝負はいつ果るかわかりませんでした。

山男は、自分の形勢が悪くなると、雲を起し風を呼んで、相手の眼をくらまそうとしました。そしてすきを見ては、例の通り大口を開いて、得意の吸ひこみをやらうとしました。

そのたびに、さすがの白蓮堂も身體が宙に浮いて



たやうな白蓮堂の聲がきこえました。

『もしもしお役人様。家内も息子も山男にやられてしまひましたから、今度は私を出して下さい。』

しかし、役人は躊躇しました。大切な四人を取逃したら大へんだと考へたのです。

『でも、私を出して山男を退治させないと、あなた方は皆山男にやられてしまひますよ。私は、妻子の

山男の方へ吸ひ寄せられましたが彼の口まで行かないうちに途中でもんどりうつて逃げました。

山男はますます力を盡して雷さへ響かせました。それで白蓮堂は手に持った剣を投げすてなければなりませんでした。

そこをすかさず山男は、白蓮堂の頭上から松の樹で叩きつけようとしてました。

その瞬間、白蓮堂は魔法で自分の身體を一匹の蜂にして、山男の左の眼をさしました。

『あつ！』

不意をつかれて、山男がひるんだ所を、また右の方の眼をさしました。

山男は兩眼とも刺れて眼が見えなくなりました。

蜂になった白蓮堂はまた人間の姿になつて山男を路傍の大きな松の樹に縛りつけてしまひました。

山男と白蓮堂の闘ひを、どうなることかと思をもつかずに眺めてゐた役人は、この時ほつと胸をなで

おろしました。

そして自分の兵隊を眺めますと、数千の兵士が一人残らずそこいらの松の樹に縛り附られてゐました『あつ！』と驚いて、山男の方を見ますと、其處には、山男も白蓮堂も見えませんでした。

今まで曇つてゐた空が水のやうに澄んで、その夕空を三羽の鳥が、

『アホ、アホ、アホ……』と鳴きながら遠くへ飛んで行つてしまひました。

それ以後、誰も白蓮堂先生を見た者はないといふことでした。

でも、魔法の書物はのこりましたので、弟子たちが皆でそれを見て、いろいろと智慧をしぼり、豚にされた男を人間にしてやらうとしました。

しかし、なかなか容易くは成功しませんでした。幾度もやり直したりなんかしてやつとのことで、もとの人間にしてやることができませんでした。(をばり)

須磨寺の豹

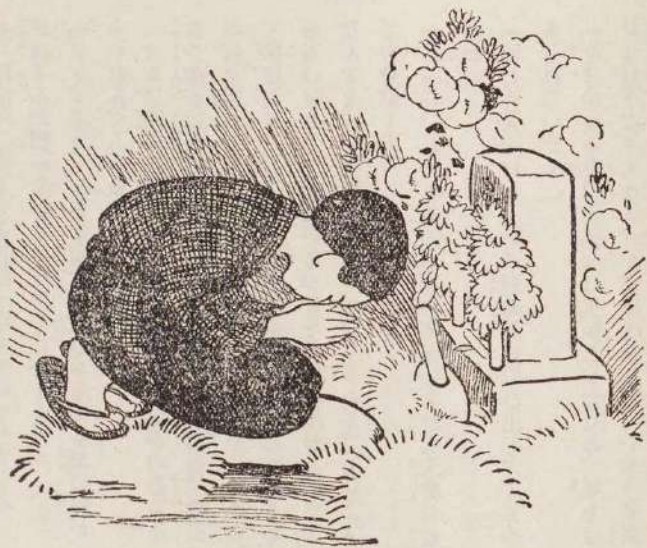
横田 貴美衛

岩岡とも枝 畫

『みなさんは豹といふけだものを知つてゐますか。からだつきは虎に似てゐますが、虎のやうな縞模様のかほりに、つやつやした黒い斑紋をもつてゐて、ちよつと見ると虎よりもすばしっこさうな猛獣です。この豹が檻を脱け出まして、いやもうとてもえらい騒動でしたよ。さう、あれは大正七年の春でしたつけ、私が須磨寺にゐた時の出来事です——』

若い和尚さんはこう前置きして、この面白いお話を一氣にしてしまふのが惜いかのやうに、ボツリボツリと話し出しました。

須磨寺の境内から大池をとりまく遊園地一帯へかけての櫻林——新吉野といつてゐました——がいちめん仄赤く芽ぐんで、そこここに茶店の小屋ができ



はじめた頃です。ある朝早く勤行から下つて来た私達が、まだぬけきらず早春の朝冷に、庫裡の大火鉢を圍んで、いつものとほり、その日の葬式の役僧や寶物の案内係、日行連夜など、それぞれの受持ちを圖引で決めるため、わいわい騒いでゐるところへ、

「た、た、大變ぢや、えらいことが起つたぞい。」と消魂い聲で叫びながら寺男の太平爺さんが顔色變へて飛びこんで来ました。太平爺さんは毎朝境内を掃くのが勤めでありましたが、其時爺さんはよほどうろたへてゐたと見えて、座敷の上まで箒を持つて上つて来た位でした。

「遊園地の豹が逃げただ、檻を破つて逃げただ。」

「えつ！ 豹が檻から逃げた？」思はず皆は鸚鵡返しに叫んでいつせいに立上りました。

「はあ、今俺、勘公から聞いて来ただ、勘公が今朝豹に餌やるべえと思つて行つたところが檻の扉があいて、中がもぬけの空であつたでござえす、勘公は

おつ魂消て、すぐさま警察へ飛んで行つたで、今、巡查さんが調べてゐさつしやるだが——」

「フン、どうしてあの頑丈な錠のおりてる鐵の扉が

「はあ、何でも勘公の話では、勘公に恨みのある不良少年が勘公に罪つくらしめて迷惑かけるため、勘公の目を盗んで、こつそり扉を開けたらしいといふので御座えす、二三日前其奴達が豹に惡戯してゐるのを見つけたで、勘公がこつびとく叱りつけたので、なんでもその仇返しだらつて、さうみんなもいふうでちやが——」

「ふーん、しかしその不良少年といふ奴も大膽な奴だね。」

「何しろ大變だね、いつ何時豹が飛び出してくるかもしれないから。」

「今日の奥の院の山巡りは眞教だつたなあ、氣をつけて行きなさんせよ、がぶりとやられないやうに要

心して喃。」白雲老といふ老僧がこういひますと、眞教といふ小僧はすつかり本氣になつて、

「厭だよ、厭だよ、私は今日は御免だよ。」

といひました。老僧は笑ひながら、

「なめに大丈夫だよ、眞教にはお大師様がついとんなさるから。」

「そんなら老僧さんが行つて下さい、老僧さんなら護摩修行も知つておいでるんだから豹が出たら不動の金縛りにでもしてやつたらいい。」

「いや、私はもう年よりで、お山登りはとても出来ん、豹位はちよつとも怖くないが、息切れがしてならんから喃。」

「やあい、老僧さんだつて怖いもんだから負けみいつてらあ。」

みんなはどつと笑ひました。しかし福田といふ執事だけは顔をしかめていひました。

「笑事ぢやあないよ、花時にこんなことで、もし人

出が無かつたら町の商人はさつぱりぢや、寺だつてすぐお賽錢に影響するせ、まつたく困つたことが出来たわい。」

それはたしかに福田執事のいふとおりでした。須磨の櫻といへば有名なもので、寺でも町家でも春の花見頃だけで一年中暮らせるだけのお金儲けをしてしまふのでした。ですからうつかり豹が出たなどといふことが世間へ知れたら、誰だつて呑氣にお花見なんかに出ませんから、そんなことになつたらまつたく大事なんです——ところが機敏な新聞はその日の夕刊にもうちやんとそれを出してしまひました。

須磨寺遊園地動物園の豹、檻より脱出す！

この無氣味な二號活字の見出しは、人々の魂へゾツと沁みこみました、そして、

外出危険、案じらるゝ今春花見時の景氣

などといふ文字が、町家の商人や、茶店の人達の胸に大きな不安の雲を投げかけたのであります。折



四四
角聯合でお金を出し合ひ種々な僮物を計畫したり
電車の割引までしてお客をひきつけようとしてゐる
のにこんなことで「春」がつぶれてしまへば、それ
こそ取り返しがつきません。そこでこれをどう解決
していゝものか、寺の客殿で評議會が開かれたので
あります。警察からも、動物園からも、花見茶屋の
組合からも、そしてお寺の坊さんまで、凡そこの事
件に何らかの意味で關係ある人々は全部参集しまし
た。そしてその翌日の新聞には次のやうな記事が載
せられました。

須磨寺遊園地動物園の檻を脱出したる豹を捕
獲したる者には金壹千圓を呈す。但し射殺し
たる場合には金五百圓を贈呈す。

月日
兵庫電車鐵道株式會社
須磨寺遊園地聯合組合

さあ騒ぎはいよいよ大きくなりました。鐵砲自慢
な人達や慾の深い連中が我こそ豹を得て賞金と名譽
を一度に取らうと續々出かけました。寺の小僧仲間
でも隊を組んで奥の院の山を巡り豹の出さうなそこ
ここに猫いらすをころがしておいたり、係蹄などを
ソツとしかけておいて、千圓貰つた時の配け方や、
使ひ途などを話し合つて胸を躍らしました。その間
にも新聞は毎日のやうに豹の記事で持ちきりました
ある時は、神戸の麻耶山に現れて、花隈のある町家
のおかみさんを噛み殺したのだ、或は、山手の居留
地を外人が散歩してゐた時ふいに飛び出したので外
人は青い目をまはして氣絶したのだ、さうかと思ふと
今度は明石の人丸神社の境内に怪しい足跡が残つて
ゐたのだ、一匹の豹が一夜のうちに東に現はれ、西に
現はれ千變萬化の早業に、人々はすつかり怖氣づい
て、常は芝居や活動で賑はしい湊川の新開地や元町
通りでも宵からひっそりしてしまふといふ騒ぎで、

騒動は須磨だけでなく、神戸や明石にまで一方なら
ぬ影響を惹起すやうになり、最初千圓であつた賞
金はいつしか三千圓になり、射殺した場合でも二千
圓といふことになつてゐました。しかし肝甚の豹は
どこにゐるのか見當さへつかないのです。
そんなことに少しも遠慮せず「春」は元氣よくや
つて來ました。櫻はちらほら咲き出しました。夜に
なると月は花の上におぼろに霞んで夢のやうにさし
そひました。だがお花見の人といへばいつもの十分
の一もありません。その客もまだ日が暮れないうち
にさつさと逃げるやうに歸つてしまふので、夜櫻な
どは寂しいほどひっそりして、遊園地一帯の大じか
けなイルミネーションがもつた位でした。

二
ある夜、突然ドン！ドン！と二三發物凄しい銃
聲がしたので私達、寺の者は驚いて跳ね起きました。
夢中で窓をあけると、春には珍らしいほど澄みきつ

た月夜で、地上は白く雪夜のやうに輝き、樹や家の影が影絵の如く鮮にくつきり寫し出されてゐました。私は思はずアッ！と叫んで手を握りしめました。すぐ家の前の櫻林で今しも二匹の犬が、一匹の獸を挟んで大格闘の最中だつたのです。

『豹だ！』

誰の顔も死人のやうに蒼ざめて、目ばかりが瞬もせずちつと一所を視凝めてゐます。皆無言で化石のやうにつつ立つたまゝ――

犬は豹の左右前後から、火のつくやうに激しく吠えたり吠えたり走り廻つてゐます。しかし豹の方は惜らしいほど落ちついて、たゞ低い唸聲を發してゐるだけです。しかしそれはよけいに物凄く、今にも何か大變なことが起りさうに思へます。それにしてもさつき聞えた銃聲は何處で誰が撃つたのやら、人の影は何處にも見えません。

『あつ！』

豹は突然二、三間も躍り上つたかと思ふと、目にもとまらぬ早業で一匹の犬へ飛びつきました。

『危い！』皆が思はず顔をそむけた途端！ドンと一發銃聲が轟きました。見ると豹は何處へ行つたのか見えなくなつて、一匹になつた犬が異様な長泣きをはじめました。

ウオーウオーウオーウオー

それは何といふ氣味の悪い、物凄泣聲でせう、訴へるやうな、恨むやうな、思はずグーツと水を浴びせられたやうな氣持ちになつて、私達は堅く手を握りあつてゐました。フト見ると、池の汀の山吹の茂みから一人の人が飛び出してかけて來ます。

『和尚さん、すみませんがちよつと來てやつて下さい、犬が豹にやられて、今死にかけてゐるのです。』沈痛な男の聲に私達は愕然として、現場へ走りました。

『あつ！ 血だ！ 血だ！』

一人の小僧が飛びのくやうに足すざりして、提灯をさし出したそこには、夜目にも生々しく牡丹色の血が點々とこぼれてゐました。見ると無慘にも一匹の犬が、胸を引き裂かれ、鼻柱を噛み碎かれて倒れてゐます。そしてその傍に、一人の少年が自分の膝へ、死んだ犬を抱きよせて泣いてゐます。

『この少年が豹と戦つてゐたのか。』

私は少年の度胸にすつかり感心しました。少年は『お父さん、おいら口惜い、畜生！ 今に見ろ、シロの仇討ちしてくれるから……』

と、ざりざり齒ざしりして、
『シロ、シロ、今に俺がきつと敵をとつてやるぞ、なあ、なあ。』

と死んだ犬に抱きついて泣いてゐました。少年の父を始め、まはりに立つてゐた私達も思はずいつしよに泣きました。この親子は一の谷の奥の獵師でした。夜が明けるとすぐ犬はお寺でねんごろに供養し

て、敦盛塚の裏の梨の樹の蔭に葬つてやりました。その日の夕刊三面には二段ぬきでこの勇ましい親子の働きと、忠犬のいたましい最期とが掲載され、人々を涙ぐませました。

春はまつさかりで須磨寺はすつかり花の中につままれてしまひました。長閑な、平和な景色、敦盛の首洗池のなかでは龜がおんぶして終日眠りこけてゐました。しかし何時どこから豹が飛び出すかしのいのです。どうして落ちついてお花見なんかして居られませう。豹の噂はますます高く、しまひには若狹にも出たとか、河内にも現はれたとか、熊野詣りが那智の近くで見たとか、そこいら中を一匹の豹が暴れ廻つてゐるやうな評判でした。

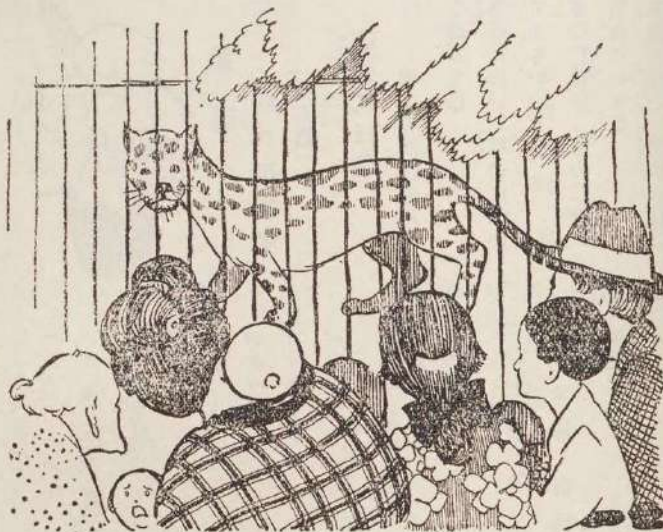
三

ある日の午後、突然消魂しい號外のベルと共に、
『豹が殺られた！』といふ噂がばつと擴がりました。それは事實でした。しかもその豹を殺したのが、

あの愛犬を殺されて泣いた少年であつたことを知つた私達は、まるで自分の親の敵でも討つたかのやうに喜んだのです。少年は、丹後の奥で豹に出會ひ、美事に愛犬の復讐を遂げたのでした。檻を脱出してから殆んど百日近く、これで豹の騒動もめでたくおさまりました。人々ははじめて安心して外出することができるようになりました。

花もすっかり散つてしまつて、大池の面に葉櫻の青い蔭が涼しく揺れそめた頃、豹の剥製が出来上つて来て、もと住んでゐた檻の中に飾られました。人といふものは珍しいものの好きですね、今度はさあ死んだ豹が人氣を呼んで、花見時のやうな多勢の人達がドツと須磨へ押しよせました。さんざん騒がせをした豹はもう動かなくなつて、硝子の目玉だけが、ぽかんと光つてゐました。

まもなく忠犬シロの埋められた梨の樹の蔭には可愛いお墓が出来ました。それは、少年が豹を斃して



得た賞金を割いて、わざわざ愛犬のために手向けてやつた美しい愛の結晶でした。夏の夕ぐれになるとそのあたりへほんのり黄ろく月見草の花が咲きました。私達はよくその花をシロのお墓にさしてやりましたよ。さあ、豹の方ですか、それは今でも多分遊園地の一隅に飾られてある筈です、もう大分埃をあびて白ぼけてゐるかも知れません——しかし、このお話の最後には是非つけ加へておきたいのは、その後私が直接少年から聞いた「ことは」です。勇敢な少年は一面非常に優しい愛情をもつた少年でした。彼は私にこんなことをいひました。

『——首尾よく豹を討ちとめた時はシロの敵もそれたことでした。うれしかつたのですが、後でよく考へてみると何だか豹が可哀さうでなくなつたのです。だつて豹は自分から逃げたくて逃げたのではなく、扉があいてゐたものだから何気なく外へ出たのでせう。きつとのびのびして、そこを自由に遊び

まはつたにちがひありません。そのうちに豹は自分のお家を忘れたのです。すると人間が騒ぎ出して、見つけしだいに鐵砲うつたり、わなをこしらへたり毒肉をそこらに撒いたりしたもので、豹の方でも段々用心せねばならなくなつて、山の方へ逃げこんだのです。そして今までは番人から餌もらひ、ゆつくり寢床で寝られたのが、急に食ものは自分で探さなくてはならないし、雨が降つても、風が吹いても寝る所も無くなつたので、だんだん氣が荒くなつて、野性にかへつてしまつたのです。可哀さうに豹もいろいろな苦勞をしたんですよ、その證據に、私が豹を討ち止めた時は、すっかり毛の艶なども無くなり、これがあの遊園地にゐた美しい豹かと疑はれた位でしたよ。』少年はしみじみこう話しました。なんと優しいおもひやりではありませんか、人間は誰でもこの心かけを忘れたくありませんね、さぞ今若い和尚さんはこういつて、静かに微笑みました。



童謡

野口雨情選

(大人篇)

草のにはひ

東京 河邊すみ子

このみちは
草のにはひ 草のにはひ
てふもかいでる
草のにはひ 草のにはひ
田舎はいふな
草のにはひ 草のにはひ

ごんび

京都 三須 英三

とんびの滑走は
上手だな
上手だな
上手だな

スー

スー

鳥の滑走は
お手下だな

一つお星さん

東京 林 宵雨

一つお星さん
藪のなか

可愛いお星になりました

一つお星さん

花の上

綺麗なお星になりました

一つのお星さん

海の上

お魚たちにも見えました

お月さんご

お星さん

朝鮮 河野 牧草

今夜のお月さん

傘さして

お星さんもまねして

傘さした

お月さんのお傘は
ぼかし傘

五〇

お星さんち小さな

ぼかし傘

お月さんち

お星さんち

傘さした

螢

東京 湖 なぎさ

螢アどこ行く

ホイノ ホイノ ホイ

お豆の提打

ホイノ ホイノ ホイ

螢ア来い来い

ホイノ ホイノ ホイ

ピカピカお星だ

ホイノ ホイノ ホイ

蚊帳つり草

の蚊帳

大阪 阪野 潤

小川のふちに

蚊帳つて

誰か ねんねこ

してるのよ

蚊帳つり草の

蚊帳つて

螢が ねんねこ

してるのよ

日暮れの河原

東京 佐藤 秀夫

日暮れの河原は

寂しい河原

石がゴロ／＼

並んではかり

葦がサ／＼

吹かれてばかり

蜻蛉スイ／＼

飛んでゐた

みづたまり

大阪 中村 宏文

紺屋のおせどの

みづたまり

きれいにそまつた

そらのいろ

やぶのこかげのみたまり

あをいおそらの

そめぬきに

とりのこされた

ひるの月

日暮れの河原



お馬の鈴は

長崎 西岡 水朗

しやんしやんしやらんこ

お馬の鈴は

山路つゞきの

葦のかげ

しやんしやんしやらんこ

お馬の鈴は

片山かげれば

山しぐれ

お月さん

茨城 増田 實

お月さんが

きれいな

かさめした

かさめした

今夜の様な

よい傘は

めつたにめさぬと

五一

父がいふた

夕方

東京 中村 武男

かたわれお月さん

夕方出てる

軒端にや

蚊が出てる

かたわれお月さん

ひとり出てる

蚊柱たて

蚊が出てる

雪

東京 原 まさる

淡雪 小雪

さらり

さらり、な

淡雪 小雪

すゞめが

一羽、な

淡雪、小雪

かちける

お手々、な

淡雪、小雪

お山に

さらり、な

お山の仲よし

たち

山 梨 吉川 行雄

山に仔馬は

ヒンとないた

草に小鳥はチツチと啼た

山にお日様

ニコリと笑つた

草に山いちご

チラリのぞいた

山に仔馬は

小鳥と遊んだ

草に小鳥は

よい唄うたつた

山にお日様

トロリと寝てた

草に山いちご、

頭かくして寝てた

露

東京 笠原 信雄

草ん中

草ん中

びつかびか

お星様

産んでつた

お星の子

草ん中

草ん中

びつかびか

おやどりこ

ひよこ

群馬 橋本 尊村

おやどりコツコ

ひよこはビイビ

菜種畑を

散歩だよ

菜種畑は

花盛り

ユラユラ蝶々も

飛んで居る

字さがし

甲府 石倉 眞造

なんて

字さがし

土の中

なんて

字かくし

土の中

なんて

字がでる

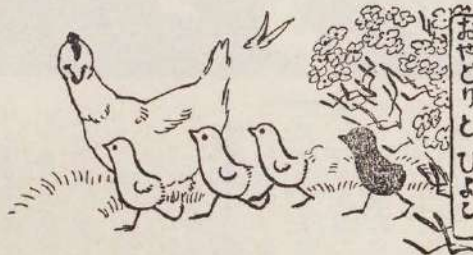
土の中

弟

大分 大塚 一仁

お背戸は 北風

おやどりといひ



さむいな
かきもち 焼けば

もち焼けば

兄さん 眼鏡に

あの かげが

障子のかげが

うつてる

じつと 見つめて

弟が

かきもち たべたべ

言ひました

竹藪

東京 中坂石次郎

風吹きア

あちらの竹が揺れ

風吹きア

こちらの竹が揺れ

ざんわり

竹藪は

風吹きア

ゆれ音たてる

森の中

東京 山形新二郎

裏のお山の

森の中

しんかんさみしい

森の中

落葉が

一つ落ち

カサリと

あとはさみしい

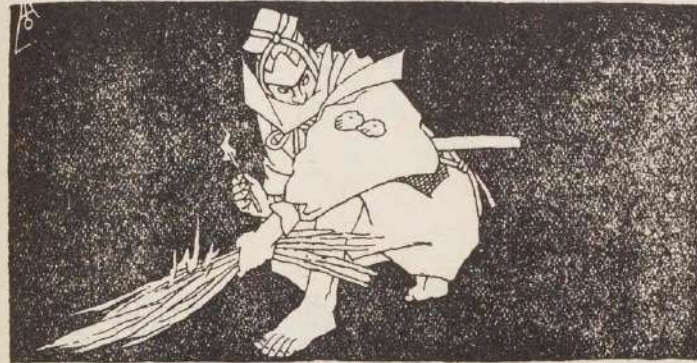
森の中

頼光の四天王

(無双の勇士、渡邊綱)

川崎 春二

羽鳥 古山 畫



渡邊綱は、武藏守源仕の孫でありました。この源仕はまた嵯峨天皇の王子、從二位左大臣源融公の孫にあたり、即ち嵯峨天皇から出た源氏、嵯峨源氏の血統でありました。

の任地である武藏國箕田といふ所に隠居をしなければならぬやうになりました。箕田に來てからは、所の名を姓として箕田仕と言ひましたが、間もなく箕田充といふ一人の子を残して病死しました。箕田充は生れつき病身で、二十才で早世しましたが、その妻は充の不幸の四十九日も過ぎない中に、まる／＼と太った例巧さうな可愛らしい男の子を産みました。

これが、やがて頼光の四天王中、随一の勇士となつて、武名を轟かす渡邊源五綱となるのです。

することは出来ない。都に上つて祖父さんの武藏守仕が仕へた六孫王經基の子の源蒲仲公を頼んで見よう——と、その時二才の赤坊の綱を懷に抱いて、はる／＼京都に上つたのでありました。

と見えて、またこの世を去つてしまつたのでした。まあ、随分可哀相な赤ちやんだつたのです。でも清前といふ氣だてのやさしい、賢い叔母さんがあつたので、綱の不仕合せは、まるきりの不仕合せで終らずにすみしました。

清前は、不仕合せな綱をば我が子のやうに可愛がつて育てゝをりましたが、

た人でありました。經基の子孫は、清和天皇から別れた源氏なので、清和源氏と呼ばれ、後々までずっと榮えた家柄であります。この血統からは、頼光

や頼信をはじめとし、八幡太郎義家や新羅三郎義光、鎮西八郎爲朝、鎌倉將軍頼朝、九郎判官義經、木曾冠者義仲等、有名な大將が何百人といふ程たくさん出ました。それからまた、足利尊氏や新田義貞や甲斐の武田信玄、常陸の佐竹義宣などもこの血統の者であり、徳川家康らもおなじく清和源氏の末々であります。

この他、源氏といふ姓にはいろいろな家柄があります。中で、宇多天皇から出た宇多源氏は、嵯峨源氏と並べられる名高い家柄で、これは近江源氏とも言つて近江國にをり、佐々木四郎高綱など一族です。戦國時代の六角承禎入道や木村長門守重成や、近くは乃木



大將なども、この宇多源氏の末流だといふことであります。このやうに多くの源氏の中で、立派な大將を出したのは何といつても清和源氏なので、後には源氏といへば、普通清和源氏ばかりを指して言ふやうになつたのです。渡邊綱が叔母さんの清前に抱かれて都に上つて来た時分には、この清和源氏の二代目の大將、源満仲が京都の朝廷を守護し、日本中の武士達に號令をしてゐた時代でした。

二

清前はまづ、親類にあたる源次敦といふ武士を訪ねて、綱の身の上を満仲公に頼んで貰ふことにし

ました。

満仲は、源次敦からその話を聞くと、大さう驚いて、早速、綱と清前とを召し寄せ、

「なる程、これはよい子供である。武藏守仕は我等が少年の頃、よく誠忠をつくして働いて呉れた。い

ろ／＼思出して懐かしい思ひがする。知らないことゝは言へ、武藏守が孫にそのやうな苦勞をさせたのは氣の毒であつた。成長の後には必ず我が家の家人として、重用ゐるから大事に育て、貰ひたい

——」かう言つて、攝津の渡邊といふ所の田二十町歩を與へたのであります。

綱は十三才の時から、召されて

満仲に仕へましたが、その計り知れない剛力と言ひ、眼の輝き、立居ふるまひと言ひ、普通の少年とは違つて末頼母しく見えました。箕田仕が孫でも、渡邊の莊で育つたのだからといつて渡邊源五綱と名乗させたのでした。

綱は十五六才の時分には、その智慧の働き、腕力、太刀の打ち方何ごとでも萬人に勝れてゐたのでその評判は京都地方で最早かくれもなかつたのでした。

満仲公が攝津の多田に城を築いて、そこに移り住むやうになつてからは、綱は程近い渡邊莊の叔母の家から、多田の城に往復するやうになりました。

やがて、満仲の子の頼光が十七

才で冷泉院判官代になり、京都の守護職を父より譲られた時、「忠義な綱は、其方のよい相談相手となるばかりでなく、其方の身の上をもよく守つて呉れるであらう——」と言つて、満仲は綱を頼光に附けて呉れたのでした。

若い源氏の大將頼光は、それからすつと源五綱を第一の郎黨として、何處へ行くにも側から離さないやうになりました。

それから五六年経つて、頼光は朝廷の命令で東國地方を鎮める爲に鎌倉に下ることになりました。綱も、従いて行つたことは言ふまでもありません。

ある年、源五綱は頼光の名代となつて京都に用達しに上つて來ま

したが、無事に用事も終つたので
久しぶりに攝津の渡邊莊に叔母を
訪ねました。

その時、源氏にとつて意外な大
事件が持ちあがつたのでした。

三

夜風がそろ／＼身にしみる秋の
末つ方のことでした。

京都の御所の縫殿陣のあたりを
見廻つてゐた、夜警の武士が、そ
こに火を放けようとしてゐた、黒
装束の曲者を一人捕へました。

火放けをするやうな大それた人
間が、どうして御所の内にまぎれ
込んだのか——夜警の武士達は有
無を言はず引き捕へ、引つから
めて檢非違使の役所に引き立てま

した。

役人どもは曲者を嚴重に調べま
したが、すこしも白狀しないばか
りか、名前さへ言ひませんでした。

曲者はたゞ、
「檢非違使藤原成道殿が直々の取
り調べでなければ、何ごとも白狀
することは出来ない仔細がある—
—」と言ふのでした。

そこで成道が、直接に取り調べ
ることにしました。

「姓名は何と申すか。」
「三葉五郎俊貞と申します。」

「何處の者であるか。また、如何
なる身分の者か。」

「東國の生れですが、今は源滿
仲公の家人でござります。」
「して滿仲公の家人が、何のため

來てゐた折なので、滿仲に謀叛の
企みあることは間違ひなしといふ
ことになりました。

「御所に火をかけて京をさわがし
その間に國々の武士を招いて都を
かこみ、武力を以て無理に天皇の
位を自分に都合のよい宮方に譲ら
せようとの心であらう——」

大臣達の意見はかう決りました。
で、滿仲やその一族の人々を何
氣ない風に朝廷に召し寄せ、その
まゝ檢非違使の役所に捕へて置き
ました。

大臣達の考へでは、早く滿仲の
罪を決めて死刑になり、島流しに
なりしたいのですが、少納言在
原秋忠といふ者が、
「今、滿仲の子息頼光が東國にゐ

るから、頼光を捕へない中に親兄
弟を罪すれば、武勇の頼光はどん
なことを仕出かすかわからない。

それとなく頼光を京に呼び出して
引き捕へ、一族を一度に罪に行ふ
方がよい——といふ意見なので
した。

「それから噂によると、渡邊綱が
京に上つてゐるさうである。綱は
郎黨であつても許しては後で面倒
を起す勇士、彼は今の内に早く召
捕つてしまはねばならぬ。また、
三葉五郎は吾等が引取つて罪に行

はう——」
少納言秋忠はかう言つて、一隊
の軍兵を渡邊莊に差し向け、三葉
五郎は自分が引き取つて歸りまし
た。

に御所に火をかけようといはした
か。」

「仔細は存じませんが、主人滿仲
公が、縫殿陣に火をかけて東國に
逃れて沙汰を待て。事が成就した
上は厚く恩賞をとらすると言ふこ
となので、勿體なくは存じました
が、主君の命令で止むを得ず忍び
入りました。——が、このやうに
捕つてしまつては、何もかも諦め
てしまひました。この上は、一刻
も早く死罪に行つて下され——」

檢非違使成道は、直に朝廷の大
官に申出でました。

その時は、遠江國の住人水瀬次
郎行春といふ者が、源滿仲が書
いたといふ謀叛の企てに加勢せよ
といふ廻文を持つて朝廷に訴へに

四

この少納言秋忠といふ人は、例
巧な人間でしたが心のよくない人
で、源氏が日に増し勢ひのよくな
つて行くのを惡み、何とかして滿
仲等の一族を亡てしまひたいと
遠江國の住人水瀬次郎行春や、
東國の武士三葉五郎俊貞といふ者
を使つて、源氏に罪を被せるやう
に計つたのでした。従つて、三葉
五郎をばそつと褒美をやつて逃が
してしまつたのでした。

一方、渡邊莊に向つた秋忠の軍
兵はどうしたか。また渡邊綱はど
うなつたか。
山野源内、大山太郎といふ者が
大將となつて、五十騎ばかりの武

士で清前の家を取りかこんだのでした。

しかしその時には、綱はもはや渡邊莊の叔母さんの家にはをりませんでした。満仲公が片腕と頼んだ六孫王經基以来の家来、藤原仲光といふ武士と相談して、一日前に他にかくれてしまつて、若しも、主君の満仲を死罪にでも行ふやうな場合には、刑場に飛び出して行つて助け出さなければならぬ。鎌倉の頼光には他の家来をやつて事情を知らせ、自分は仲光等と共に、そつと京にかくれて様子をうかがつてゐたのでした。

『綱殿は御在宅か。山野源内、大山太郎が朝廷の命令でお迎ひに参り申した——』

清前は、かねて覺悟してゐたことでしたから、すこしも驚かず、かう申しました。

『これはまことに御苦勞さまながら、綱は昨日東國の方へ立戻つてしまひました。』

『いや、たしかにこゝにをるといふ噂、吾々は最早、この屋敷をつかり取りかこんでしまつてゐるので、如何に渡邊殿が剛力でも遁れる譯にはいきません。それよりは、温和しく檢非違使の役所まで同道いたす方が身のためと申すもの——』

『これはまた、とんでもないお疑ひのお言葉、綱は三十騎や五十騎の京武士を恐れて逃げかくれるやうな者ではござりません。また

六〇
私とてもそのやうな卑怯な真似はさせはいたしません。全くこゝにはゐないので——』

『強情を張るなら、勝手に家探しをするから左様心得ろ！ それ、者共！ 踏込んで家中を探して見よ！ 綱はなかくの強者だから用心を怠るな！』

山野源内等は、武士達をどしどし清前の家に踏込ませて、簞笥や長持の中や、天井や床下までも一々取り調べましたが、とうとう綱の姿を見出せませんでした。

『しかし綱ほどの者が、主君の罪のどう決るかも見届けずに東國に下る譯はあるまい。誰の家にかくれたか、心當りのところを教へよ』
山野等は、今度はかう言つて清



前を責めました。

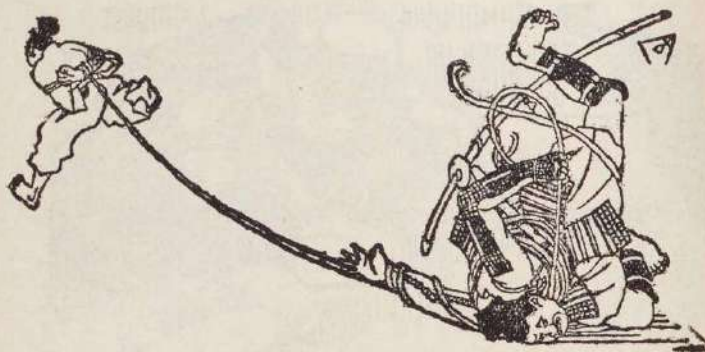
『これは——お武家さまがたにも似合はぬお尋ね。一旦家を出た武士が、今日何處にゐるやらわかる筈がないではござりませぬか。また知つてをればとて、この私が綱の在所を捕手の者にお話したすやうな者ではござりませぬ。』

『なる程、これは無益なことを尋ねた。この上は、綱が名乗つて出るまで其方を引つ捕へて置くから左様心得ろ！』

山野、大山等は、今度は清前を無理々々引き立て、京に歸ることにしました。

五

その翌日から山野源内、大山太



郎等の手の者どもは、綱の叔母清前を縛つて京中の町々を引きまはしました。——かうして、都中のさらし者にすれば孝心深い渡邊綱は、必と名乗つて出て来るに違ひないと考へたからです。

恰度、その引き廻しの一隊が六條大宮の通りにさしかつた時のこと、立ち騒ぐ多くの見物人の中から、逞ましい一人の若武者がひよつこり現れて、その行列の先頭に立ちふさがりました。

『さあ、渡邊綱が名乗つて出た！その代り叔母上をこの場から渡邊莊へ歸して貰ふのぢや——』

綱はかう喚鳴り出しました。

『者ども、はやく綱に繩をかけろ！』

山野源内等は、かう言つて武士達をばげました。が、武士どもは綱が怖くて近寄らうとする者がありませんでした。

この様子を見ると綱は笑ひながら、

『貴殿たちは卑怯者である！綱は、たゞは縛つては貰はぬ。——が、身代りの叔母を直ぐにこの場から許して下さるなら、決して恐ろしいことはござらぬ。まづ、叔母の繩を解いたら、この三尺五寸の大太刀を貴殿達に渡さう。それから、叔母が本當に許されて歩き出したら拙者の片腕に繩をかけさせよう。但し、叔母の後に一人でも附人をしてはならぬ。そして叔母の妾が全く見えなくなつたら、

この兩手を縛つてよろしい。それから、また叔母の行く方と反對の道を拙者は引き立てられて行くでしょう。』

随分、勝手な捕虜もあつたものです。けれども、綱の剛勇を知つてゐる京武士等には、その通りにしなければならなかつたのでした。清前は繩を解かれると、大太刀を投出した綱の側に向け寄つて

『そなたの孝心は嬉しいが、それでは主君のためにもそなたのためにもならぬではないか。私こそ、もうこの世には用のない體、どうなつてもかまはぬものを——』と涙をこぼすのでした。

『何の、叔母上！私故、とんでもない恥かしめや苦しみを

かけ申しました。私には御心配なく、どうぞ早くこの場を立ち去つて下さい！』

清前は、綱の意味ありげの眼を見て後に心を残しながら立ち去りました。

全く叔母の影が見えなくなつた時、綱は兩手を固く縛られて、反對の方向に温和しく引立てられて行きました。

やがて六條堀河のとある四つ辻の通りにさしかると、綱は急に左手の道に非常な勢で駆け出しました。

『それッ——』と言ふ間に、綱はもう十間許り飛走つてゐました。繩取りの武士は、繩の端を固く兩手に巻きつけてゐたので、手まり

のやうに、後から轉がつて行きました。

山野、大山等の武士達は、太刀を抜き揃へて追ひかけましたが、剛力無双の綱は屈強な武士を一人繩尻につけたまゝ、どん／＼走つて追ひつくどころではありません。

——だん／＼追手との距離が遠くなるばかりでした。

一町あまり走ると、ぶつりと綱は途中から蹴ち切れました。——繩取りの武士は、泥と血にまみれて風に息が絶えてゐました。

重りのなくなつた綱は、今は尙更輕々と飛ぶやうに走つて、間もなく影も形も見えなくなつてしまひました。

(つづく)



少年輕業師

三井信衛

岡本歸一畫

リエージュから、巴里に出る、長い一筋の街道を、右手にギターを提げた一人の少年が、力なく、とぼ／＼と引き摺るやうに歩いてゐました。もう余つ程、長い旅をして来たのか、その身に着けてゐる紅い衣服も、又空色のズボンも、すっかり埃まみれになつて、その履いてゐる二つの靴も、もう底が破れてしまつてをりました。それでも少年は、街道に添つた、村や町に行き着く度び、朗らかな音を立て、ギターを弾き、そして高く聲を張り上げながら、流行唄を歌つては、僅かなお禮を買つてゐました。

もう、何時の間にか、とつぷりと日は暮れました。日もすがら歩き疲れた少年がふと町の端れを眺めると、そこには古びた大きなお寺がありました。「さうだ。今夜はこゝで、一晚を明すとしようか。」

と少年は、誰に言ふとなくさう呟き、ぐつたりとその寺の石段に、腰を下すのでした。當のない彷徨の旅を送つてゐる、哀れな辻藝人の身にとつては、その冷たいお寺の石段さへ、身分に餘る程の、立派な宿り場所であつたのかも知れません。

少年は疲れのために、そこへ腰を下すが早いか、ギターを枕にして、もうすや／＼と、低い軀を立てゝをりました。いつの間にか、森の向方から月が出て、美しい少年の寝顔を、くつきりと照してをりました。……不圖少年が、耳を傾けると、何處からか美しい樂器の音が、高く低く、聞えて來るのです。その音に、いつかほんのり目を醒まされて、ぢい／＼と首を擡げて、その音の方を眺めて見ました。すると、この寺の同じ石段の一隅に、これも同じ辻藝人の少年が一人、青い月にしみ／＼哀しさうに、ぢつと動かずに首を擡げ、パンジョを弾いてゐるのでした。暫くの間、その美しい音に耳を傾けてをりました。

だが、少年もつい哀しみを誘はれて、何かしら話をして見たくてならなくなりました。「君……君……」低い聲で、何度も彼はさう言つてその少年の方に近よりました。

「やあ。」
パンジョを弾いてゐた少年は、初めてほつと夢からさめたかのやうに、樂器をおいてにつこりと、微笑むのでした。

「君もやつぱり僕と同じやうに、樂器を弾いて暮してゐるんだね。」
「あ、さうだよ。僕がこの村へ來て、ふとこゝを見ると君が寝てゐたので、僕も亦今晚の宿をこゝに定めた譯さ。でも、いろいろと行く先を考へてゐると、これからの長い旅が、何となく哀しくなつて、つい一くさりパンジョを弾いてみたくなつたのだ。」
語る少年の聲は、その弾いてゐたパンジョの音より、幾倍か哀しげに聞えました。

「君はこれから、何處に行くの？」

「何處に……それがわかつてゐれば、僕だつて少しも哀しくは思はないのだよ。」

「では君はこれから何處に行かうといふ當もないんだね。あゝ僕だつて君と、おんなじことなんだよ。」

「では君も……君は何處からやつて来たんだね？ さうして君には、お父さんやお母さんはないのかい？」

言はれて少年は、すつとの昔を思ひ出すやうに、青い夜空を仰いで語るのでした。

「それぢやね、僕のこれまでの話を一通り聞いてくれ給へ。」少年は言ふのでした。

二

ギターを持つた少年は、その名をエリユウドと云つて、白耳義のリエイジュで生れたのでした。なに一つ不自由のない、立派なお家に生れた彼は、日々

毎日を只夢のやうに送つてをりました。けれど、丁度今から十四年前、ヨオロッパには恐ろしい戦争が起つて、ドイツの兵士が、リエイジュの町へ攻めて来たのです。

その時エリユウドは、まだほんの小さい子供でした。エリユウドは乳母の手に抱かれて、その砲煙のこめ渡つた町の中を、やつと逃れましたけれど、お母さんはたうとうドイツの兵士に殺されてしまつたのです。さうしてお父さんは、未だにその行方が知れませんでした。一度リエイジュの町端れで、見たといふ人もありませんが、今になつても、生きてゐるのか死んでゐるのか、それさへもわかりません。貧しさは日に／＼と加はり、たうとうエリユウドは習ひ覺えたギターをひいて、かうして漂泊の旅に出ることになりました。

「ね、僕の身の上はこれなのだよ。でも、僕がかうして町から町、村から村を歩いてゐても、只つたの

一つ望みがある。それは若しかして、お父さんに會へはしまいかといふ、果敢い望みなのだ。」

語り終つてエリユウドは、再び遠い憶想の國を夢みるやうに、しみ／＼と青い月に、目を注いでゐるのでした。

「あゝエリユウド君……」

すると少年は、エリユウドの顔を、さも懐しげにちつと見つめ、又語るのでした。

「君が不幸な少年だらうとは、一目見て僕にはさうわかつたよ。こんな辻藝人が、幸福な日を暮してゐるとは、だあれも思ひはしまいだらうが……でも僕は、君がそれ程不幸な人だとは、思つてもゐなかつたよ。實際不思議な氣がするよ、君と僕は、同じやうな運命を持つてゐるんだものね。」

「え？……ぢやあ君も、さうして旅をしながら、誰か親身の人でも探してゐるのかい？」

「さうだ。だが僕は君と違つて、そんなにゝ生れで

はないのだよ。僕は生れついでに貧しい旅藝人なのさ。もう僕は生れると直ぐ、赤い道化の服をきせられて、寄席で踊つて暮してゐたんだ。だがお父さんは、本當に僕を可愛がつてくれたよ。そのお父さんが、今でも僕と一緒にゐてくれたら、どんなにいいだらうと、つく／＼さう思つてならないな。」

「お父さんは死んだの？」

「いゝや、イタリヤの方へ、稼ぎに行つた歸り途に僕は悪い男に誘拐されて、アメリカへつれて行かれたのだよ。そして今から一年ばかり前に、やつと逃れてこのフランスへ歸つたけど、お父さんの居所が、何處を尋ねて見たつてわからないのだ。お父さんはジャッゲエと云つて、もう今年六十にもなるだらうな。僕はこのパンジョが巧いので、「おいポオニイ、一つパンジョを弾いてみな」さう言つて、楽しさうに耳を傾けた、あゝ……その姿が、僕にはあり／＼と目にちらつてならない……」

エリュウドもいつか、目を瞬いてちつと首を垂れてをりました。聞いて見れば事情こそ違へ、同じやうな運命のこの二人。エリュウドは何となく、ボオニイが懐しくなつて來ました。

「ねえ、ボオニイ君……」エリュウドは思ひ切つてさう云ふのでした。「そして君は、何處へ行かうと云ふのだい？」

「今も云つたやうに、何處といふ當もないのだけど若しかしてお父さんが、巴里にあるかも知れないと思つて、そつちの方角に歩いて行かうかとも、考へてゐるんだよ。」

「そんなら僕も巴里へ行かう。」

「おゝ、さうかい。さうして一緒に、お父さんをさがさうよ。君と一緒にゐてくれると思ふと、僕も何だか力強くなるから。」

答へてボオニイは、又そつと圓いバンジョを手に取り上げ、静かにそれを弾き出すのでした。エリュ

ウドもギターを手にとつて、そのボオニイの弾くバンジョの唄に合せ、一くさりの流行舞蹈曲を弾きました。

さうして、やがてほの／＼と夜が明け始めると、二人は手んでに樂器を抱へ、再び巴里への、白い一筋の街道を、南へ／＼と歩いて行きました。美しいギターの音と、さうして躍るやうなバンジョの響きを、長く／＼邊りの森に残しながら、只一筋に巴里へ／＼と……

三

廣い野原や、大きな河を越えて、二人は長い苦しい旅をつゞけて行つたのです。ほんの少しばかり、藝の心附をもらつたときに、それを出来るだけ儉約して、たとへ少しでも、汽車に乗るやうにしました。父に會ひたい一心は、もう二人の少年樂師の胸に、暖あへぬ水のやうに迫つて來るものでした。どん



な苦しい思ひも、嵐の森に一夜を送つた苦しさ哀しさも、父に會へると思へばこそ、その苦しみを苦し

たとて、どうしてエリユウドには分らでせうか。ただ父の名がグルウモンと云ふ丈で、彼にはその顔さへも、うつすりとしか憶えてゐなかつたのでした。

いとも、二人は口に出しもしません。そして何ヶ月、行く町／＼で、二人は二つの樂器を弾き、又二人は一つの唄を歌ひ、やつと巴里の町へ着きました。

「とにかくエリユウド、出来るだけ彼方此方を歩いて見よう。さうして色んな人に聞いてみたら、ひよつとして行方が知れるかも知れないからね。」

『エリユウド……やつと着いたね。』

『あ……それぢや歩かう。何處までも、何處までも、行方のわかるまで……だがボオニイ、たとへ君

税關の倉庫の側に、二人は棒のやうに疲れた身をちつと憩ませながら、生れて初めて見る、にぎやかな巴里の町を、長い間眺めてゐるのでした。

のお父さんの居所が、僕より先にわかつて、やつぱり僕の力になつて、一緒に探してくれ給へね。』

『だがボオニイ、かうして遙々と、都へ來るには來たけれど、どうしてお父さんの行方を、探したらいいのだらう……』

『むろんさ。何處までも二人は兄弟のやうになつて暮さう。さアエリユウド、立ちたまへ、行かうよ。』

溜息をついて、エリユウドは言ひました。ボオニイの父は、別れてから二年程しか経たなかつたが、エリユウドが父と別れたのは、もう十何年の遠い昔にもなるのでした。町の中でひよつこりと父に會つ

二人は又と／＼と歩いて行きました。目の眩む程賑やかな町角、美しい貴婦人の馬車や、自動車の往き交ふ大通り、さては又廣い静かな散歩道や公園、至る所で二人は、樂器をひいて暮したのでした。ふと二と、丁度二人が巴里へ來た十日目でした。ふと二

人が町角を見ると、そこに輕業のビラが張つてあつて、その下の方にはんの小さく「ジャッゲエ」といふ名が見えました。

げに映してゐました。二人が入ると、今日は日曜のせゐか、もうぎつしりと見物人で詰つてをりました。背伸びをしな

『おい、ボオニイ！』エリユウドはしつかりと、ボオニイの手を握つて、さう言ひました。

がら、二人はその黒山のやうな見物の間から、やつと舞臺を見ることが出來ました。

『ジャッゲエといふ名がある。もしや君のお父さんではないだらうか？』

紫いろの短いブチコートをつけた、五十人ぐらの少女が、圓い舞臺の周りを、踊りながらぐる／＼と廻つてゐるのでした。それが見る／＼うちに引つ

『お、ジャッゲエ……ひよつとしたらさうかも知れない。さあ一緒に往つて見よう。』

込んでしまふと、その後へすぐ、赤と白とのだんだらのシャツを着た、三十八ばかりの男が、左右から現れました。

二人は呼吸を弾ませながら、その町辻を後にすると、カリエール通り五丁目の、大きな曲藝團の前に

舞臺の真中に、その三十人が一列に並んだかと思ふと、兩端の何人か、肩の上に飛び乗つて、瞬く

着きました。細長い旗が一齊にひら／＼風に翻り、その正面に突き出た青い張出しの上では、七人の樂手たちが、てんでにピカ／＼と光つた喇叭を持つて

うちに、二等邊三角形に人の山が出來ました。さうして樂隊に合せて、大搖れに搖れ動き、だん／＼とそれが早くなつて遂にバラ／＼と崩れました。かと思ふと一人々々、とんぼ返りを打ちながら、又見る

間に姿をかくしてしまひました。そのときでした。メリアイルといふ可愛い一人の少女が、三丈もある高い綱の上に現れて、そろ／＼と探るやうに、綱渡りを始めたのでした。

「あゝ！ エリユウド、お父さんがゐるよ！」突然ボオニイがさう激しく叫んだのでした。

「え？ 何處に……？」

「あの青い服をきたビエロオだ。」

ボオニイの聲も手も、今はぶる／＼と、慄へてゐました。二人は顔を舞臺に突き出しながら、綱渡りの真下を、けんめいに見つめてゐました。そ



の下では一人の青い服をつけた道化者が、綱渡りの歩みに合せて、くるり／＼と、とんば返りを打つてゐました。いつかボオニイの話した通り、もう余つ程の老人と見えて、道化帽子の下からはみ出した頭の髪は、すつかりと白くなつてをりました。それに思ひなしか腰も曲つてゐるやうです。

「ボオニイ、早く樂屋で會へるやうに、話をしておき給へ。」

「おゝ、さうだ、さうしよう。」

ボオニイは嬉しさの餘りに、額に汗さへも浮べて、大勢の見物の



間を押しのけて、廊下に出て行きました。けれど、さうしながらもボオニイは、後を振り返り／＼、いつまでも父の姿を、片時も離さないやうに、眺めてゐるのでした。二人が曲藝團の人に頼むと、直ぐ小屋の二階にある樂屋に通されました。すつと遙かの方から、まるで夢のやうに、樂隊と拍手の音が聞えて來るのでした。それがいつか止んでしまふと、つと樂屋のドアを開いて入つて來た。

見る／＼顔の色が蒼ざめて行きました。

父ジャッゲエの横には、更にもう一人の男がついて、その手をちつと握つてゐました。そして父の右手には、太い杖が握られてゐました。おゝジャッゲエは、舞臺では少しも氣がつかかなかつたけれど、思ひがけなくも、盲目となつてゐたのでありました。



大發明家

エヂソン

廣瀬龍太郎

平澤文吉 畫

七四

エヂソンは、電燈、電扇、電話、活動寫眞、留聲機、發電機、其他數え切れないほどの多くの發明をした人です。今、現在生きてゐて、盛んに研究を續けてゐます。これから先、どんな素晴らしい發明をするか分りません。

そのエヂソンとは、一體、どんな人であるか？ 子供の頃は、どんな事をしてゐたか？ と云ふ事に就いて、お話ししたいと思います。

一、お母さんにそっくり

いま、この家の一つの窓から、遠い野原の方を眺めてゐる一人の男があります。春の青い、骨格のしつかりとした男です。ですが、なんとなく心配さうな顔をしてゐるのは、どうしたわけでしょう。

窓からは、廣い野原の間を、うねりと帯のやうに曲りくねつて流れてゐるエーロン河が見えます。河上の方は、陽の光りの加減でキラ／＼と輝やいてゐます。併し、男は、ぼんやりとその景色を見てゐるだけで、心では

別の事を考へてゐるのです。

やがて男は、窓際を離れて、兩手をズボンのかきしに突つこんだまゝ、室の中を行つたり來たりしはじめました。一體、何が心配なのでせう。

そこへ、勢ひよく扉をあけて、隣りのお上さんが這入つて來ました。お上さんは、赤い顔ないう／＼赤くして、いかにも暗しさをうけてゐる。

「サミエル、サミエル！ 生れましたよ……」お上さんは男の顔を見たりかう云ひました。まあなんて大きな聲でせう。

サミエルと呼ばれた男は、立止つて、お上さんの顔を見ました。

「え？ 生れましたか？ さうですか。男ですか？ 女ですか？」

「男のお子さんです。そりやもう可愛い、のなんのつて、鼻のあたりから、口許から、お母さんにそっくりです。早く來てごんなさいまし……」

お上さんはかう云つて、又アタフタと元へ

引歸して行きました。

男の顔には、満足さうな微笑が浮びました。「さうか、男の子だつたか……」母親によく似てゐると云ふが、氣質も母親に似てゐてくれるといふが……」

男は俯向きながら、こんな事を考へてゐました。

トーマス・アルヴァ・エヂソンは、かうしてアメリカの片田舎の、お百姓の家に生れました。

エヂソンは、小さい時、昔ながら、

「アル、アル……」と呼ばれてゐました。これは、アルヴァ・エヂソンの、一番上だけな取つたものです。

アルは、とてもさかんばで、やんちゃものでした。なか／＼、お母さんの云ふ事なんか聞かされません。時々、突拍子もない惡戯を仕でかして、お母さんを困らしてゐました。アルは、頭が大きい、可愛いらしい顔をした子供でした。口許に、なんとも云へぬ愛嬌があつて、この顔を見てゐると、誰れでも白

然と微笑ますにはゐられませんでした。

「アルや、アルや……」アルは何處へ行つたの？」

臺所の方から、お母さんの細高い聲が聞えて來ます。先刻まで、臺所の板の間で温良しく遊んでゐたのに、お母さんが一寸油断してゐる間に、もう何處へか逃げて行つてしまつたのです。

「困つた見だれえ、又運河の方へ遊びに行つたのぢやないかしら？」

お母さんは、心配さうに呟きました。アルの家の傍には、湖の方へ通じてゐる大きな運河があります。アルは、その運河の傍で遊ぶのが大好きでした。運河の岸には、菖や野菊などの美しい花が咲き亂れてゐるし、又、大きな造船工場があつて、多勢の船大工達が、毎日、鑿や金槌を揮つて、仕事をしています。

「又、工場へ行つて、小父さん達を困らしてゐるのかも知れぬ……」

お母さんはかう思つて、二階の窓から運河

七五

の方を見渡して見ました。
すると、家の傍、運河の方へ降りて行くダ
ラ／＼が、アルが丁度船でも轉がすやうに
なつて、驅けて行きます。兩手で頭を抱え
てゐるのは、お母さんに顔を見られまいと思
つてゐるのでせう。
その後姿を見て、お母さんは、にっこり
と微笑みました。

「ほんとに、あの兄はどうしてあんなに、工
場が好きなんだらう？ まさか大きくなつて
船大工になるつもりでもなからうが……」
お母さんはこんな事を思ひながら、何時ま
でもその窓の所に立つて、運河の方を見てゐ
ました。お母さんにとって、この可愛い、ア
ルは、何物にも代えがたい寶でありました。

二、何故なの？

アルが、造船工場へ這入つて行くと、そ
こで働いてゐた多勢の大工達は、一度にニッ
ちを振りかへりました。
「小父さん、今日は……」と、アルは挨拶し

ました。

「なんだ、小僧か……」大工達はかう云つて
「またうささい奴がやつて来た……」と云ふ
やうな顔をして、再び仕事にとりかゝりまし
た。

アルには、妙な癖があつて、なんでも物を
聞き鳴りたがる性分なのです。

「これは、どうしてかうなの？」

「あれは、どうしてあ、なの？」

と、人さへ見れば訊ねたがります。

この造船工場へ來ても、忙しい大工達を
つかへて、

「小父さん、鉋屑は、どうして丸くなるの？」
だの、

「小父さん、船にはこんなに澤山鉋が使つて
あるのに、何故沈まないの？」

などと、いろんな事を聞くのでした。大工
達も、はじめの内は面白がつて相手になつて
ゐましたが、その内にだん／＼うさ／＼なつ
て來ました。又、事實、大工達には、鉋から
スル／＼と出てくる鉋屑が、丸い輪のやう

アルは、家にゐる時でも、お父さんに色ん
な事を訊ねました。

「お父さん、遠い所にあるものは、なぜ小さ
く見えるの？」

併し、お父さんには答へられませんでした。

「遠いものが小さく見えるのは當然ぢやな
いか。近い所のものは、大きく見える……」

「近い所のものは、なぜ大きく見えるの？」

「さア、お父さんは知らないね……」
と云ふと、アルは丸い眼をいよ／＼
丸くして、

「知らない？ なぜ知らないの？」

と、不思議さうに訊ねかへすので
した。お父さんも、この未來の大發
明家には、少なからず手古摺つたも
のと見えます。

三、羽根が生えて 飛んでゆく

ある時、こんな事がありました。
お母さんが、お部屋で絹物をしてゐます

と、窓邊小屋の方から、
「ガア、ガア、ガア、ガア……」
と云ふ騒がしい聲が聞えて來
ました。

「なんだらう？ 犬で
も這入つたのぢや
ないかしら？」



な形になる理由が、ちつとも判らなかつたの
です。

「小父さん、お湯はなぜ熱いの？」

こんな事を訊ねた事もあります。

「熱いから熱いんだアレ、水なら冷たいぢや
ないか、アツハツハ。」

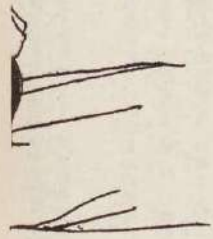
大工は返事に困つて、笑ひで胡魔化してし
まふ事がよくありました。

「あの小僧は、なんだつてあんなに、下らな
い事を聞くんだらう。」

大工達は、よくかう云つて笑ひ合ひました。

「つまり、馬鹿なんだれ、少し足りないんだ
れ。」

結局、さう云ふ事になりました。



顔をして、頭には水盥を載せてゐました。なんでも、夕方頃からひどくお腹が痛んで、吐き下したのださうです。お医者さんは、一應診察して、何か悪い食物に中つたのだからと云ひました。

アルは、ふつと「あの薬のせいぢやないかしら？」と思ひましたが、いや、あの薬は天使になる薬であつて、決してそんな毒になるやうなものぢやないと、確く信じてゐました。アルは、今でもスザンナの音中に翼が生えなかつたのは、スザンナの心がけが悪いからであつて、決して薬が悪いからではないと思ひ込んでゐたのです。

スザンナは、アルから得物の知れない飲物を貰つたと云ふ事などは、一言も喋べつたりしませんでした。そして、アルの頭を撫でな

がら、「坊ちゃん、あたしは、もう少しで天国へ行くところでしたよ。」と云ひました。併しアルは、その意味を間違へて、「うん、駄目だよ、スザンナは天使にはなれないよ。」と云つて、首を振りました。

エヂソンはかうして、その小さい時、「飛ぶことの出来る薬」のある事を、確く信じてゐました。そして、それを實地に試して見たくて堪らなかつたのです。

エヂソンは、大きくなつてから「飛ぶことの出来る薬」よりも、モット／＼不思議な、ほとんど魔法使ひのやうな不思議な發明を成し就げました。

四、エヂソンのお母さん



エヂソンがセツにたつた時に、一家は今まで居た所を引き拂つて、ミシガン州のユーロンと云ふ所へ移りました。ユーロンと云ふのは、有名なユーロン湖の岸にある、賑やかな港町でした。

お父さんは、この町の郊外に、こぢんまりとした家を建てました。ほんの、二間か三間の、小さい住居でしたけれど、家の廻りには、広い空地があつて、そこには林檎や梨の木などが澤山植つてゐました。

この町で、エヂソンは、はじめて學校へやられました。未來の大發明家は、定めし一を聞いて十を知るやうな天才兒であつたらうと思ひますけれども、實際は決してさうではなかつたのです。

エヂソンは、學校は遊びに行く所であつて勉強する所ではないと思つてゐました。お友達とキャツキャツと云つて、泥でもぶつかけあつて遊んでゐればそれでいいのだ、ぐらゐに思つてゐました。

ですから、學校の成績は、まるでなつてゐ

ませんでした。學期のはじめにエヂソンが買つて來た通信簿を一日見たお父さんは、苦虫を噛みつぶしたやうな顔をしました。その頃の思ひ出ばなしを、エヂソン自身の口から話させて見せよう。

「あの頃、私は、全く學校の成績が悪かつた。學校の先生は勿論の事、お父さんでさえも、私の事を馬鹿だと思つてゐました。」この兎は少し頭腦が足りませんでした。お父さんは、他所の人が見ると、よくこんな事を云つてゐた。あんまり皆んなから馬鹿だ／＼と云はれるので、後には自分自身でさへも、「なるほど、俺は馬鹿かも知れんぞ。」と思ふやうになつた。

或る日の事であつた。私がフト、學校の數員室の前を通りかゝると、其處の扉口の所で私の受持の先生と、校長先生が何かヒソ／＼と話してゐるのを目についた。私は、そつと傍へ寄つて、耳を澄した。話は、この私——アルヴァ・エヂソンの事である。

五、先生が叱られた

ところが、學校へ来て、叱られたのは私ではなくて、先生であつた。お母さんは、教員室へ押しかけて行つて、校長先生と受持ちの先生の前に並んで、こんな事を云つた。

「學校と云ふ所は、勉強の出来ない兒や、やんちゃな子供を引取つて、少しでもよくして下さる所だと思つてゐましたのに、飛んで下さる所だと思つてゐましたのに、私の子供は今日、勉強が出来ない、悪戯が過ぎる」と云ふ理由で、退學になつたさうでございませう。退學結構でございませう。いえ、こんな學校は、私共の方からお断り申上ります。貴方々は、この兒を馬鹿だと仰しやつたさうです。さうかも知れませう。併し、私の考へと致しましては、子供はあんまり利巧ぶつた、コレうした子供は大嫌ひでございませう。この子供が大嫌ひになりましたら、貴方がたよりもモト／＼偉い者になる事を、私は確く信じます。」

てゐた涙が、一時に溢れだして、ワットと云つたなり、お母さんの眼に細みついてしまつた。

私は、涙と鼻汁でゴツゴツになつた顔で、お母さんの前物に押しつけながら、今までの事を残らず話した。お母さんは指で、私の髪の毛を分けながら、黙つて聞いてゐた。永い間経つてから、お母さんは、私の身體を押しのけて、しつかりとした口調で云つた。

「さア、アル！泣くのを止め。そして、お母さんと一緒に學校へ行くのです。」

私は、そのお母さんの聲が、何時にない、優しい調子なので、一寸驚いてその顔を見上げた。お母さんは、青い、引き緊つた顔をしてゐた。

私は、學校へ行つたら、ウンと叱られると思つたので、「行くのは厭だ」と云つた。併しお母さんは承知しなかつた。私は、首を縄を附けられた野良犬のやうに、兩足を踏んばつて行くまいとしたが、お母さんは私の耳を引張つてダン／＼學校へ連れて行つた。

「……どうもあの兒は、成績が思はしくありませんでなア……」と云つて、顔を曇めてみせたのは、私の受持ちの先生である。

「左様……成績が悪いだけなら未だいいが、態度を悪くするので困る。窓ガラスを壊したり友達を泣かせたり……この間も、ジョンソンのお父さんから、あの兒に就いての苦情の手紙が來てゐる……」

かう云つたのは校長先生だ。私の心臓は假かにドキ／＼と高鳴りだした。なほも耳を澄せてみると、二人の先生は、いろ／＼と私の悪い所を詰めた揚句、あんな兒を置いては學校の爲めにならないから、退學させることにしよう、と云ふ事に話が決まつた。私の顔は、一時にカーツと熱くなつて來た。もう前後を考へる暇もなく、そのまゝ夢中になつて我がへ駆け戻つて來た。私が足音を駆け戻つて行くと、奥からお母さんが、吃驚したやうな顔で出て來た。

「さア、どうしたの、アル！」

私は、お母さんの顔を見ると、今まで堪えてゐた涙が、一時に溢れだして、ワットと云つたなり、お母さんの眼に細みついてしまつた。

母親は、二人の先生を前に於いて、キツパリとか云ひました。先生は、少なからず度胸を抜かれて、眼をパチクリさせてゐました。

「いや、なにも、その……馬鹿だなどと……」

「いえ、もう何んにも何ひたくありません。今日限り、退學させて戴きます……母親の正しい眼から見れば、この兒は決して馬鹿でもなんでもない云ふ事を、繰り返し申上げて置きます。」

母親はかう云つて、私の手を引いて、どんな學校の門を出て行きました。その歸り途に、母親は一言も言ひませんでした。私が、私の母親に對する感謝の心は、到底、口には盡せませんでした。私は、何處、母親の胸に飛びついて行つて、思ふ存分、キッスしたかつたかも知れませんでした。

それから後、母親は二度と私を學校へ入れませんでした。そして、仕事の合間々々を見て、自分で私に読み書きを教へてくれたのです。若しも、母親が、私のほんとうの價値を

認めてくれなかつたら、私は、どうなつたでせう。母親は、私のぐうたらな性質の中からほんの僅かばかりの、所を見抜いてくれたのです。この兒はこれでめて、中々棄て難い所がある、と思つてくれたのです。私は、なんと云つて母親に感謝して、か分りません。

私はそれ以來、ぐつと性質に落附きが出来て來ました。お母さんは、私を信じてゐてくれるのだ。私は何んとかして、お母さんの望み通りの人間にならねばならぬ、と云ふ事が腦氣ながら分つて來たのでした。」

エヂソンは、子供の頃を思ひだして、かう語つてなりました。残念な事に、この母親は、早く世を去りましたけれども、エヂソンの幼ない頃に母親から受けた幾多の教訓は、エヂソンの一生を支助しました。

六、二千種の發明

エヂソンは、それから毎日、お母さんに就

いて、算術や綴方を習ひました。お母さんは、自分自身で、親しくエヂソンに教へて見せて、非常に驚いた事は、エヂソンが強い記憶力と、優れた理解力とを持つてゐると云ふ事でありました。

エヂソンは殊に、自分が面白いと思つた事に對しては、驚くほどの熱心さを持つて、耳を澄して聞いてゐました。そして、たゞた一度で完全に理解するのです。エヂソンはその頃から既に、化學や電氣學に就いて、興味を持つてゐたと云ふ事です。

エヂソンは大きくなつてから、數多くの發明を完成しました。『電燈』だけに就いても、エヂソンは、百六十九種の特許權を持つてゐると云ふ事です。又、九十七種の發電機、二十種の電氣計量機、同じく二十種の蓄電池に關する特許權を持つてゐます。更に他の發明品を合算すると、全部で二千種に達すると云ふ事です。

麥 (推應)

愛知 鈴木敏夫

伸びた伸びた
ツン伸びた
麥が三尺

たんぽぽ



ツン伸びた
出した出した
首出した
麥の穂三寸
首出した

たんぽぽ (推應)

群馬 青柳花明

ほうけた たんぽぽ
吹いたら ほう
わた毛が 種子もつて
飛びたつた ほう



ほうけた たんぽぽ
わた毛が ほう
お空へ 種子もつて
行つちやつた ほう

春の月 (推應)

和歌山 檀上春清

ちいさな わた毛が
ひこつぶ ほう
種子もつて 飛びたつた
お空へ ほう

さゝやぶ
雀は
もうねたか
春のお月さん
おぼろ暈

からかさ
かざして
藪の上

お月さん (推薦)

京都松尾文雄

お月さん
鼻がない
丸いお顔に
鼻がない

八六

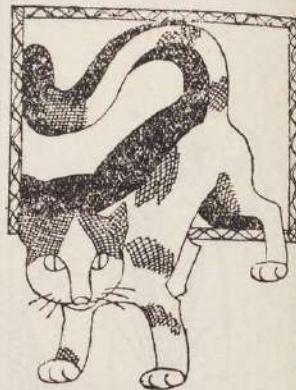
月夜 (推薦)

千葉大川政雄

十五夜
お月さん
笑つて
丸い顔して
笑つて

十五夜

かがみのやうな月が
大けやきの上に出た
たんぼでないてゐる
かへるのころも
すぎごうつてきこゐる



トラがネコになつた話

西川喜平

井上猛夫 畫

ある國に、駄陀良王と云ふ、王様がありました。
この王様は、生れつきの我儘で、自分の望むものは、なんでも出来ない事はないと、思つてゐるので、すから、夏の日盛りに、雪を降らせるの、冬の寒い夜に花を咲かせたいのと、いろ／＼無理なことを云ひ出します。

これを臣下たちが、出来ないといふつたらそれこそ大變、スグに怒り出して、御殿中の人を殘らず裸にして、海の水をくみ干せ、それから、チン／＼マゴ

マゴをして、山へ登れなど、一層むづかしい、難題を出して困らせるので、臣下たちは、毎日／＼何か云ひ出しはなさぬかと、ビク／＼してゐました。
ある時、唐の國から、澤山の贈り物が届きました。
いづれも、これまで見た事もない、キラキラ光る玉や、美しい織物や、その外珍らしい目を驚かせる物ばかりなので、王様は大さうお喜びになりました。
その中に、唐の名人のかいた、立派な一枚の繪がありました。

八七

その繪を見ると、大きな獸をかけたので、ムクムク毛の生へてゐる背には、黄色な所へ、黒い美しい斑があつて、眼は金色にきら／＼と光り、髯は銀の針を植えたやうで、クワツと開いた口には、劍のやうな齒が、ニョッキリと生へてゐる。まだ見たことも、聞いたこともない、不思議な獸なので、王様は臣下たちに、

「この獸はなんと云ふのだ。知つてゐる者は、遠慮なく云へ。」と訊ねました。



とところが誰一人、知つてゐる者もないので、なんと申上げていゝか、モジ／＼してゐると、王様は、
「サア／＼早く答へろ。この大勢の中に答へる者はないのか。」と、大聲で怒鳴つたので、臣下たちは縮み上りました。
ところへおいでになつたのは、王様の平素から信仰しておいでになる、武干禪師と云ふ坊さんでありました。
禪師がおいでになつたので、臣下たちはホツト息をついて安心をしました。
王様は、武干禪師をお迎へして、
「丁度よい所へおいで下さつた。この繪にある獸は何んと云ふものであるか、教へて下さい。」と云ひました。
禪師は、巻いてある繪を展げて見て、
「ホ、ウ、これは、トラの繪だ。」と云ひました。
武干禪師は尙言葉を繼ぎまして、



「このトラは、獸の中でも一番強いもので、どんな獸でも、このトラに向つて、かなふ者はない。また足の早いことは、千里一と飛びと云つて、千里でも二千里でも、一と飛びに行く珍らしい獸です。」と話しをしました。
王様はこの話しを聞いてから、トラの繪が氣に入つて、毎日／＼繪をながめて、喜んでゐましたが、
「繪のトラは、いつもデットしてゐて、面白くない。その千里一と飛びのところを見たいものだ。誰でも生きたトラを、スグ捕へてこい。」と臣下たちに向つて命令しました。臣下たちは、
「サア大變だ、國の中にあるものなら、どんな事をして、捕へて來られるが、ナニシロ唐は、何千里と云ふ遠い國で、中々急の間にあはない。これは亦禪師さまに願ふより外に仕様もない。」と、武干禪師に願ひました。
武干禪師は、臣下たちの云ふ事を聞いて考へてゐ

ましたが、臣下の中で一番知恵のある摩加大臣と云ふ人に、何か云ひ含めて、王様に申し上げます。

摩加大臣は王様の前へ出て、

「武干禪師さまにうかがひました所、トラと云ふ獣は、唐からまだグツト遠い天竺にゐますので、生捕つて参りますには、どうしても十年はかゝります。」

王様は、

「ナニ十年もかゝるのか。」と驚きました。大臣は言葉をついで、

「その十年かゝる所を、禪師さまの法力で、一年ほどで、歸つて参ります。その時には、立派なトラを生捕つて参ります。」と申し上げますと、王様は喜んで「それでは、今日よりスグ行つて、一年目には、キツト歸つて来い。トラは千里でも、二千里でも、一と飛びとの事だ、歸りには、トラの背に乗つて、一と飛びにして来い。」と云ひました。

摩加大臣は、武干禪師の手紙を持つて、唐の國へ

旅立ちました。

それから、一年立つて約束の通り、摩加大臣が歸つてくると云ふ知らせがありました。

王様は、毎日／＼一年の間、待つてゐたところなので、早くトラの生きたのを見たいと、臣下たちを御殿へ残らず集め、摩加大臣の歸るのを待ちました。やがて、摩加大臣は、大きな唐の船に乗つて歸つて来ました。

船から陸へ上ると、スグ王様の御殿へ参りました。王様はじめ、臣下たちも摩加大臣は、大きな生きたトラをつれて来ること、思つてゐると、大臣の持つて来たのは、一とつの大きな箱ばかりでした。

王様は、摩加大臣を睨みつけて、

「コリヤ、生捕つて歸ると云つた、トラはどうしたッ。」と怒鳴りました。

摩加大臣は、

「ハ、ッ、お約束の生捕のトラは、これで御座いま

す。」と云つて、持つて来た箱の蓋を開けると、中から飛び出したのは、顔や形は繪にあるトラと同じですが、黄と黒の斑もあれば、黄に黒に白の交りや、黒と白、白と黄の染め分けのやうなものもあり、中には又眞つ黒なのや、眞つ白なのもあつてその體の小さいことは、膝の上に抱き上げられるほどの可愛らしい獣で、それが何十疋となく、ニヤウ／＼と鳴きながら、御殿中を駆け廻りました。

王様はじめ、臣下たちも呆れて、

「コレは何んだ、珍らしい獣だな。」

「ハッこれは、トラの子でございます。」

「ナニ、トラの子、これは可愛らしいものだ。」と抱き上げると、

ブーツと聲を上げて、齒をムキ出し、爪を立てますので、

「ナルホド、トラの子だけあつて強いものだ。」と感心しました。

摩加大臣は、

「唐から天竺へ渡り、大きなトラを捕へましたが、その強いことは、箱を破り、鎖を噛み切り、とても持つてくる事が出来ませんでした、代りにトラの子を持つて参りました。」と申し上げます。

それから王様は、トラの子を可愛がりまして、臣下の中から、トラの子掛りをえらんで、大切に飼つて置きました。その中に子が産れまして、また子が子を産み、いつの間にか何百疋になりました。

王様は、トラの子を大きくして、千里一と飛びの所を見たいと、待つてゐましたが、何年たつても、大きくならないので、摩加大臣を呼び出して、

「お前の持つて来たトラの子は、いつまで待つても大きくならないのはどうしたのだ。」と訊ねました。

大臣は、前に武干禪師と相談をしてゐるので、早速禪師を呼び迎へました。

武干禪師は王様の前へ出て、

「トラと云ふ獣は、二年や三年では、中々大きくなりません。が五六年もたつと、一遍に大きくなります。それで一度暴れ出したら、この御殿の太い柱などは、一と噛みに、噛み碎いてしまひます。又この屋根へ上りますと、この御殿などは、一と潰しに踏み潰してしまひます。さうなつては、何百人、何千人かゝつても、とても捕へることが出来ません。それも一疋なればまだいゝが、今でも何百疋、もう五六年もたつと、何千疋になりますから、それが暴れ出したら、あなたのお身體ばかりでなく、この國がメチャ／＼になつてトラの國になつてしまひます。」と云ひましたので、王様は慄へ上つて驚きました。

武干禪師はまた言葉をついで、

「ですから、今の中に天竺へ返してしまつた方がいい。しかしこの可愛らしいトラの子を返すのも惜しいから、何年たつても大きくならずに、今のまゝでゐるやうにしてはどうです。」と云ひました。

王様は大さう喜んで、

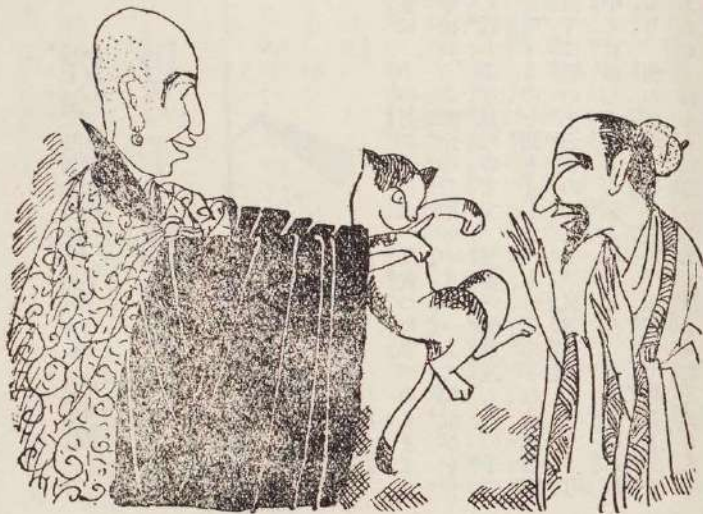
「どうか禪師さまのお力で、さうしていただきたいのです。」と願ひました。武干禪師は、

「ヨロシイ、それでは、これからお經をあげて、トラの子を大きくならない、お祈りをしてあげます。シカシ、と言葉に力を入れて、「このお祈りをするにつけて、わたしの望みを聞いて下さるか。」と云ひました。王様は、

「エ、なんでも、あなたのお望みを聞きます。お寺を建てる事でも、お金でも、寶物でも。」

「イヤそんな物は欲しくない。わたしの望むのは、あなたの臣下たちに、今までのやうな、我まゝな無理を云ふのを止めてもらひたいのです。これさへ聞いて下されば、スグに祈りのお經をあげます。」と武干禪師は云ひました。

王様は、信仰してゐる武干禪師の云はれたことであるし、又お祈りのお經もあげてもらひたいので、



「あなたのおつしやるとは、これまでのやうな、我まゝは云ひません。」と誓ひました。そこで武干禪師は「よく誓つて下さつた。それでは、この後誓ひを破られれば、トラを一遍に大きくしますぞ。」と云つていよくお祈りのお經をあげる事になりました。それから、御殿へ大勢の坊さんを集め、むづかしいお經をあげました。

そして最後に、武干禪師は、一段と聲を張上げて

「ナムカラ、タンノウ、トラニヤア〜。」

「ナムカラ、タンノウ、トラニヤア〜。」

「ナムカラ、タンノウ、トラニヤア〜。」

と三度、唱へました。

それから武干禪師はトラの子のおとなしくして寝てゐるやうにと、「ネコ」と名づけました。

スルト不思議にも、お祈りのお經をあげてから後は、王様の我まゝがやみまして、トラの子も、いつまでも可愛らしい、おとなしいネコになりました。

(をばり)

煙突掃除夫になつた

男の子の話 (推薦)

足立孝平

岩岡とも枝 畫



九四

妻は、あの男の子には一度會つた事があります。學校からの歸途の公園の中で、一人で細飛びをやつて居るのを見たのです。又妻の御友達もあの子の事を噂するのを聞きました。あの男の子は此處の町の者では無いと云ふのでした。又毎日何もせず、町の中を放浪して居ると云ふのでした。あの子はそれで毎日、他の店から物を盗んでは食べて居ると云ふのでした。ほんとに盗んで居る所を見たと言ふ人も

ありました。又あんな悪い子には要心しなければならぬと云ふ人もありました。妻は、そんな事を聞かされて居るので、あの男の子に會ひはしないかと、いつも學校の往き歸り途を恐恐通つて居ました。しかし妻の眼には、何時ぞや公園の中で見た、ひとりぼつちで遊んで居た淋しい妻が浮んで來てなりません。妻は、そんな悪い子だとはどうしても信ぜられませんでした。

妻が要心して居たにも關らず、たうとうあの男の子にバツタリ出會つたのです。二度目です。學校の歸り途で、しかも、一番悪い時だつたのです。妻はそれを見てスツカリびつくりしました。

あの男の子が、店の人の居らない留守に、店頭にあつたお菓子の袋を盗んで、直ぐに向ふの方に駈けていつて、最初の辻を曲がつてしまつたのです。妻はそれを見てすつかりびつくりしました。

幸ひ附近には人もをりませんでしたし、其店を覗いて見ましたが、未だ店の人も居りません様子でしたので、何故かしらチョット安心しました。

しかし妻は、あの男の子が駈けて行つた此通りを歩いて行くのが何だか恐はくありました。でも外に道がありませんので、仕方なく急ぎ足で通りました。そして、男の子が曲つた辻をヒョツと見ました。するとどうでせう。その曲つた辻から未だ何處にも行かず、其處の壁にコーモリのやうに吸ひ付いて居ま

した。

男の子はこつちを見ました。そしてニタニタと笑ふのです。妻は又ビツクリさせられたのです。男の子は今盗んで來たお菓子の袋を開けようとして居ました。

妻の心は、ヒョツとこの男の子の悪い行ひを改めさせようと云ふ氣が湧きました。そして、さう思ふと直ぐ、ポケットからお母さんから貰つて居たわづかのお金でしたが、握み出して男の子の眼の前に差し出しました。男の子は妻の手を見て一歩近づいて來ました。

『これ上げるから、それ盗んだ店に歸しておいでなさい。』

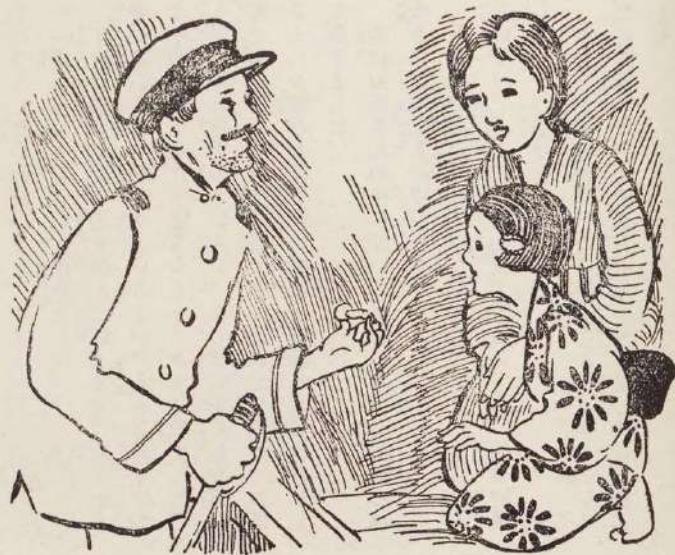
妻はやつとかう言ひました。

『これ呉れるの。』

男の子は妻の手からお金を握み取りました。

『その代り、それを早く返しておいでなさい。』

九五



『未だ年も行かないのだから、多分直き許される事
でせう。それからどつか確かな家に貰つてもらつ
て、眞面目な道につかせてやりたいと思つて居るの
です。』
さういつておぢさんは、同情深い氣色をして見せ
ました。
それから二三日経つて、又髯のおぢさんがやつて
参りまして、何かの話の絡から、あの男の子の事
について話されました。そして今では、煙突掃除夫
の親切な人に雇はれて、眞面目に働いて居ると言ひ
足されました。
妻は、煙突掃除人になつた、眞黒いあの男の子の
姿を想像して見ました。
そして、眞面目に働いて居ると聞いて、自分のし
た甲斐もあつた事と、喜びました。今ではスツカリ
悪い子だとは思へませんでした。わざ／＼貰つたお
金を取つたのだと言つて、返して來たりする心がか

妻は又さう言ひました。
男の子はお金を取つたまゝ、盗んだ店の方に行か
ず、反對の方に行かうとしました。
『盗んだりしてはいけませんわ。』妻は又かう呼び
ました。
『いやだ。』男の子はかう言つて、たうとう反對の
方に走つて行つてしまひました。
妻はチョット口惜しくなつて、其方を見つめて居
ました。自分がなさけなくなつて、あの男の子にか
らはれて居るやうに思へました。
しかし、あくる日妻は、スツカリこの事を忘れた
やうでした。夜、妻が學校から歸つて、お母さん達
と夕飯を食べてゐますと、いつも妻の家によくやつ
て來る髯のおぢさんが参りました。サーベルをガチ
ヤガチャ言はせて――。
髯のおぢさんは逡巡をして居るのです。その髯の
おぢさんが、ニコニコと這入つて來られて、直ぐに

九六
妻の方を見ると、ポケットからお金を出して、机の
上に置かれました。
それは、妻が昨宵あの悪い男の子にやつたお金と
同なだけでした。
髯のおぢさんは、そのお金に就いて、説明をされ
ました。
今日あの男の子が、他の店頭で盗みをしやうとし
て居る所を見つけたのです。そして其時持つて
居たお金をどうしたのだと問はれて、これは昨日こ
ゝのお嬢さんのを取つて來たと白狀したのださうで
す。で、只今持つて參つた故なんですと。
妻は不思議に思ひました。その金はやつた覺えは
ありますが取られたのではなかつたからです。妻は
それを言はうと思ひました。が、それより男の子の
事が氣がかりなので尋ねました。
『あの子はどうなるのでせうか。』
髯のおぢさんは、

あいさうに思はれたのです。

一度あつても見たいと思ひました。

丁度日曜でした。表で遊んで居ますと、向ふから背の高い人と、背の小さい人とが、大きな輪を持ってやつて来ました。どちらもマツクロな顔でした。しかし妾は背の小さい人が、あの男の子である事を直ぐ知りました。妾は家の中に駆けて行つて、お母さんにお願ひして、家の煙突も掃除して貰ふ様にしてくれました。

妾はお母さんの後に随つて出ました。お母さんは大きな聲で二人を呼びました。

そこで妾は、あの男の子と二度目に會つたのです。男の子はチラと妾の方を見て、わからない程お辭儀したやうに思ひました。

妾は、男の子がチョツと隙になつて、背の高い人だけが働いて居る時を見計らつて、話しかけて見ました。



「あんた。何故お金をもらつたのに、取つたと言つたんです。」

「いらないやつたからです。」

「では初め時は要つたのですか。」

「エ。初めは夕御飯が食べられないので要つたのです。でもあの時はお菓子で間にあはせたので、明日使はうと思つたのです。」

「だつたら、明日何故使はなかつたのです。」

「いらないやつたからです。」

「何故？」

「でも警察の御厄介になつたので、飯の心配なんかいらなくなつたのです。チャンと警察の方が食べさせて來れますので、いらない金は返したらいいと思つて。」

その時、背の高い人がやつて來て、男の子を促しました。男の子は又マツクロになりながら働き続けました。

そしてたうとう、掃除もすんだので、歸ることになりました。妾は、そつと別に男の子の手にお金を渡さうとしました。

「あれは、ほんとにあんたにあげたのですから。」

しかし男の子は、軽く手を振つて囁きました。

「もうたべる心配も無くなつたのですから、それには及びません。」

背の高い人と背の小さい人とが、又大きな輪を持つて、漸く暗くならうとする街を去つて行くのでした。男の子は一度こつちを振向きしました。

妾はデツと立つて見送つて居ました。あの男の子の幸福を祈らずには居られませんでした。

今更ながら、あの男の子はそんなに悪い子ではなかつたのだと言ふ事がハッキリしました。

明日からは、何も心配せず、學校に快よく行けるのを喜びました。

(をはり)



大石主税

羽島古山堂

100

【前回の梗概】元禄十四年三月十四日、浅野内膳頭は江戸の芝、要石下、田村右太夫の邸で切腹をさせられました。十八日の深夜中頃、二挺の早駕籠が、大石内蔵助のところへ江戸表の恐ろしい「知らせ」を持ッて来ました。つゞいて十九日の晩方、内膳頭は切腹家は断絶の「知らせ」がありました。お城は、お上に召上げられて了ひました。家中の重立ッた者も、多くは、屋敷を空にして赤穂を立てて行きました。内蔵助は、主税の知らないうちに、「復讐」の「同盟」を作りました。そして、家族一同浪人になッて、京洛の「山科」に移りました。内蔵助は、放浪を始めました。妻は離別して、但馬豊岡の實家へ歸しました。主税だけは、父の許に残ッてゐました。

それから間もなく、内蔵助は、主税に、その本心を打明けました。さうして、主税は、始めて「復讐」の「同盟」の連判狀に其の名を加へることをゆるされました。

八、母の故郷から江戸へ

それから間もなく、大學頭は、本家の浅野安藝守の家へ「お預け」になッて、安藝の廣島へ遣られしました。それで、内匠頭の「お家再興」は、まッたく

絶望になッて了ひました。

「今は、愚圖／＼してゐることはない。一日も疾く上野介の首を擧げよう。」

と「盟約」に加はッた面々は、躍起となッて騒出しました。堀部安兵衛などは、はる／＼、江戸から上ッて來て、京都、伏見、大阪の間にゐる、同盟の人々を説廻ッて、「はやく、やッつけて了ひましよう」と、云ッて、猛烈に運動しました。さうして、それに火を放けられて、七月の廿八日、京都圓山の重阿彌といふ料理屋で、同盟の人々の、大會議が開かれました。

集まッた者は、内蔵助を始め、拾九人——そのうち、岡本次郎左衛門だけを除いて、後は、いづれも後ちに「四十七士」の列に入ッた人ばかりでした。

主税も、新に「同盟」に加はッた一人として、また「一人前の士」として、その席に出ました。主税は、敵を討つといふ「悦」と、大人になッたといふ

101

「満足」とに、心も、はれ／＼しく、その顔は、いき／＼と輝いてゐました。さうして、人々の「意氣込み」と、「至誠」とに、「あッ」と、感心してしまひました。

その日は、殊に、皆な、こうふんして、慷慨淋漓といふ有様でした。

間瀬久太夫は、その年、六十二歳の老人でした。「わたし等は、もう先きの知れた命です。いつまでぐ／＼しては居られませんか。たとへ、この白髪首を、敵の手に取られても、一日も疾く、上野介の館へ斬込みたいと思ひます。江戸の堀部彌兵衛からもさう云つて來ました。」

と、思ふまゝを、テキパキといふ——この久太夫と、小野寺十内とは従弟でした。

「久太夫、よく云はれた。十内も、御一緒に討入るぞ。」

と、沈着な十内も、勇氣りん／＼——心が火のや



うに、熱してゐました。

「ア、どなたも壯ンだな」と、思つて、主税は、ツク／＼と感心しました。そして、「今夜にも斬込めるぞ」と、腕の鳴るのを覚えるやうに、固くなつてゐました。

「大石殿が、まだ——「時機」が早いといふお考でございましたら、止むを得ません。われ／＼、十人ほどの者がお別れして、すぐに吉良の館に斬込みましょう。人は、ともあれ、安兵衛は、もう、のんべん、だらりとして居られません。」

と、安兵衛は、相變らず、こうふんして、ツケ／＼云ひました。

「もちろん、今は、一日も、ぐ／＼して居れません。内藏助の心も決して居ります。」

と、内藏助は、かんたんに、キツパリと云ひました。

「ア、大石殿も……」

と、安兵衛は、うんと、ぶつかつて行くところをひよいとすかされたやうに、拍子抜けがしました。そして、マジ／＼と、内藏助の顔を見ました。

内藏助は、靜に、重々しく「大學頭様が、廣島にお預けになつては、もう、憚るところはありません。わたくしは、九月末までに、こちらの用事を済まして、十月の初に、江戸に下ります。おの／＼は、一と足、先きにお發ちなさい。」

と、云つて、それで、いよ／＼「上野介をやつつけよう」と、いふ相談も、きまつて了ひました。議論、ふんぶんとして、沸返るかと思はれた重阿彌の會議も、さうして、穩に終りました。

九月、半になりました。片岡源五右衛門、磯貝十郎左衛門、堀部安兵衛、奥田孫太夫等は「はやく、江戸へお下りなさい」と、云つて、滅多、やたらに

内蔵助が、江戸に下るやうに催促して來ました。
『こちらには、まだ、いろいろ、用事が残つてゐるのに、困つたものだ。』

と、内蔵助は、眉を蹙めて、さすがに當惑してゐました。

主税は、その頃、もう、すべての事情が、スツカリ、解つてゐました。で、ある時、内蔵助の前に出て、『お父上、お願がございます。』

と、變に改まつて、申しました。十五にしては、大人びた其の樣子に、『何か、一と思案』あるやうに思はれました。

『何んぢや。』

と、内蔵助は、氣輕に云ひました。

『江戸の方々から、また、御催促が參りましたな。』

『ム、。』

『一圖に討入を思ひつめてゐる方々です、無理もないことと思ひます。それに、江戸と、こちらと、百



三十里も離れてゐましては、何にかにつけ、行違があつて、お疑も起りましょう。わたくしが、江戸へ下つたら、どうでしょう……むろん、どなたか、しツかりした方を、二三人、添へて戴くのでございすが……』

『そちが、先に江戸に下るといふのか。』

『はい、さうしたら、江戸の方々も、いくらか、安心して、落ちつかれはしないでしょうか。さうしてお父上は、ゆる／＼、こちらの御用を済ましてからお下りになれば可いではございませんか。』

『ム、……』と、内蔵助は、さも、満足したやうににツこりして、『それは、可い。そちが江戸に下れば、當分、安心ぢや。』

と、一も二もなく、主税の「考」に賛成しました。さうして、すぐに、原惣右衛門や小野寺十内、潮田又之丞など呼びあつめて、その事を相談しました。『それは、好いお考です。早速、さうなさるが宜し

い。』

と、三人も、大賛成でした。

主税は、父よりも先に、江戸に行くことに決定されました。

『江戸へ参ります前に、豊岡へ参つて、母上にお暇乞をして参りたうございます。』

と、主税は、母に、この世の別れを告げて來ようと、内蔵助に、その「お許し」を願ひました。

『それは心任にせい。』

と、内蔵助は、離縁をした妻のところへ行くのをハッキリと、『よろしい』とは、云ひませんでした。しかし『心任にせい』と、いふ、あいまいな言葉のうちに『無理もない。行くが可い』と、いふ「ゆるし」の情が溢れてゐました。

主税は、悦んで、但馬の豊岡へ出發しました。豊岡へは、京都から、姫路の方を廻つて行くと、ざつと、六十里ほどありました。まづ、六日位の旅路で

した。

母がある、弟がある、妹がある——主税の心は、豊岡に向つて急ぎました。程なく、豊岡に着きました。そして、母方のお祖父さん、石東源五兵衛の玄關で、旅の草鞋をぬぎました。

『よく、たづねて来ました。』

と、主税の母は、悦んで、主税を迎へました。弟の吉千代も、妹も、いそ／＼、玄關へ駆出して来ました。主税は、母や兄弟に、久しぶりで、にこ／＼した顔を見せました。

『はる／＼、訪ねて来たには、何か深い仔細があらう。』

と、主税の母は、はやくも、それと察しました。

しかし、口に出しては、何も、たづねませんでした。

『わたくしは、近いうちに、江戸へ行くことになりました。あちらへ参りましては、なか／＼、お目にかゝることが出来ません。それで、お暇乞に参りま

した。』

と、主税は、かんたんに、さう云ひました。そして、何故、江戸に下るかといふことは、一切、説明しませんでした。

主税の母は、また一言、それを聞かうとしませんでした。聞かなくとも、「江戸へ行く」主税の目的も、内藏助の考も、たいがい、解つてゐたからでした。

『成程、江戸へ行つては、もう、逢へないかも知れません……、かうして逢へば、お互に思殘すこともありません。江戸へ行つたら、母や、兄弟のことは忘れてお了ひなさい。未練な心を出しては、眞の武士にはなれませんぞ。』

と、母は、やさしい言葉で、雄々しく、主税を勵ました。

『はい、はい。』

と、主税は、母の言葉を、骨に彫りつけて置く

ます。』

いふやうに、しつかり、しつかり、こたへました。お互に、打明けて、何んにも云ひませんでした。が、心と心が、ピッタリ、合つて、お互に、千萬無量の思でした。主税も、つい、涙を落しました。母の眼にも、涙が湧きました。

しばらくすると、お祖父さんの石東源五兵衛も、お城から下がつて来ました。

『松之丞か。大きくなつたな……ア、元服したか。』

と、にこ／＼しながら、なつかしい言葉をかけ

ました。

『松之丞は、この度、江戸へ参るのださうでござります。それで、お暇乞に……』

と、母は、その、けなげさを祖父に、ふいちようするやうに云ひました。

『ナニ、江戸に行く……そち、一人でか。』

『いえ、お父上も、後からお下りになるのでござい

源五兵衛は、さう云つて、一人で、ホク／＼してゐました。そして、これも、その他に、何んとも云ひませんでした。

主税は、三日ほど、そこに足を休めて、思ふさま、慈母の愛に、ひたりました。そして『もう、この世に思殘すことはない』と、勇ましく、別れを告げて、源五兵衛方を發ちました。

「ア、あたたら、蕾の花を散らす……」

源五兵衛は、玄關まで見送りに出て、ホロリと、涙を落しました。しかし、口へ出しては、何んとも云ひませんでした。母も、涙を一杯、眼にためて、主税の大きな後姿が、門の外に見えなくなるまで見送つてゐました。

主税は、山科へ歸りました。二三日すると、内藏助は、主税をつれて、男山八幡宮に参詣して、武運を祈りました。さうして、九月の十九日に、主税は先發隊として、間瀬久太夫、大石瀬左衛門、茅野和助、小野寺幸右衛門等と一緒に、江戸に下りました。逢坂山を越えると、近江の天津、琵琶湖には、もう、初冬に近い冷たい風が吹いてゐました。大津から矢走へ、湖水を船で渡つて、それから草津へ廿五丁、遠くに比良山を見返へりながら、路は、いよいよ、東海道に入りました。草津から石部へ二里半、その次が水口の城下、水口から土山へ、近い三里。

一〇八

さうして、鈴鹿山を越えると、そこはもう、伊勢でした。關、龜山、庄野、四日市、桑名。桑名から船で、七里の海を渡ると、もう、尾張の宮でした。宮から池鯉鮒、そこから、四里ほど行くと、有名な百六十間の矢矧橋、橋を渡ると、そこはもう、三河の岡崎でした。岡崎から、藤川、赤坂、御油、吉田（今の豊橋）二川、新井の關所。その關所は、もう遠江でした。新井から船で渡つて、舞坂、濱松、掛川から金谷を越すと、東海名代の大井川。それを渡ると、駿河の島田。島田から、藤枝、岡部、駒子と、七里半行きますと、その頃の府中、今の静岡でした。それから、江尻、興津、由井、蒲原。蒲原を出ると、すぐに富士川、三國一の名山、千古の雪を戴く富士山は、その邊から、しばらく、主税等の眼を離れませんでした。さうして、主税は、だん／＼と、五十里を下つて、十月の四日に、江戸に着いて、一と先づ、吉田忠左衛門のところに落ちつきました。主

税は、假に、垣見左内と、名を變えました。

主税が、江戸に近づいた頃、原惣右衛門はその弟岡島八十右衛門と、貝賀彌左衛門、間喜兵衛等と、四人一緒に、京都を發つて、東海道を下りました。そして、十月の十七日に、江戸に着きました。

つゞいて、小野寺十内、これは、二日おくれで、惣右衛門等の後を追つて、江戸に下りました。

最後に内藏助。これは、十月の七日に山科を發つて、いよいよ、江戸に下りました。潮田又之丞、近松勘六、菅谷半之丞、早水藤左衛門、三村次郎左衛門——菅谷半之丞の四十四歳を年頭に、いづれも血氣盛な面々が、一緒でした。さうして、京都にゐた「同盟」の人々は、残らず江戸に下つて了ひました。

内藏助は、十月の二十二日に鎌倉に着きました。先きについた十内から其れと聞いた吉田忠左衛門は

鎌倉まで迎に出て、内藏助と一緒に、三日ほど、そこに逗留しました。潮田又之丞等、五人の人々も、逗留して、鶴岡八幡に参詣をしたりして、ブラ／＼してゐました。その間、内藏助と忠左衛門とは、額を突き合はせては、討入の準備や、討入の謀について、いろいろ相談をしてゐました。さうして、内藏助は二十六日に、川崎在の平間村、輕部五兵衛といふ、百姓家に入りました。

忠左衛門は、江戸に歸りました。内藏助が江戸に來たと聞くと、同盟の人々は、俄に活氣づきました。堀部安兵衛などは、火が、くわ／＼と燃上ぐるやうな勢で、平間村へ駆けつけて來ました。大高源吾も來ました、神崎與五郎も來ました。

『今年のうちに、上野介の首が取られるだらう。』と、皆なは、さう云つて悦んでゐました。そして皆な「意氣天を衝く」と、いふやうな勢でした。

一〇九

主税は、十一月の三日に、忠左衛門の家から、日本橋石町三丁目、小山屋彌兵衛方の裏店に移りました。内蔵助は、二日の後、平間村から、そこに移りました。主税は、やはり、垣見左内と云って、内蔵助は、その伯父、垣見五郎兵衛と云ってゐました。さうして、後の四十餘人の人々も、十人のうち九人まで、それ／＼に名前を變えてゐました。

『討入は、いつにします。』

さういふ問題が、だん／＼、やかましくなつて來ました。内蔵助は、初め、十二月十九日――節分の夜にしようかと云つて、内々、さう定めて居りました。しかし、上野介が、本所の邸の方にあるか、芝三光坂の上杉の下屋敷の方にあるか、ナカ／＼、それが解りませんでした。さうして、まづ、それを確に突とめてかゝらなければ、討入を斷行することが出来ませんでした。しかも、それが、非常に困難な仕事でした。



『ぐづ／＼してゐると、赤穂浪人が江戸に入込むだといふ噂が立ちます。すると、上野介の方でも、一倍、用心をするのは、もちろん、お上でも、御詮儀があるかも知れません。』

内蔵助を初め、一同に取つては、これが、何よりの心配でした。それに、同盟の人々のうちに、一人として、上野介の顔を見知つてゐる者がありませんでした。

『敵を討つ者が、相手の顔をしらんでは都合が悪い』同盟の人々は、まづ、上野介の邸にある日を突止めようとして、一生懸命になりました。また、上野介の顔を見知らうとして、さまざまに、手をつくしました。さうして、めい／＼が、夜と晝、かはるがはる、吉良の邸と上杉の邸との間の道筋をウロ／＼して、その目的を遂げようと、骨を折りました。

主税も、スツカリ、姿を變えて、その仲間に加はりました。空風の吹廻る夜などは、江戸名物の砂ッ

埃を喰つて、口のなかをジャリ／＼させながら、街を、あつちへ行つたり、こつちへ行つたりしてゐました。さうして、皆なが然うでした。けれども、ナカ／＼、上野介の「行列」にでつくわしませんでした。骨折が、いつも無駄でした。

そのうちに、毛利小平太だとか、中田理平次だとか、小山田庄左衛門だとか、田中貞四郎だとか、中村清右衛門だとか――いよ／＼といふ間際まで残つてゐた者のうちにも、どこへか姿を隠して、同盟を脱ける者が出来て來ました。さうして、同盟の人が、四十七人になつて了ひました。

人々は、幾度か失望しては、幾度か奮起しました。そして十二月の十日になつて、大高源吾が、やつと上野介が、たしかに邸にある日を突止めて來ました。さうして討入の日が、十二月十四日と決定しました――むろん、その前から、いつでも討入の出来るやうに、一切の準備が出来てゐたのです。(つづく)



童謡

野口雨情選

(子供篇)

蛙(賞)

朝鮮 河野 青雨

田んぼで

田んぼで
なく蛙

なきやめ

なきやめ

月が出た

夕方(賞)

群馬 關塚

(保三
尋四)

にしの方から

日がさした

おらちのすぎに

日がさした

東のやまには

日がさくね

雨あがり(賞)

神奈川 飛田

(高弘)

静かな雨あがり
梅の木の下に

大きな水たまりが出来た

青い雨蛙が

ボチャン／＼

雲

京城 柳原

(八重
尋六)

あのくも

動いてどこへ行く

どこへ行く

お山の上へ

海の上へ

さくら

群馬 關澤源之丞

(尋五)

山のさくらは

ちつたかな
里のさくらは

ひら／＼ちつてる

お月様

東京 澁谷

(正治
尋六)

雨がふるのか

お月様

傘の用意を
して出てる

春の風

埼玉 關口

(竹子
尋三)

風吹く／＼

野原では

たんぼは

小ちやうちん

ゆら／＼

ゆれる

冬の道

不明 前田

(義照
高二)

風が吹く度

木の葉がさり

私が歩けば

又がさり

がさり／＼の

日暮道

一人ぼつちで

行きました

お星様

水戸 稻木 實郎

お星様

夕べの空の

お星様

銀の様な

お星様

秋のお空の

銀の砂

田圃のあぜ道

青森 山本 一郎

田圃のあぜ道

通つたら

蛙がたばんと

音立てて

田圃の中へ

にげました

あれにげました

水車

長野 館石

(唯雄
尋五)

のなかの道をとほつたら
水車の音が



又の道

とつちん／＼
とつちん／＼

とつちん／＼

朝

東京 大木 正美

朝起きて

戸をあけたら

もやがいつばいだ

お背戸の森もかすんで、

もやが静かに流れてた

天気

兵庫 山内

(里代
尋五)

天気になつたら

うれしいな

體をふつて

遊びます



二勇士の失敗

沖野岩三郎

水島 嗣保 布 壺

東の麓から峠まで一里、峠から西の麓まで一里、合せて二里ありますので、この峠を二里峠と申しま

夏の或日のことでした。一人の旅人が色を變へて西の麓へ駆け降りて來ました。茶屋のばあさんが、驚いてわけをきくと、旅人は途中で大きな熊を見たと言いました。

二里峠に熊が出るといふ噂が、村から村に傳はりました。二年前までは、東村から西村へ行くには、是非この峠を越さなければなりませんでしたが、二年前の冬、輕便鐵道が山の裾を通るやうになつて以來、たつた七錢の汽車賃で東村と西村との交通がで

は、二尺より登つては一尺にり、三尺より登つては二尺にるといふ有様でしたが、段々と修行がつむと丁度猿のやうに、する／＼と一の枝まで、よち登る事が出来るやうになりました。

さるやうになつたので、もう一日に多くて十四五人しか、この峠を越す人が無くなつてゐた上に、熊が出るといふ物騒な噂が傳はつたもんですから、それ以來、ばつたり人通りが無くなつてしまひました。ですから、東の麓の茶屋のばあさんも、西の麓の茶屋のばあさんも、毎日あくびばかりしてゐました。

一の枝まで登ると、佐藏さんは手早く腰の麻繩を解いて、その端を一の枝に縛りつけます。そして鐵槌を右の手にもつて、俯むいて、こつ／＼と松の幹をたゞきます。それから、枝に縛りつけた麻繩につかまつて、蜘蛛のやうに、上手に庭へ降りて來ます。庭に降り立つた佐藏さんは、いつも、きまつたやうに、『もう、これで大丈夫だ。』と申しま

ところが、その噂が傳はつて以來、東村の佐藏といふ男は妙な事を始めました。佐藏さんは毎日、ふとい麻繩を腰に巻きつけて、庭の松の下に這ひ上ります。帯には一挺の鐵槌をさしてゐます。

二 西村の多藏といふ男は、毎日仕事もなんにもしないで、一間ばかりの檜の棒と、牧草籠をもつて裏庭に出て行きます。

四五間こちらから、ばた／＼と駆けて行つて、松の木に抱きついて、大急ぎでよち登ります。最初

先づ籠を庭の真中に轉がして置いて、四五間こちらから、其の籠の方へ、檜の棒を斜に構へて、『エイ



「ッ！」と聲をかけます。そして、武士が槍をつかふやうに、た、た、たッと籠の方へ進んで行きます。籠から一間ばかり隔たつた所まで来ますと、また、「エイッ！」とかけ聲をして、棒を籠の中に突き入れます。空ッぱの籠は、お腹を棒で突かれても、平氣でゐます。三日、五日、十日と、多藏さんはその稽古ばかりしてゐましたが「うん、もう、これで大丈夫だ！」とひとりごと言つてゐました。

三

二里峠の頂には小さいお宮があります。そのお祭りは七月の十五日です。

東の麓の茶屋のばアさんも、西の麓の茶屋のばアさんも、どうかして、其のお祭りまでには、峠の熊を退治してほしいものだと思つてゐました。なぜならば、そのお祭りの日には、東村からも、西村からも大勢の人々がお宮に詣るので、二軒の茶屋が大へん繁昌するからです。ところが七月十日の朝でした。



腰に麻縄を巻いて手に鐵槌を一挺持った佐藏さんが、東の麓の茶屋の前を通りかかりましたので、「もし〜佐藏さん、どこへ行らつしやいます？」と、ばアさんはたづねました。

「僕はこれから峠の方へ熊を退治に行きます。」
「まア、熊を退治で下さる。それは、ありがたうございます。では、お茶でもわかしとお待ちいたしてゐますから、どうぞ取にがさないやうに、お願いいたします。」と、ばアさんは頭を下げて頼みました。
「ばアさん、安心して待つてゐて下さい。きツと生捕りにして、引ッばつて来ますから……」
佐藏さんは、鐵槌を打ふりながら、坂をどん／＼と元氣よく登つて行きました。

四

ちやうど其日の同じ時刻でした。一間ばかりの檜の棒を肩げた多藏さんが、西の麓の茶屋の前を通りかかりました。それを見た茶屋のばアさんは、「もし〜、多藏さん、どこへ行らつしやいます？」とたづねました。すると多藏さんは、いばつて、「拙者か、拙者は、これより二里峠へ猛獸退治にまかり出づるところだ！」と申しました。

ばアさんは今少しで入歯を吹きとばさうとする程をかしかつたけれども、ちツと笑ひをこらへて、

『さうですか、それはどうもありがたうございます。もう、お祭りも近づいてまゐりましたので、是非猛獸とやらを、お退治下さいまし。お願いいたします。』と云つて、ていねいに頭を下げました。

『いや、老婆、心配いたすな。拙者寶藏院流の槍術をもつて、見事に退治つかはす。』と云つて多藏さんは、ばアさんの前で檜の棒を斜に構へてエイツ！エイツ！と掛聲をして、熊を突くまねをしてみせました。

ばアさんは、その恰好を見て、すつかり感心してしまひました。で、今度は本當に心から、

『お退治になりましたなら、すぐお歸り遊ばせ、お茶でもいれて、おまちいたしますから。』と申しました。すると、多藏さんは、

『いや、諸人難儀致すによつて、拙者義侠のために

いたすのぢや、その儀には及ばぬ。』と云つて、勢よく坂を登つて行きました。

五

東の麓から登つて来た佐藏さんは、注意に注意して路の兩側に生えてゐる松の樹を眺めながら、熊が出て来たならば、あの木によち登らう、この木に這ひ上らうと、考へて行きましたが、峠から二十間下まで来しても、熊はさておき兎一疋にも出あひませんでした。どうして、熊は出ないんだらう。多分僕を恐れて岩の穴にでも隠れてゐるんだらう。』と思つてゐると、どこかで足音が聞えます。

『来た／＼、いよ／＼熊だ！ さうだ。あの松の木が／＼。』佐藏さんは、逃げ上る松の木を見定めて、手にもつてゐた鐵槌を帯にさし込みました。

西の麓から登つて来た多藏さんは、注意を拂ひつつ路の兩側を見ました。もし熊が出て来たなら、どの邊で檜の棒の槍術を使はうかといふことにはばかり

氣を取られながら歩いてゐるうちに、たうとう、峠から十間ばかり下まで上つて来ました。しかし、熊は出て来ません。』どうして熊は出ないんだらう。多分拙者の槍術を恐れて、岩の穴にでも隠れてゐるんだらう。』と思つてゐると、どこかで足音が聞えます。

『来た／＼、いよ／＼熊だ！ さうだ、ここが／＼。こゝであつたら、槍が使ひやすい。』多藏さんは檜の棒を取直して、一心に峠の方を見てゐます。

六

多藏さんが、用心しいしい一歩一歩峠の方へ進んで行きますと、向ふの松の木の一の枝に、真黒いものが見えました。

『しまった。熊は木の上に登つてゐる。拙者は木の上に登つてゐる熊の退治法を研究いたし居らぬ！』と云ひながら、多藏さんは、心を落つけてみようと熊だと思つたのは、東村の佐藏さんでした。

佐藏さんは、熊が木の下へ来るのを、今か今かと

待つてゐますうちに、足音が近寄つて来ましたのでひよいと峠の方を見ますと、そこには多藏さんが長い檜の棒をもつて立つてゐます。

『やあ、多藏さん、どこへ行らッしやる？』

佐藏さんは枝の上から問ひました。

『拙者は猛獸退治に出掛てござる。して、貴殿は？』

多藏さんは、えらさうに申しました。

『僕かい、僕は熊退治に来たんだが、熊が出ないで困つてゐるところだ。』

佐藏さんは麻縄をぶら／＼させ乍ら申しました。

『貴殿はいかゞして熊を退治する御所存でござる？』

多藏さんは、しきりに武士ことばをつかひます。

『多藏さん、あんたは一體どうして猛獸を退治するつもりです？』

『拙者は寶藏院流の槍術をもつて、開けたる猛獸の口を一つきに突き申す。』

『口を開けなかつたら、どうします？』

「猛獸は人を咬むによつて必ず口を開けるに相違ござらぬ。」

「假りに口を開けるとして、口の中へ其の檻の棒を突き込み得たと假定する。ところが猛獸なかゝ死



ないネ。それからどうなさる？」

「其時拙者は、猛獸を川魚よろしく串刺にして高く差上げて、村へ持ち歸る所存でござる。」

「猫や鼠ちやあるまいし、棒の尖に突刺して高く差上げるなんて、とても出来ませんよ。多藏さん！」

「いや、拙者は日本無双の強力でござる。」

「では、其所の石の地藏様を、其の棒のさきに結びつけて、それを差上げてごらん。」

「さて、石地藏の七つや十は何でもござらぬ。」

多藏さんは自分の帯をといて、檻の棒の先に石地藏を縛りつけました。そして、枝の上から佐藏さんの掛けた一、二、三の號令で、それを差上げようとしたが、どうして、どうして、地藏様は地から一寸だつて離れません。

「駄目々々、多藏さん。日本無双が知れないが、その腕前ぢやあ、猛獸退治も聞いてあされるネ。一體あんたは、猛獸を其の棒の尖に突刺して高く捧げる

佐藏さんは枝の上で腹を抱えて笑ひましたので、今少しのことで枝から落ちるところでした。

多藏さんは忌々しかつたが、どうすることも出来ません。そこで、佐藏さんにむかつてゝました。

「貴殿は如何して熊退治をなさる？」

「僕は熊の性質を研究してゐるんだ。熊はネ、猫や猿のやうに身輕に木登りをしないんだよ。熊が木登りをする時はネ、先づ右の手の爪を、木の幹にガツシリ打ち込む。そしてその次に左の手の爪をガツシリ幹に打込む。そして、其の次には、右の手の爪を、靜に幹から引き抜くんだ。抜いた時其の爪を一度調べるネ、大事の爪だから。それから、その爪を打込んで、今度は左の手の爪を幹から引抜いて、又た調べるんだ。さうして爪を大事にしたい、ゆつくり登るんだ。」

「成程、して、其の熊を如何してお捕へめさる？」

「そこでだ。僕はこゝに鐵槌をもつてゐる。こゝに



なんて、そんな稽古をしたんですか。」

「やりましたとも、牧草籠をこの棒のさきに突さして、凡そ三百回差上げたのでござる。」

「籠を？ あんたの空ッぽの牧草籠を？」

斯うして待つてゐて、熊が丁度この下まで登つて来た時、其の幹に打ち込んだ爪を、コン、コン、コンと鐵槌でたゞき込むんだ。手早くネ、兩方の爪をさ。すると熊は、つまり此の樹の幹に釘づけにされたも同様だらう？」

「いかにも名案でござる。しかし、貴殿はどこから降りてござる？」

「頭の上を踏越えるわけにもいかないから、こゝにちやあんと麻縄を用意してゐるから、これに縋つてする／＼とそこへ降りるつもりだ。」

「貴殿にも似合はぬ、一つの失念がござるわい。」

「何が失念だい？」

「もしも其の大熊が、身をものがうちに、爪が脱けまいとも限らぬ。」

「さうだ、そいつ困つたなあ。」と佐藏さんは考へてゐたが、「いゝ事がある。爪をたゞき込んで置いて、此の帯で、熊の頭を松の幹にくる／＼と縛りつけ

てやらう！」

「さて／＼名案でござる！」多藏さんは手を拍つて賞めました。そこで佐藏さんは、

「では一つ稽古をしてみませう。多藏さん熊になつて、こゝまで登つて来てごらん。」

「それも一段と興味のあること。然らば拙者假りに身を禽獸となし、熊のまねを致すでござらう。」

多藏さんは松の幹にしがみついて、一尺、二尺、五尺と登つて行きました。そして一の枝の下まで来た時、佐藏さんは、

「おつとそこで待つんだ。鐵槌でこんなにこん／＼と打込むんです。そちらの爪も、こんなにこん／＼……」と云ひながら、鐵槌で爪を打こむまねをしました。それから、帯をといて、多藏さんの首の所を松の幹へ、くる／＼と捲きつけて縛りました。

「痛いござる、痛いござる。」と多藏さんは叫びました。身を動かすたびに日にやけて眞黒い左の頬が、

がさ／＼した松の幹でこすられて、いたくてたまらないんです。

「二三分間の辛抱だ、まつてくれ給へ、僕はこの縄を傳つて、下へ降りるから。」

佐藏さんは、その縄にすがつて、ぶらりとぶらさがりました。ところが佐藏さんが、其の麻縄にすがると同時に、ぶりつといふ小さい音がしました。何だらうと思ふまに、縄はぶつくりきれて、高い／＼枝の上から、ずどうんと路の上に墜落しました。下には多藏さんが、樫の木に縛りつけたまゝの石地藏があつたので、佐藏さんは其の石地藏で、したゝか腰のあたりを打ちました。そして、うん！と云つたまゝ氣絶してしまひました。

それを見た多藏さん、びつくりして、松の木から飛び降りようとしたが、頭をすつかり幹に縛りつけられてゐるので、どうすることも出来ません。「拙者頗る困難いたす、百姓共助けにまわれ……」

多藏さんは、そんな事を云つてゐましたが、誰も助けに來ません。たうとう、苦しくて、苦しくてたまらないから、武士言葉をして、

「おうい、助けてくんねえか、おれ、死ぬだあ……」と、どなり始めました。

七

東の麓の茶屋のばアさんも、西の麓の茶屋のばアさんも、佐藏さんと多藏さんとの、歸りがあまり遅いので心配はしました。そして村の人たちに相談しますと、それは多分熊に咬み殺されたのだらうと云つて、多勢の人たちは、鐵砲や槍や長刀をもつて、わつしよ、わつしよと麓から登つて來ました。東村の人たちも、西村の人たちも、峠まで來た時ほんたうに驚いてしまひました。

石の地藏さんが樫の棒に縛りつけてあつたり、佐藏さんが、その傍で氣絶してゐたり、多藏さんが高い／＼松の樹の幹に縛られてゐたり……(をばり)

水泳

三木露風

川の浅瀬で泳いでゐれば
 お馬ちやぶちやぶはいります
 馬は親馬、二匹の仔馬
 尻尾ふりふり涼しさう。
 橋の上には女の子供
 赤ん坊貰うてあそんでゐます
 路のかたはら茂つた蘆に

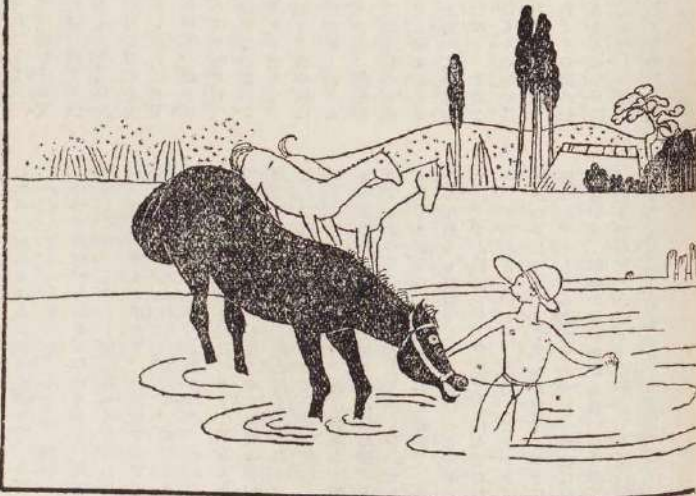
よしきりが鳴く高い聲。



水が出てくるあの山の方
 高い杉の木すくすく生へて
 蟬が鳴きますヂイヂイヂイ
 その下、村の爺歸る。

川に風吹き、ささなみ立てる
 「もう君、川から上つてかへろ」
 僕らは日にやけ背中が黒い
 着物を着ます、藪のかけ。

川上四郎登





方綴
選郎次佐藤齋

しかられた(賞)

兵庫縣出石郡小野校尋五
山科四郎

もうとうにの事であつた。僕と康治(死んだ弟)とでハツカ入りの、先つきのとんがった白い菓子な、南側の道でとりやこした。僕がはつか入りの菓子をとつた。そして康治が泣きもつて、お父ちやんにつけに行つた。僕はちつと立つて、しがんねれへんか、と心配してゐたら、お父ちやんが「こりや四郎。わりや康治の菓子を取らあゝがな」と、言ひなるが早い、自轉車に乗つて、縄を持つて僕をしばりに來なつた。僕は一目散に勇ちやんげの方に走つ

て行つた。お父ちやんは、それでもまだ、自轉車に乗つて、縄を持つて、僕をばうて來るので、僕は又勇ちやんげの所から上地に行く道走つて、お宮さんの鳥居の所まで來た時、僕はえらくなつたのでそろそろ走つた。なんだあびゆう、とうなつて後の方からくるやうにあつたので、後をひいといと見るとお父ちやんがバリキをかけて僕をばうて來るので、僕は鳥居の影にかくれた。お父ちやんは自轉車からおりて、そつと、國幣中社と書いてある、石の所にそれを置いて、わき足で、僕のかくれてある所に近づきなつたので、そつと、顔をだして見たら、ニコ、笑つておんなつたので、やつと一安心した。すつと顔をかくすと、お父ちやんはつか、と走つて來なつた。僕はにげるまがなかつたので、そのままこゝに立つてゐたら、一口もものないはずぐつと僕の手を握らなつた。そして縄で僕の手を後手にく、んなつた。その折のお父ちやんの顔は、よそのおぢさんのやうに見えた。思はず大きな聲で「まあしやせんしきや、まあこりやておくれいなあ」と泣

いたら、お父ちやんは知らん振りで、まだぐい、とく、んなつた。そして、僕をひつばつて自轉車の所までつれて來て、自轉車をもつて、ぼつ、家に歸へりかけた。家の部屋の前まで來たら、お父ちやんが「ら、と、戸をあけたので、僕はまあしやにや(致し方ない)と思ふけど、づんづん先をかんがへると、ほつり、目からあつい涙がこぼれた。お父ちやんは僕を引つばつて、部屋のはしご段の所まで來たら、はしご段に僕をく、りつけて、いこかれんやうにしてしまひなつた。僕は涙をふく事さへ出來なかつた。お父ちやんは部屋から出てしまつて、戸をがら、びしやんとしめてしまひなつた。部屋の中は眞暗で、そこらを見ても眞暗でした。僕はしう事なしに、ざんね泣(むやみに泣く)にゐてゐたら、がたとと音がした。するとどうやら、部屋の戸にとぜん(かき)をかけるやうに思つた。そして康治であつた。康治は泣きながら、西側の月の所からはいつて來て「兄ちやん」といつて、つか、と僕の前

てくれ、やあ」といつた。康治は僕の役に來て、縄をほどきはじめた。男むすびにしてあるので、齒でかんでほどこき、齒でかんでほどこき、と、う、う、といてしまつた。菓子を取つた時にやりやあまかつた、つくづくかんがへて見るとなんだか、悲しくなつて來て涙がほろ、とつかたい(冷たい)土の上にこぼれた。さうすると、康治が泣きながら「兄ちやん泣くないやあ」といつた。僕は「ふん」とうなづいた。涙をさすつて手を見たら、縄でく、つた後が赤くなつてゐました。康治と一しよに部屋の前がわから、そうと出て、神床げの方に遊びに行つた。なんぼも(幾度も)面白い事をして遊んだけど、ちよつともおもしろくなかつた。よそから歸つて、戸の閉めてある部屋の戸をあけて暗いとき、いつでも死んだ康治のことを思ひます。

ゆめ(賞)

山梨縣北豆郡日野春校尋四

向井ふじゑ

私は今朝、お父さんと一しよに三時頃起

きて、御飯をたべて、又れた。お父さんは仕事に行つてしまつて、私一人になつた。私はねむつてしまつた。そして、ゆめを見た。

私がためへ水をくみに行つて歸つて來ると、姉さんが火をもしてゐた。こたつには誰かれて居て、私が姉さんに「こたつへれて居る人は誰でへ」と言ふと、姉さんが「おらがのお母さんだ」と言つたから「おらとには、お母さんなんかは見えじやんやあ。」と言ふと、姉さんが「東の叔父さんや、となりの叔父さんが「死んで居るけれども、こたつをうんと熱くして、其所へねがしておけば生きる」と言つて、おら家へ、かついで來てくれた。」と言つた。私は「そんな事をゆつて、おりようびつくりさせたがつたつて、おらあちつともびつくりなんかしんぞ。ほんとうの事を明かしてくりよう」と言つたら、姉さんが「ふんとうだぞ。うそだと思つたらば見てこ。」と、「お、」と、私はさう言つて、おつかなびつくり、こたつをのぞいて見たら、ちゃんとお母さんがれて居た。私は其の時の氣持は、頭か

ら水でもかけられたやうだつた。私は、又姉さんの所へ來て「ふんじやあ、姉やん、おれがうんとおきをこたつへ、えれつかなあ」と、言ふと「まだいいや」と言ひました。私はそれから少しなつてから「姉やん、おきを入れたかなあ」「お、今さうやつかと思つて居たことだ」と、言つた。私が三四じゆの(十飽)も入れて居ると、お母さんは、むく、動きだしました。私は早くじゆのを置いて見てみると、お母さんはおき上りました。私が姉さんに、

「お母さんが起きたぞ」と言ふと、姉さんはお勝手に居たのを、あはて、來て見て居ました。お母さんはだまつたまゝ、坐つて居りました。

私は大きい聲で「おんにやあ(おれにやあ)お母さんがあるだ!」お母さんがあるだ!

と、思はず叫びました。其のひょうしに目がさめました。起きて見ると、やはり一人です。

私は「あ、ゆめだつたかなあ」と思ひました。

ひわごうづら(賞)

香川県木田郡井戸校尋四

富田 福枝

おべんとうにかへると、おかあさんが、ひばちのふちにすわつてゐた。「だいま」といふと、おかあさんは、にこ／＼して、「あんな、今日となりのなちさんが、あにさんに、うづらを上げるといつてゐた。」と聞いた。私は「さうな、あにさんに上げるんなあ——」と、自分がほしさうにいつた。おかあさんは「あにさんにくれても、二人で飼ふたらい。」といつてゐるうちに、にいさんがかへつてきたので、私は「え、のう」といふと、あにさんは「何が」といつた。「となりのなちさんが、あにさんに、うづらを上げるといつた。」といふと、あにさんは「てんまい」といつて、手なすりかりた。私は、あにさんが手なすりいてよろこぶのが、大へんはらが立つので「そんなら、わたしにあの、ひわを下さい」といふと、あにさんは、うづらさへあつたらひわなんかはいらぬと思つたのか「うん、

ひわならやる」といつた。私は、それでもまだ氣にいらなかつた。學校からかへつて見ると、うづらは、ひわが、はいつてゐる中に、いつしよに、いれてあつた。ひわは、自分がさきからこゝにあつたから、いばつたふりをして、えさも自分がたくさんたべて、みてなれといふような顔つきでゐます。その爲うづらは、ひわにおちて、すみの方でじつとしてゐます。おかあさんは「うづらが、おちてゐるから、べつにしなければならぬ。」と、おつしやつた。あにさんが、箱の中に手なすりいて、つかまへようとした。ひわは、とびまはつたが、とう／＼しまひには、つかまつて、となりのへやにいれられた。

それから、あにさんがうづら、私がひわときめて、毎日二人で飼ふてゐます。

猫

兵庫縣出石郡小野校尋六

山本 幸一

とうにの事であります。白茶色の小猫が僕の家にきて、にやを／＼といつて

で猫の首を纏でく、りつけて、よいさ／＼と走つて川に流しに行つた。行きしな猫は目をく／＼とつぶつて、首をく／＼してゐた。川について流す所になつたので、もう一べん、猫の顔を見て「二三」といつて、ぼつとほうくつた。すると猫はぼつか／＼して浮いたり沈んだりして流れていつた。それからもどつて、また勉強してゐると、又裏の方から大きな盗人猫がにやを／＼といつて來たので「そりあ」といつて叱つてやつたら、どこへか行つたふりをして、猫は裏にあるいなきの所に隠てしまつた。僕はまた勉強しながらそつと隣子の方を見ると、盗人猫はだあまつて（だまつて）隣子の穴を破つてきよ／＼しながら歩いて來た。僕は知らん顔して、勉強しとるやうなふりをして見てゐると、かごびつのふたを取つて、頭の中につき入れるやうにして、飯を食つたので、僕は腹が立つた。又石ばつちをしてやらあと思つて、だーッと走つて行きてつかまへかけたが猫は隣子の穴から飛んででてしまつた。僕は急いで竹をもつて、裏口からぼうて行

きたが、どこにいたかわからぬんだ。僕はまた歸つて勉強してゐた。晩になつてお母が「ま、(飯)を食へ」といひなつたから「ひあ」といつて食ひに行つた。お母は手を出しなつたから、茶碗を出したら、お母はぐつと杓子でま、を入れたつた。そのおり、猫のま、食つた事を思ひ出した。そしてそれが猫の食つてゐた所らしかつた。けどそのことをいふと又叱られると思つて、だあまつて牛のたらしひにうつしたら、それを見てお母は「なんちゆうあほする(なるといふ馬鹿をする)もつたない。まわれども(もうお前なんが)ま、(飯)くはつしやれへん(食へさせばしない)」といひなつた。僕はおせんをなつて(しまつて)寝た。寝てから、猫がばかしにきたゆめをみた。

私の顔

滋賀縣膳所町宇錦大正町

山本 みゆき

(尋六)

鏡にうつつた私の顔。私の顔はこんな顔かしら?と考へて居ると、急に恥づかしく

ないゐたので、僕は勉強してゐるのにや、かましかつたから、座敷から急いで番をたておやうに行つて、さうと猫のれきに行つて、ぐつとつかまへた。こんといつて一つなぐつてやつたら、猫は目をどき／＼さして、にやを／＼といつてないた。またかといつて、今度は、猫を纏でく／＼りつけて、「はつちよい／＼」といつて、ばつちばつちた、いてやつたら、死にかけた。纏をほどいて、今度は猫を手で(手でも)もつて、ぼい／＼／＼といつて、一間先づきへほうくつてやつたら、又にやを／＼といつた。僕はまだくかといつて、今度は猫を纏で、なつめの木にく／＼りつけて、急いで家の中にはいつて、小玉あぢか(丸い小ざる)を取つて來て、く／＼りつけてあつた猫の纏をほどいて、小玉あぢかに入れてわらでふたをして、「石ばつき(石ばつき)家を建てる前、その敷地を堅くするため打つ／＼と、石ばつき／＼と」といつて、一尺程はく／＼り上げ、落ちてくるやつを又ほうく／＼り上げてやつたら、猫は小玉あぢかの中に、小便こいて死んでしまつた。そんな

なつて來ました。私の顔が笑へば、鏡の中の顔も笑ふ。私の顔がおこれば、鏡の中の顔もおこる。どこがお父さんに似てゐるでせう。目の所?鼻の所?口の所?おや、どこでせう……わからなくなつてしまひました。丸い顔、丸い顔!何故こんなに丸いのかしら?いつか姉さんがおつしやつた。私の顔は「うちわ」だつて、……にくらし。お父さんの顔は、丸くないのに、なんだつて私の顔は丸いのかしら。寫眞にうつつた顔でも、私の顔が一番丸い。私は、寫眞に向つて言ひました。何故お前はそんな顔をして居るの?うちわでない顔におなりなさい。そんな顔は、私の顔ぢやないよ……でもさうらしい。こんな顔でも顔がしら、人は私の顔をどんなに思つて居るでせう。「うちわ」の顔だなんて、姉さんはいぢわるだわ。姉さんだつて「しづちゃん」の顔よ。弟までが「うちわ」をかくて、其の中へ目、鼻、耳、口を入れて「これは姉ちゃんのだ」と言つて、お父さんや、お母さんや姉さんに見せに行きます。皆は「うまい／＼」と手をたゝいて笑はれます。その度に私の顔は、耳の根まで赤くなるのです。



信 通

童話の選後に

齋藤 佐次郎

○この頃の應募童話(大人篇)に傑出した作が少いのは残念です。本月などは、數に於ては随分多いのですが、推薦する程の作がありませんでした。で、前月推薦候補作としてとつてあつた足立孝平さんの「煙突掃除夫になつた男の子の話」を今月號の推薦作にしました。

○「煙突掃除夫になつた男の子の話」は特色ある作です。かういふ作に對する皆さんの批評を聞きたいと思ひます。

○尙、今月分の作の中で、特に佳作として挙げられ得る作に、伊藤三千夫さんの「敵になつた悪魔」大島知恵子さんの「土曜日の晩」鈴木敏夫さんの「お参り」川地榮一さんの「盗人の話」倉形四郎さんの「良坊」などがありました。

綴方の選後に

齋藤 佐次郎

○二ヶ月分一纏に選をしたので、非常な數にのぼりました。従つて佳作も多く、入選を決めるのに骨が折れました。本號に載せ切れない分は、次號の候補作として取つて置きます。

○兵庫縣の小野小學校からは、毎月優れた作を送つて來ます。本月は、六年級と五年級から六篇だけ送つて來ましたが、六篇とも皆、ものでした。入賞第一の「一から九までの物語」は、たゞしい筆づきの中に素朴な、線の太い所が見えて、讀んでいて、氣持がします。飾りつけのないのが、いゝのです。山本幸一さんの「猫」もその點で面白く讀みましたが、たゞあんまり殘ることはありません。

斷ずるの、眉を蹙めさせられます。「事柄」としては、まったく感心出來ない事です。

○南井ふじまさんの「夢」も、前に劣らぬいい作でした。全體として、よく統一されて或る哀感が漂ふてゐます。十六行目あた

云ふと、姉さんが「またい、や……」などと云ふ所は、いかにも夢らしい。

○富田福枝さんの「ひわとうづら」も、福枝さんの氣持がよく現はれてゐて愉快です。

○今月も男が女に負けました。

八月號特別記事

世界童話欄

〔告 白〕

八月號には編輯部大努力の「世界童話欄」を設け、世界の面白い童話を澤山に掲げます。頁も増し特別號を作りますが、定價は變りません。期待してお待ち下さい。

編輯室より

りの「そんな事云つて、おれよう、びつくりさせたがつたつて、おれアチツとも、びつくりなんかしんぞ……」と云ふあたりから、こたつを覗いてみるあたり、最も優れてゐました。ふじまさんが「それなら姉ちゃん、おれがうんと火を入れやうか?」と

○「金の星」が最近ますます活氣づいて來てゐる事は皆さんにも認めていたゞけることと思ひます。童話の方面では、今月號から毎月童話の大家三木露風先生の作を掲げ

ることになりました。

○童話の方では久米正雄先生の作をはじめ大家の作を續々と發表して來ます。挿畫には平澤文吉諸伯の特色ある畫を今月號から加へることが出來ました。尙、表紙畫は、岡本露一先生が御病氣であつたりした爲めに、お願ひすることが出來ませんでした。八月號からは執筆して下さる事になりました。

○長篇では川崎春二先生の「觀光の四天王」がはじまりましたが、作者の苦心の深いものだけに歴史物語として、皆さんにも喜んでいただけると思ひます。小島政二郎先生の長篇は、デューエル將軍の敵艦で「一玉國を争ふ」といふ非常に面白いもので、七月號から掲載のはづでしたが、挿畫の都合上八月號からはじめます。(齋藤生)

○本月號の表紙に、手をあげてゐる少年があらまぜう。僕は、この少年の顔が僕に似てゐるやうな氣がするので、「これは、岩間先生が僕をモデルにしておきになったのだ」と云ひました。すると夏君が、「いや、違ふよ、それは僕だよ。」と云ひます。「なんだい、僕だぞ」「なにを、僕だぞ」そこでさんさん云ひ争ふつた揚句、岩間先生の所へ行つて伺つてみたら「いえいえ、これは私の甥をモデルにしたのです。」と云はれて、ガツカリしてしまひました。(給仕)

童話と 童心句 研究 欄

心の断片

武田 幸一

「童話なんかつくって何になるんだい。君は
大人なのか、心が幼稚にあるのかわからない
れ。自分はいくつこんな事を友人や長年の人か
ら言はれる。心が幼稚にある。童心がある意
味だらうか、自分は其の度に進ぶのである。
「自分が作るんぢやない、心が感じるんだ」
其の度に此う言つてやるけれど、そんな人達
に言葉の意味がわかる筈がない。

又雑誌「金の星」を買ふと友人達は誰にや
るのかと聞く。「僕が読むんだ」と僕は其の
時言ふ元気が無い。親族の子にやると進口上
を言つたあとで自分の心を改めなくなる。

童心の無い者が居るか。決して無いと自分
は斷言する。親が子を愛する、すなはち童心
があるからだ。子を愛せぬ親こそ童心無き者
と言へよう。
花を讀みよる人こそ童心無き者と言へよう

教へ子を鞭打ち、足蹴にする教師こそ童心無
き者と言へよう。

童話は童心から起る微風であると言へよう
若葉に起る微風のやうに。大人の心子供に心
から童話は吹き起らなければならない。或ひ
は微風に若葉のゆれるやうに、見る聞くする
ものが童心にふれてゆれる時はじめて童話が
生れなければならない。
だから自分は友人達に童話をつくる事は決
してすゝめない。友人達は自分の童話観を侮
辱してゐるくらひだから。僕は自分を侮辱し
て居る友人達を其れ以上侮辱して居る。又其
の人達に同情したくなる。
「時を知らない人は枯木にひとしい」
誰か雑誌にこんな事を書いてゐた。自分は
同感だ。

雑誌の童話募集によく「新しい味のもの」
と言ふ言葉を見る。自分はそれがわからない。
童話の新しい、古いは、どこをとりへてさう
言ふのか。即ち新しい童話と言ふ意識で感
じた事を書く時其れに虚飾的色彩が影をさ
めて居るのを見逃す事が出来ない。
さうした童話こそ、中心點を失つた童話で
あらう、古い童話であつてもほんとうに心か
ら出た、古い童話に美しい影が何處かにひそ
んで居らないとはどうして言へよう。

童話研究欄への 寄稿を乞ふ

前々號より、童話研究欄を設けて、童話に
關する權威ある評論、感想等を毎號募集して
掲載することにいたしました。かうした企て
は、童話道の當然なすべきことであらうと思
ひます。童話愛好者にも大なる参考とならうと思
ひます。同欄へ寄稿の原稿は、なるべく簡
明に責任をもつてお書き下さることをのぞ
みます。ことに、童話と教育との一致研究に關
した、實際問題などは最も歡迎するところ
であります。尤も原稿の取扱は私へ一任して下
さることを願ひます。(野口雨情)

一三三



金の星社 七月號

出版だより

近刊書のお知らせ

○魔女の鳥

(名作童話大系ノ十三)

○しやんこくお馬

(金の星童話曲譜ノ十三)

○ギリシヤ

話 イリヤード物語

○孝行息子

(名作大系ノ四)

○父戀し

(童話讀本ノ五)

以上の五冊が近刊書になつてを
ります。この内「魔女の鳥」と
「しやんこくお馬」の二冊は既
に五月中に發行になりました。
尚この外に、これまで發行が後
れてなつた「金の星家庭文庫」と

「繪入、世界童話集」も發行の豫
定に入つてをります。

○魔女の鳥

金の星で大評判
だつた物語です。岩間とも枝先生
が澤山の挿畫をお描きになつて、
装幀も美しく出来て、それは、
美しい本になりました。世界名作
童話大系の十三篇です。西洋名作
書いた支那の童話で、めづらしい
ものです。是非御愛讀がひ
ます。(定價六十錢 送料十錢)

○しやんこくお馬

清水先生の作曲集で、唄は例の野
口雨情先生、装幀は初山遊先生の
この上ない美しいもの。曲目は、
「しやんこくお馬」「おめいと
おて」「お留守」「子供は風の子」
「因幡の白兔」「秋の夜」の六曲で
す。

何れも名作曲として評判の高い

ものばかりです。(定價八十錢)

○ギリシヤ

話 イリヤード物語

これは「オデッセイ物語」の前
篇ともいふべきもので、有名トロ
イ戦争の物語りです。ギリシヤの
大軍がトロイを攻めに進み海を越
えて出征します。そして、互ひに
血の雨を降らして戦ふお話です。
その間にはいろいろの神々があ
はれて、互ひにトロイとギリシヤ
に味方します。で、戦争は神と神
人間と人間との面白く戦ひになり
その間には、實に壯快な場面もあ
れば、またあはれな物語りもあり
有名な木馬の計略があつたりして
非常に面白いものです。

古代の大詩人ホーマーの作つた
もので、千古の名作として今日ま
で語り傳へられてゐます。「オデ
ッセイ物語」を讀まれた人は勿論
是非一度は讀んで置いて、話だ
と思ひます。(定價九十錢 送料十錢)

○孝行息子

沖野岩三郎先生
の童話讀本も、これでいよいよ第
五巻が發行になりました。ついで
第六巻も近日中に發行になりま

「父戀し」

はかつて本社から
發行して十數版を重ねた名作で、
作者は沖野岩三郎先生です。今度
全部の體裁を改め装幀、挿畫等、
全部岩間とも枝先生が新しく書かれ
て、この「少年文學名著選集」の
第四篇として發行になりました。
日本の少年文學の不朽の名作とい
はれてゐる作品です。是非御愛讀
下さい。(定價金一圓二十錢 送料十錢)

『金の星家庭文庫』第一巻

【近日發行】

いよ／＼發行

「金の星家庭文庫」は金の星社發行圖書の中で、最も評判のいいものを集めて、それを非常に美しい装幀をこらし、定價も極く安く、いつでも皆さんに大切に保存されるやうな良本を作るといふ目的で出版されたものです。發行された第一巻を見て下さったらずべてがわかりになる事と思ひます。

金の星社出版目録を差上げます。

出版目録の御入用の方は、ハガキで本社宛にお申込み下さい。早速お送りいたします。

立石美和先生著
○少年天才物語

(川上四郎先生畫)

久米絃一先生著

○少年探検家物語

(井上猛夫先生畫)

讀後感

『コロンブス』を讀む

府下淀橋町角第八七六

武井方 稻垣 秀邦

先日僕が、人買物語を貸してあげたT君が来て、『金の星發行の「コロンブス」を買ったが、もう讀み終つたから、君に貸してあげよう』と云つて貸してくれました。丁度今讀み終つた所です。少しばかり讀後感を書かせていただきます。いつもながら箱や表紙の美しいのは、兒童本中一番です。讀んでゐて非常に感じがよろしいです。僕等が讀んだり聞いたりした「コロンブス」のお話よりも、ずっとくわしく書いてあります。先日も學校の先生がお話になつたコロンブス傳よりも、何々深く書いてあるので大變うれしうございます。わづか一船乗りから身を起して遂にアメリカ大陸を發見した「コロンブス」の探検記であります。「コロンブス」を讀んで大發見に至らしめるまでには、實に涙ぐましいお話の數々があるのです。最初

大木雄三先生編
○アーサー王

騎士物語

(寺田良作先生畫)

大戸喜一郎先生編

○沙漠の魔女

(小林和郎先生畫)

『大勇士』を讀んで

千葉縣君津郡小根村

飯田 政二郎

この間、町へ出たついでに、本屋へ寄つて見ました。『大勇士』と云ふ本が目につきました。あけて見ると、これは僕で讀み終つたと思つてゐた『勇士ビョウルフ』の一生を書いたものだつたので、飛びあがるほど喜んで、六十錢を投じて買つて來ました。歸りの馬車の中で開いて見ると、先づ目についたのは、松政畫伯のかかれた美しい三色版の口繪でした。これは今、勇士ビョウルフが、恐ろしい人食鬼を退治するために船に乗つて、はる／＼と遠い外國へ渡る有様を描いたものです。軸に碎ける白い波、飯にさいやく大波小波の音は、勇士ビョウルフの首途を説つてゐるやうに見えます。ビョウルフ物語は、英國で最も古いと云はれてゐる英雄傳ださうです。私は、ビョウルフの壯烈な最初の場面を讀むとき、覺えず眼に涙が浮びました。

ましい少年で、僕はこの物語を、活動寫眞で見事がありました。本で讀むと、又別の面白さがあります。僕は、この物語の中で好きな所は、左の通りです。
一、ビョウルフが、わにの背中に乗つて、海賊の船へ行く所
二、ビョウルフが、大ぜいの子供達の世話をしてやるところ
三、大ぜいの子供達を連れて、船の中で、海賊達と大戦争をするところ
僕は、此處を讀んで、思はず手なりました。

勞働の少年を見て

會津山間の少年

『沖野先生』——僕は、この人の童話が一番好きです。『金の星』を讀む時も、沖野先生の童話を一番先に見ます。
『勞働の少年』……沖野先生の童話の中で一番面白かつた本です。これは聞くも哀れな春吉、岩吉二少年の勞働の有様をわいたもので、春吉少年のおとなしい性質、岩吉少年の腕白な性質が、ほんとによ

『竹取物語』を讀む

朝鮮京城若草町一〇六

河野 砥吉

何か面白い本が讀みたいと思つてゐた時、金の星社から竹取物語が出たといふ事を知つて、早速本屋へ行つて見ました。先づカラーム色の中に、美しい三色版のはりつけてある表紙が目を引きました。きつと面白いらうと思つて、買つて歸つて讀みますと、それはそれは何ともいへぬ面白いです。西洋の話とは違つて日本風な所が氣に入ります。殊にかぐや姫が色んな人達に世の中にあきさうもない物を取つてきてくれといつてみんなが色んな危険をおかして見つからず、にせ物を持つて行くこと

ブウ太郎鍛冶屋

府下大島町八ノ五四二

大木 柳花

武井武雄先生のブウ太郎鍛冶屋を讀む。
表題の童話の外數篇。何れも皆武井先生獨特の輕いやばらかいお話、なつかしみのある繪と相まつて、至廉の定價。餘り長いお話ではないので、小さい者もたいくつはしないであらうと思ふ。殊に装幀の美しさ、唯感なんする外はない。敢て讀書家並びに一般少年少女の方々に御一讀をす。

『ビョウバン物語』は面白い本です。
府下葉町上駒込傳中二二四
田中方 武井 富雄
ビョウバン、パン！なんと云ふ勇

童心句掲載外佳作

朝倉 卯一(東京) 山口 一夫(秋田)
大島知恵子(兵庫) 小林金次郎(福島)
松岡藤一郎(和歌山) 近藤 國男(東京)
深澤 武男(山梨) 鈴木 敏夫(愛知)
大橋喜代子(埼玉) 戸部 貞夫(長野)
松井雅夫(福岡) 中岡 家男(東京)
梅田雄太郎(秋田) 千崎千賀子(山梨)
濱野 星風(山口) 染谷 滋治(東京)
林 定二郎(岐阜) 西野 光兒(岩手)
高野 房一(埼玉) 飯塚 政雄(東京)
指 巖 昇(神奈川) 穴戸 功夫(東京)
新岡 勝(福島) 後藤 大介(宮崎)
山田 次郎(東京) 齋藤 好治(和歌山)
阿部 良寛(高知) 赤羽宗四郎(東京)
植田 梧々(夢)(東京) 諸田 梧々(夢)(東京)

綴方掲載外佳作

大柴 貞子(山梨) 吉村喜太郎(兵庫)
阿部 和子(宮城) 鈴木 隆俊(静岡)
片山 フミ(新潟) 渡邊 多枝(東京)
芝地 一弘(兵庫) 吉野 徳子(千葉)
山科喜代子(兵庫) 保坂 卓朗(秋田)
中里 素行(神奈川) 加藤 長吉(埼玉)
河津 三郎(茨城) 飯島 守夫(長野)
石川 徳二(埼玉) 古谷 きみ(茨城)
香山 和子(千葉) 谷井 きみ(茨城)
平山 和子(千葉) 造谷 正治(東京)
坂倉 末子(東京) 木村 静子(香川)

童話掲載外佳作

岡田美代子(香川) 三井ちのと(山梨)
伊藤 重久(静岡) 小島美智子(長野)
關屋 壽子(東京) 堀田 重忠(朝鮮)
山田 次郎(東京) 尾上 實(鹿児島)
小島美智子(長野) 中野 順平(愛知)
山村 秀夫(愛知) 寺部 しま(愛知)
山村 枝子(熊本) 菱山 達男(神奈川)
瀧正 春(東京) 細川 公正(石川)
吉田 直太(新潟) 矢 澤 徹(長野)

大人篇

佐藤 晴雄(青森) 小町 ゆみ(東京)
大島 秀夫(愛知) 岩 耕 耕一(東京)
平野 安五郎(千葉) 横山 英郎(東京)
はくしん(香川) 磯部 常治(不明)
秋葉 利勝(東京) 中山 武夫(東京)
鈴木 敏夫(愛知) 門田 洋一(東京)
佐藤源五郎(宮城) 雜古 末雄(兵庫)
鈴木 英夫(神奈川) 有吉 徳子(東京)
細川 公正(石川) 皆川 英(新潟)
阿部 和子(宮城) 増山 廣(東京)
松澤 中子(宮城) 長島 武雄(山梨)

童話掲載外佳作

大人篇

沖津 清流(東京) 石田 勝郎(秋田)
大槻 悦造(京都) 吉川 行雄(山梨)

金の星誌友募集

金の星の誌友を募集いたします。誌友には色々の特典や便宜がありますから、どうか振つて御加入下さい。ハガキで本社へお申込み次第、誌友規則書を送りいたします。

大島 清正(東京) やなぎひさ(東京)
柿沼 喜一(東京) 野田代志夫(静岡)
石倉 露造(山梨) 西野 光兒(岩手)
志村治之助(東京) 吉垣 克巳(熊本)
【子供篇】
坂本多喜造(兵庫) 望月 友治(山梨)
石川彌三(新潟) 矢時 雪情(長野)
藤井治二郎(東京) 武田 藤三(青森)

新誌友名簿

阿部 諒子(東京) 神山又三郎(千葉)
中郷分教場児童會(長野) 佐藤喬平(新潟)
阿部 美榮(三重) 清水 輝夫(群馬)
菊地 博幸(神奈川) 内田美わ路(茨城)
尾澤 利雄(東京) 松本 常三(千葉)
北野むめ子(岡山) (以下次號)

新らしく出た本

少年少女科學大系 兒童動物學(上)
第 四 篇 (松平道夫著、池上浩太郎)

皆様方におなじみの深い、『動物』のお話です。氣味のわるい大蛇が出てくるかと思ふと、可愛らしいお猿さんが出て来たり、さうかと思ふと、アルマジロと云ふ奇妙な動物が加ひだして来たり、それは、面白く面白く、動物園へ行つてみるよりも、モット面白くて、タメになります。誰も澤山這入つて来ます。子供用の科學讀本として、こんな立派な本はまだ見た事がありません。四六判一七〇頁、顔裝本、定價壹圓。東京市外郵便上郵送二八、金蘭社發行。

春を告げる鳥

本書は、文壇の大家宇野浩二氏の最も會心の作とする童話十四篇を集めたものです。面白い話、おかしい話、愉快な話、みんな寶玉のやうな美しい輝きを持っています。又その上『金の星』でおなじみの寺内萬治郎兼伯が、表紙や口絵や挿畫に、得意の筆を振られたので、まったく眼も覺めるばかりのあでやかさです。こんな書物こそ、可愛い子供には是非與へたいものです。(四六判箱入顔裝本、内装二五一頁、定價壹圓五拾錢、送料八錢、東京本郷、大日本雄雞聯合發行)

小楠公

○日本歴史寶庫物語 小楠公
(三島雅川著、羽島古山裝幀)
お待たの小楠公が、いよいよ發行されました。三島先生の歴史のお話は、例によつて確かな史實に基づいて書かれたもので、かつ比較にもならないほど立派なものです。若き身を君に捧げて、四條殿の戦ひに壯烈な死を遂げた正行の一生こそ、我々が何物よりも先きに知らねばならぬ事柄です。健實な少年少女の好讀物として、金の星社が自信を持っておすすめします。四六判箱入顔裝本、本文二〇三頁、挿畫三色版外多數、定價壹圓、本郷郵便町金の星社發行。

ナボレオン

○世界少年少女偉人 ナボレオン
(山野虎市著、羽島古山裝幀)
地中海の小島コルシカに生れた一少年がナポルトが、風雲に乗じて忽ち歐洲全土を統一し、一大帝國の皇帝として榮華を極めた得意の時代から、秋風に吹かる、落葉の如く、南海の孤島セントヘルナに寂しき最後を送るまでの變化讀まりな一大雄篇です。四六判箱入一五六頁、挿畫多數、定價九拾錢、本郷郵便町金の星社發行。



お前には度々頂きましてその度にお
證しやうと思ひながら、試験や何
かでついでそのまゝになりました。
お許し下さいませ。終に金の星の
発展をお祈り申します。(阿部和
子)

▼金の星六月號待ちかゝれてなりま
した。早速買ひました。未だ童謡
だけしか見てゐません。西岡水紅
さん、推読おめでたう。金子虹靜
さん、奮つて下さい。ついでの間
十六歳の正月を迎へたかと思ふ。
もう五月に近づてしまひました。
ぼくたちは一生懸命やなぎやな
りません。古村さんの論文はもと
に歸しう思ひました。瀧野川 燕
原 映一

▼金の星の昔縁お變りはありません
か。童謡欄はすばらしい勢です
ね。うれしく思つてゐます。大が
い新しい人ばかりです。でも、
青柳さんや阪野さんのお作が見え
ないのは、何となくさびしい氣が
します。お振ひ下さい。それからと
童謡と童心のお研究欄に私達にと
つて大さう有益と思ひます。古村
さんいろいろ童謡は好きでした。
珍らしいのです。では皆さんお
禮を大切に。さようなら。(T.K.生)

しい。そして深い印象を残した。お忙しな中に二度まで会いまたお逢ひ下さいます様に、社の事務に追はれて、御出立の際はお見送りも出来なかつた事心から残念に思ひます。先生、私の我儘な行為は幾重にもお詫び申し上げます。終りに先生のますゝ御健勝にて童話界にお奮ひ下さらんことを祈りつゝ、獨筆致します。長崎童話研究會 西岡水朗

▲上京後、餘りに多忙な爲め皆々さんへ御無沙汰してゐます。生活性格や物事に、も變動が來たです。私は今、只多忙な爲め黙々として働き乍ら研究を續けてゐます。私は六月二十日閣下版致します。その時なつかしい關西の方にお眼にかゝり、ないと思つてゐます。お便り、雜誌を下さる方は左配へお願致します。(東京市牛込區西町二十二 藝術市場社 名方利郎)

▲五月九日第四回金の星堂金句會開催。小林先生外十三名飯塚金句會家に會し仲々盛會。先生の選あり。終つて茶話會。(下谷區金杉下町六 後藤登三)

▲新緑の 若葉はザラ／＼と詩情豊にゆれてゐます。金の星の宿標お

友及人から面白い。『金の星は實に派活
に國の爲に大いにつくして行かう
と』金の星のために、自分の爲
と思ひました。本誌の読者となり
私も今より本誌の讀者となりま
したから、よろしく御願ひ致しま
す。横濱市野毛三 石川雪花）

◆金の星の發展を祝し。童話
壇の目ざしをいふ。發展はうれし
とす。金の星童話作家を昨年一
半と今年六月迄十八ヶ月の統計に
より、私は左の十氏を選んでみま
した。諸君御參考までに。

金の星十作家

名方 和郎	二十三點
湊 一 朗	十五點
阪野 潤二	十三點
青柳 芳二	十一點
島本 花明	九點
村山俊太郎	九點

の星を送つてもらつて居たのですが、お姉様からおくつてこなかったりまして、本社の方から取ります。どうぞ愛読者のお仲間に加へ下さい。そして今月から隨分下手なですが、投書させていただきます。では記者様にもお禮大大切に。投書の仕方をおくわしや便り下さい。(北海道北見國斜里港森野千代)

▼金の星の皆さま、誌上で初めてお目に應りました。私は以前から本誌を見てゐましたが、投書は未だこれが初めてです。内容の充實、實情欄の擴展、私達童謡愛好者にとつてこんな嬉しい事はありません。私も今後この機会に乘じてぜひ送らせてもらひます。次に同市の島本夫二兄御住所をお知らせ下さいませ。今度、交際して頂き度く思ひます。(名古屋市中區南長島町一丁目 松枝二朗)

▼突如其来!金の星、ほんとに「雑誌だわ」私はいかうさげないで、愛読者の諸兄姉妹宜教御指導下さいませ。(京都府熊野郡津渡 富川すゑ)

懸賞創作募集

【意注】童綴童 童童童

童綴童 童童童
心 方 野 口 雨 情 先生選
心 句 野 口 雨 情 先生選
童綴童 童童童
心 方 野 口 雨 情 先生選
心 句 野 口 雨 情 先生選
童綴童 童童童
心 方 野 口 雨 情 先生選
心 句 野 口 雨 情 先生選

（一般讀者への創作）

童綴童 童童童
心 方 野 口 雨 情 先生選
心 句 野 口 雨 情 先生選
童綴童 童童童
心 方 野 口 雨 情 先生選
心 句 野 口 雨 情 先生選
童綴童 童童童
心 方 野 口 雨 情 先生選
心 句 野 口 雨 情 先生選

定價 壹冊金四拾錢 送料 壹錢五厘
三ヶ月分三冊（送料共）壹圓貳拾錢
半年分六冊（送料共）貳圓四拾錢
年分十二冊（送料共）四圓八拾錢
但し新年號は特別號で五十錢です。お
御注文の節はこの分だけ必ず加へてお
送り下さい。
振替口座東京五九五九六番

【意注】金 星 社
▽御注文は必ず前金で御送り下さい
▽送金は振替が一番便利で御座います
▽切手代用は（電報切手）一割増しです
▽第何巻第何號よりと書いてください
▽住所姓名は必ず書き添えてください
廣告料は御覽會次第お答へ致します
昭和二年六月九日印刷納本（毎月一回）
昭和二年七月一日發行（一日發行）
編輯兼發行人 齋藤 安之助
印刷所 小 端 安之助
東京市神田區錦町三丁目二十五番地
電話 三三三三
發行所 金 星 社
振替口座東京五九五九六番
電話 小石川 三三八七番

英國汽船ネーブルス號が伊豆の海で沈没し
た時、救助した春日艦長太田大佐の勇名は、
世界に鳴り響いてゐます。（沖野先生の童話
『沈没したネーブルス號』をお讀みになった方
は、皆さん御存知です。）その日本の勇士太田
大佐は沖野先生著、童話讀本第四卷『海を越
えて』に對して左の言葉を寄せられました。

貴著『海を越えて』唯今紀州沖航行中に
拜見致しました。結構な本で、随分世の
爲、人の爲になるものと思はれます。吾
吾の微力も御影で何かの御役に立つのを
光榮とし、著者に對して特殊の敬意を表
します。

昭和二年四月廿八日午前

春日艦長

太田 資平

沖野岩三郎先生著・寺内萬治郎畫伯
裝幀・挿畫

童話讀本

四六列箱入美本
内容二〇〇頁
定價金壹圓
送料十錢

第五編 孝 行 息 子（近刊）

第一編 赤 い 猫

第二編 金 の つ る べ

第三編 笛 吹 川

第四編 海 と 越 えて

磨齒ンオイル

青い青いお空
白いく入道雲

夏が来た夏が来た。

碧いく海

白いく帆かけ舟

夏が来た夏が来た。

夏が来た夏が来た。

お齒を綺麗にいたしませう、

白い白い丈夫な齒にする

ライオンハミガキつかひませう。



寝る前にも

きつと齒を

磨きませう